明治三十二年九月六日發兌

女鑑



第百八拾八號

東京國光社

女鑑第百八拾八號

目録

口畫……高橋松亭
挿畫……同人

登代女



女學校女教師にのぞむ

東京は、教育の淵叢なり。教をうけ、學をみがかんと欲するもの、男女をとはず、多くは、東京にのぼり、學校を求め、師を求む。教の庭、即ち、東京を以てせらる。學びの門、即ち、東都を以てあてらる。男子には、流石に、いみじき學校あり。やんごとなき師もあり。學ををさめ、業を終へ、ますら男の子の花をさかせ、錦を着て、故郷にかへる人、また、少なからず。しかるに、女子には、學校あらず。學校あらざるにはあらず。所謂、良き學校のあらざるにて、學校と名くるものは、さはにあり。華族女學校、もとより、華族を養成する學校にて。通常の人の通ひも及ばぬ學校なり。女子師範學校、また、師を養成する學校にて、つねの女子を教ふるには如何。ある人、師範學校卒業生ならば、學も、能も、藝もいみじかるべしとて。や

がて。求めて娶りけるに、衣服など仕立つるに、たゞ、新らしきを旨として、ふるき物を洗ひ、つぎはぎて、仕立てなどする事をいとふ。一、以て十、之に準じて、凡ての擧動、大方かくの如し。堂にのぼり、書を講じ、演説し、人に接して論辨する等は、いみじけれど、實業に適するかど少ければ、其の人、いたく悔いて、遂に離縁に及び、孫兒の世まで、彼の學校の生徒を妻とすべからずとて、人をまで誡めけりとぞ。彼の學校の生徒、皆、かゝりとにもあらざらんが、敎ふるに辨を以てし、机上の學を以てす、勢ひ、茲に至るならん。高等の學校、また、高等の敎育を敷くを以て旨とす。人間、信に高等の敎育なかるべからず。されど、往々高等をあやまり。學問は、たゞ名のみにして、華奢を、高等と心得、位置の高きを尊び、富貴をやんごとなく思ひ、從つて、衣をかざり。食を撰び、形をのみ、玉とみがき、錦をかざる、心は何をみがきけん。學は、何ををさめけん。分くよしもなきさへあり。一般、かくの如しと云ふにはあらねど、又少しとせざる所なり。さても、實業學校のさまは如何にと聞くに、實業は、實業なれど、金錢を旨としける學校にて、其の

月謝袋などには、月謝は、なるべく、數ヶ月分前納をすべしとあり。おろかなる事ならずや。されば、此の學校の師たるものは、多くは、金錢を尊び、富貴の家の娘、まひなひをつかふ生徒は、少しは、學にぶく、藝拙くも、落第をまぬがるとか聞く。これ信か、信か、まことしからんには歎くべき限りなりけり。其の他、英、佛、獨等の學校かぞふれば、あまたあれど、完全なる學校は、一もあらず。殊に、之が教の師、けつ白公平のものはまれにして、多くは、位ある人の子にへつらひ、富める家の娘をのみ省み、金錢多きをよろこびてうけ、夏も小袖、もらふにはいとはじと云ふ人さへあり。口には、けつ白を稱し、うへは、れんを尊ぶと見せて、下は、慾深く。位あり。名あり。富る、貴き家の娘は、あとなるをも上座にすゑ、他の人には休むも、之には休まず。之が都合をのみはかり、而して、雨ふる日、風ふく日、雪ふる日ををかしてやまず通ひし生徒も、位なく、名なく、まづしきものゝ子は、之を省る事うすく、時間れくれしとて、またず、病氣なりとて講ぜず、貴族の家に出げいこれ行きしとて、いたづらに、足をのみ勞さする師さへ、げんにあり。嗚呼、何ぞ

不仁なるや。是等を、稱して商賣的教師と云ふ。金錢によりて教ふるなり。名譽によりて導くなり。何を教育家に、かやうのもの少しと云はまほしけれど、少なからず〳〵、あはれ、世の教育者よ、今一きは、ふるつて完全なる女子教育塲を設け、以て、とはつ國より、はる〴〵、東京に出でゝ、業を修めんと欲する生徒を向ふるに叶ひ、教へて耻ぢざる女教師あらん事を、我が社のひとへに望む所になん。



日本女子今後の覺悟（四）

三輪田眞佐子

所謂、十九世紀の後、全世界、人類の大問題たるべきものは、婦人の自由、及び、權理の擴張と緊縮に關する爭ならんことは、今日より豫言するを得ん。從ひて、わが國も、世界風潮の餘波を蒙るべきは、辯を待たざるべし。されど。天の、いまだ、陰雨せざるに綢繆せんが如く、豫め、わが女界に、至善にして、適切の進路を指南するこそ、急務

なれ。
不日、わが國に起るべき疑問は、自由結婚の利害、及び、義非ならん。元來、自由結婚の論は、明治十七八年ごろより敗北して、既に、公然と、これを口にするものなかりしかど、今や、內地雜居が、再び、その機發となりて、洋風心醉者中に、そを主張するものの起らん。亦、これまで、無文の俗人界には、露ばかりも、娘の知らざる間に、獨り、兩親、自個の利得を目的とする贈與的結婚の行るゝ非理も、往々あるとぞ。されば、その反動として、自由結婚論に賛成するものも出でん。

おのれは、洋風の自由結婚に反對するは更なり。亦、舊來の贈與結婚にも同意せざるなり。そも〳〵、結婚を以て、單に、夫と婦とが、各自のためにのみ行ふものとせむ、全然自由たるべきなれども、子は、親の分身にして、親ありて、後、子あるなり。然も、子は、親によりて、養育せられ、保護せられしものを、唯、突然結婚のみを、親に謀らずして、自由に行はんも可なりと言ふか。殊に、わが國の結婚は、祖先の血統を斷滅せしめざる義務をも含むを以て、遠くは、祖先を祭り、近くは、父母の意を向へて、配偶を求むべきものぞかし。昔、笠沙の崎に於て、邇々杵尊が。木花咲耶姫命に逢ひ給ひけるとき、詔り給ひけるやう、吾・いましを娶らまはしと、その時、命の御答に、われは

得まをさじ。父、大山祇神ぞまをさんと。されど、わが國典と仰ぐべき歴史は、自由結婚にあらざるは明なり。故に讀者は、たとひ、海はあせ、山はくづれん世とならんも、自由結婚論に迷ひ、皇國の民たる本領をな失ひそ。

近來、世には、己の位置を高めんため、あるは、家の財源を得んがため、夫、若くは、婦たるべきもの丶享くべき、修身の幸と不幸とを顧みず。婚を議する父母もありとかや。あはれ、そも、なは慈父、慈母と呼ぶべきか。亦、夫を撰び、婦を求むるは、新夫婦のためなるべきものを、舅姑の意見にのみ、委ねて、强ひて、結婚せしむる家庭もありとかや。そは結婚の目的を知らざるものといふべし。今日、これを改めざらんか、その反動として、自由結婚を望むに至らんも止むを得ざるべし。

公平の心を以て、上に述べつる、兩極端なる結婚風の長所と短所とを比較せんに、結婚を自由にせば、論理上、意氣投合するものを得る便あらん。されど、深く考ふれば、若き、男女は、血氣旺にして、一時の感情に制せられ易ければ、眞に、意氣投合するものを得んことは、實際上、難きが如し。況して、兩親の許諾をも得で、野合せば、禽獸に近き行爲と言はざるべからず。さればにや、民法親族論の第七百七十二條にも、子が、結婚を爲すには、其の家に在る父母の同意を得ることを要す。但し、男が、滿三十年、

女が、滿二十五年に達し、得たる後は、此の限にあらず。云々とあり。實に、法律すら、かゝる規定あれば、その道德上の要求は、更に、嚴正なりと知るべし。これに反して、父母が、子の結婚に干渉するは、結婚の精神に戻ると、一應見るべきも、父母は、政變を閱みして、經驗、多きのみならず、深き思慮もあり。且つ、我が、老後の餘命を托すべき、最愛なる子のため、などか好みて、惡緣の婚を結ばん。されば、實際上の結果は、自由結婚よりも適當なる配偶を得るならん。蓋し、未だ、何れにしても、以て標準とするに足らず。

物いひ

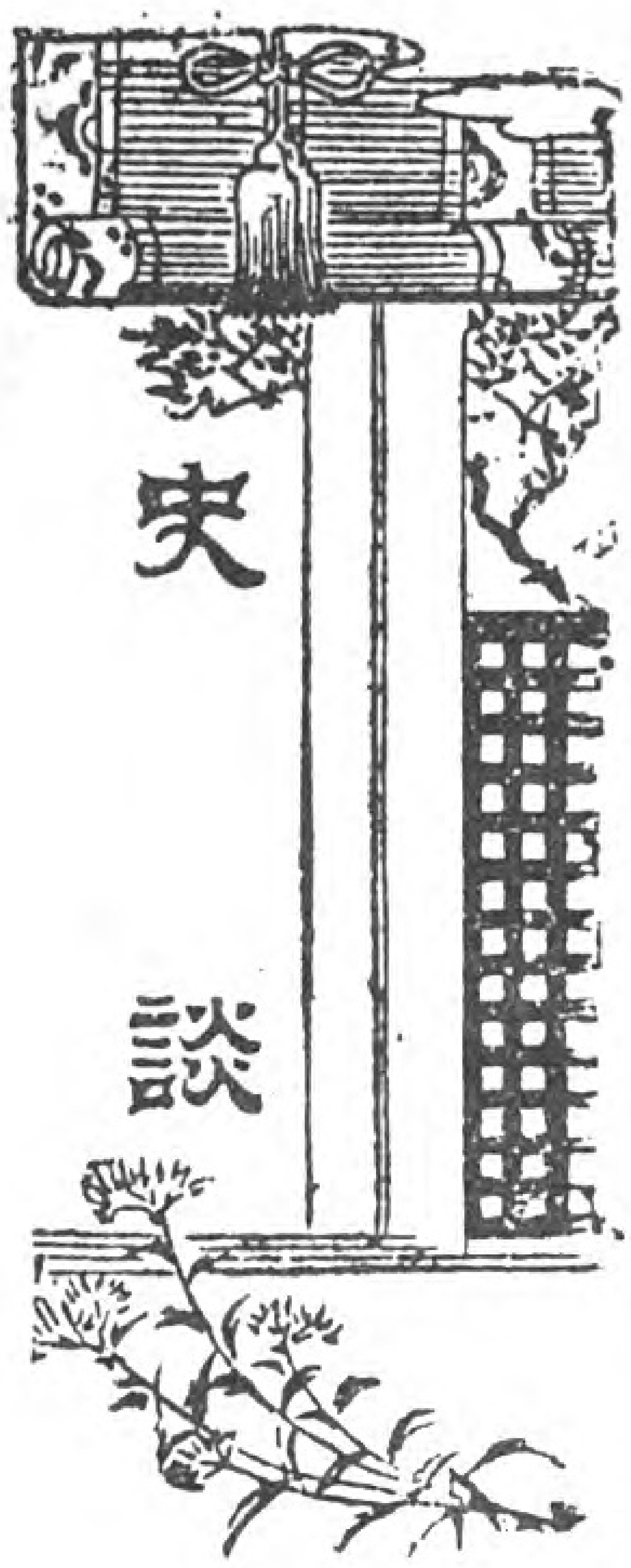
吉野眞澄

よに、言の葉ばかりつゝしまざるべからざるべきものはあらぬぞかし。ひとたびいひあやまれば、己が身は更なり。三族をも夷とぞいふなる。また、よき事をいひて、諸人にあふがるゝ、國の君ともなりけりためしも、外國には、あまたある事なり。さりとて、なき事をかまへ云ひて、人を僞るもあしく、あることとて、なにもかも云ふはよろしからず。又、いふべきにいはざるもわるきぞかし。或人云ひけらく、人には、二つの目と、二つの耳とあり。さて、口は、たゞ、一つのみなれば、見きゝすることよりは、ことば

をすくなくすべしと、信なるかな。世の庸の女は、いはでもありぬべき事をも、包ましげもなく云ひ、いふべき事をもいはずして。終には、いたく、あなづらる丶もとゐとはなる。古人の女子と小人とは養ひがたしといはれたるは、か丶る者をいへるなるべし。いつれの頃にかありけむ、江戸に商人ありけり。其の娘を大坂の、ある家にとづかしめき。然るに、商人、とみに不幸にか丶りて、家産を失ひ、妻子をさへさきだで丶、今はよるべなき身とならむとす。時に、長崎に親しき友ありけるに、事のよしを告げて、あはれを乞ふ。其の友、心うがりて、さらばすくはむと、はしき心をもて、そこはかの金を携へ、波風ををかして、舟出しつ。さて、大坂に泊きぬ。こ丶よりは、數多ののり合ひありけるに、熊野浦わたりにや來きりけんとおぼしきころ、長の舟のりに、つれ〴〵なるま丶、四方やもの話出でぬ。中には、己が功をたてし事、また、家富みて、寶ある事など誇り面にものがたるもありけり。其の中に、わがやかなる女さしでがましく、江戸の生れにて、大坂の、某の店に嫁ぎ、いつれともさうなき、ものもちなりとて、いたくの丶しれり。先の男、聞きて、友のわたりならむと、いぶかりて、詳しく、尋ぬれば、女はさはしらで、ねたり面に、あらぬ事ども取つくろひて、いひきかせぬ。これ、はたして、友の女なりければ。其の人、大にいきどほりて、思ふやう、余の荒き波路をいとはず、己

が業をすてゝきたるは、ともの苦をすくはんとてなり。今、聞けど、さはあらぬめり。あゝざむかれつとて、江戸までは來ずして、みちよりかへりけり。かのなやめる父はかくとも知らず。今日や來む。昨日やきなむと、指をりふせて、までども〳〵來べくもあらず。いとも、たしなみて、文のみ、しきて遣れとも、ひとたびのかへりごとだにこず。はては、せんすべしらに、たゞ西の空に向ひて、なさけある友を、かへりて、いたく、えんじそしりなどして、かこちたりしか、後に、其の事知られて、いたく、口をしがりきとぞ。あゝ、多言こそ、おそるべきものなれ。されども、云ふべきにいはざるは、こも、禍をまねくもとゐとなる。いにしへ、皇孫のあまくだりたまひしとき、天宇受賣命、猿太彦神と、伊勢の佐那田にくだり給ひて、志摩に出でまし、諸の魚どもを集へて、いましら、天神の御子の御にへに仕奉らんや。と問ひ給へど、皆、よろこびて、仕奉らむと申すを、たゞ、海鼠のみは、いらへまをさず。あまたたびとひたまへども、答へ奉らざりければ、命、大にいかり給ひて、緒かたなをとりいでゝ、海鼠の口に向ひて、此の口や答せぬ口とて、かきさかき給ひきとなむ。人にありせば、身をも、八つざきにせられましを、いとも、かしこき事ならずや。すべて、物いひの愼むべき事かくのごとし。話は、一たび云ひいでたらむには、こは云ふに非ざりきをと思へども甲斐なし。形も、い

ろもなければ、よべどもかへらず。文ならねば、焼きすつる事もえあたはず、天地の極まるかぎり、よきも、悪しきも、かたりつき、云ひつきゆかるゝものぞ、古の聖、終日、もの云ひて、憂をのこすなかれといへり。さいはむには、人、朝となく、夕となく、幾度、口を開くに、かれこれ心やりせむには、いとうるさしなどおもふも有らめど、決して、然らず。只、己が心にもあらぬ事、または、悪行せし事どもを掩はむとていふは、さもあらめ。たゞ、心に、一の信を鎮座めて、さて、折々に思ひて、物いはむには、事もなきものぞ。



登代女

鹽井ふく子

年々、歳々、花相似たり。歳々、年々、人同じからず。

げに果敢なきは人生、はかなきは人生、登代女、詩人にあらず。たゞ、信濃なる佐久郡八滿村の百姓定吉と云ふものゝ妻にて、一字、一點をもわきまへぬ賤の女ながら、嫁して、夫に貞、舅姑に孝なりけり。げに花よりも果敢なきは、人の玉の緒、一朝、夫は峯のあらしに誘はれて、明年、花は開けども、又あらぬ人となりはてぬ。一子あり源五右衛門と云ふ。なほいはけなし、舅あり、老いたり。姑あり、おとろへたり。人

は、之を捨てゝ、他に嫁げと云ふ。なさけか、なさけならぬか。登代女は、人の言の葉におまんせず、一すじに舅につかへ、偏に姑をいたはり、二人ともに足ひえて、いねわびけれど、登代女は、夜毎にそひねして、その足を暖かならしめ、及ばずながら、甘きをすゝめて、腹をも果然ならしめ、をかしき物語りして、子に先だゝれたるうさを忘れしむ。而して、身は、糊口にまとふ。三人のすきをはかりては、春のいとなみ、夏のうゑつけ、間草を刈るより、収獲等、身ひとつにとりて、期を失はず。折りしも、秋の事のいそがはしく夕月のかげ傾くまでも、庭に下りたちて、稲をかりけるが、姑なやましくやありけん。心なくも、登代女を側によびて、その膝を枕にして、心よくいねたり。身ひとつにあまる収獲も、何をもうちすてゝ、登代女は、たゞ、姑がね入りたる面をうち守りて、つくづく歎息、たゞ、物靜かに、息をだにころして、姑のれのづから目覺るを待ちたりとぞ。萬事をさしおき姑をいたはりたる、此の一事を以ても知らるべし。

のそ子源五右衛門、かつて、庭の何やらん、木を人より請ひ來りて、己れが座にうつしうゑ朝夕に水かひたのしみけるが、舅、七三郎、草を刈るとて、老の目のみもわかず、鎌にてかりすてけれど、源五右衛門、稚心のわきまへもなく、聲立てゝ泣きけるを、登代女、そつとかたへに呼び、花は、またも、咲きなん。老いぬる人を、いかでか、再び、見まゐらすべき。さやうに眼も見えまめで老いにたるをなげきこそはせめ、花きりたりとて、いたくな泣きそと、舅にもしらせず、まめやかに輸せしに、流石、心なき童子も、涙の色をかへて、祖父が白髮をながめけるとなん。あはれ、此の一言、おのづからに、半死白頭の翁をあはれみをしみたる、深き心の底のくまれて、我袖も、涙にひたるむかりになん。その孝養の深きを、領主、牧野周防守に聞えし者のありけるに、周防守も、いたく感ぜられて、寛永元年、春三月、籾をあたへて、賞せられし

とぞ。あはれ、全盛の好顔子、半死の翁をあはれむ、登代女の如かれと願うてなん。

鳥居與七郎の妻

山本正周

朝倉義景の臣、鳥居與七郎の妻は、川合安藝の守の妹なり。嫁してより、半年ばかり過ぎけるに、主君、朝倉氏は、織田信長と合戰に及びしが、屢、敗軍に及び、鳥居與七郎をはじめ、三千餘騎、悉く、戰死し、淺倉式部大輔は、主君、義景を斬りて、信長に降りけれど、信長の軍兵、一時に、城へ入りこみて、亂暴せり。此の時、與七郎の妻は、年頃十七八歳にて、みめかたち、世に勝れたりしかば、軍兵ども捕へて、之に戲れんとしけるに、妻は、涙を流して、いふやう、妾が父も、夫も、皆、刀根山の城にて討たれたまひ、母君も、姉上も、ちりぢりになりたまひて、自らの事、いかにと案じ給ふらむ、願くは硯なども貸したまへ、其の御方へ、露の命の、かゝるさまを知らせまゐらせんに、屆け給はらば、此の上もなき御恩なり。其の後にこそ仰せに從ひまをすべけれといひけるにぞ、乃ち、矢立と紙とを與へければ、文かき終りて、是を傳へたまはれと言ひすてゝ、傍なる古井に身を投じて、死したりけり。軍兵ども、大に驚き、あはてふためきて、之を救ひ上たりしも、已に、事切れて爲すべきやうなし、遺し置きたる文書をひらき見るに、其の奧に、

世にふれどよしなき雲ぞおほひけん
いざ入りてまし山の端の月

と、一首の歌を記しけれど、いかなる猛き武士も、みなあはれを催ほし、鎧の袖を濡しけるとなむ。



家政

茶の湯

茶禮初學（前承）

孤峯庵篠仙齋不羨　閲
葦雄

暁の茶の湯の事

一客、七ッ半時來る（今の午前五時）路次は、夕七ッ半より、掃除なし置、暮方より不殘、火を燈し置て、五ッ時頃に消火し、（今の午後八時なり）暁、七ッ半頃より、又々、燈火付置なり、（但し、宵よりとも、し置筈なれども、當時は、略して客の來る前に如此するなり）

一路次向は、夜咄の通りなり。數寄屋は行燈なり。暁の茶禮にかぎり、數寄屋は、不レ殘、戸を入るなり。

一客來り、主迎等、客の入様、夜咄の通りなり。

一主前、茶點仕舞底を取り、炭するなり。夜明け能き頃に、突上げ、窓を揚げ、燈を引膳出す、（但し、突上げ、窓無レ之席は、窓の戸明り請け宜き方を明るなり。前茶より、炭を仕舞迄、夜明克き頃になる様心掛べきなり。

一炭の時、釜を勝手へ持入り水を加へ、釜掛るなり。當時にては、湯の上へ水を入、湯、ざつとふかして、持出かけるなり。（但、此の仕かた、夜の中は、昨日の水、夜明けて後は、今日の水と替る故なり。

一掛物、花、有レ之なり。其の外變る事なし。

一夜の中は、寛々といたし、夜明て、中立后は、さらさらとする事習ひなり。總て、夜籠の茶禮は、六ッか敷ものなり。主客、ともに功者ならでは出來が

たし。

（但し、宵に、釜かけ置て、湯の煮たる時、埋火に致し、置き、客來りて、此の火をかきひろげて、釜を煮たゝせて、迎に出るなり。

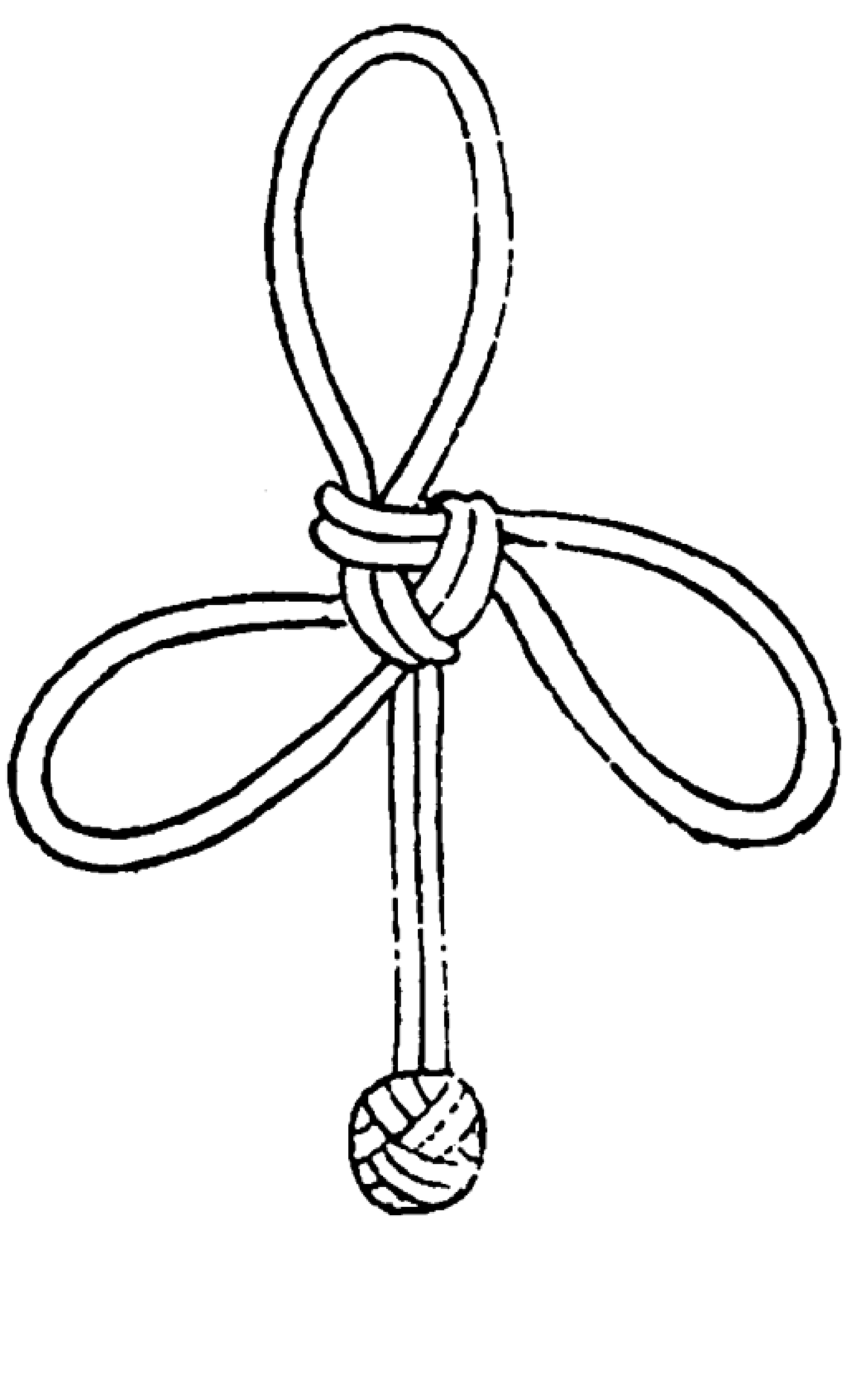
註釋、不羨曰、此の曉の茶の湯は、茶禮十種類中の尤、困難なるもの、主も、客も、非常に六ッヶ敷場合の性質を含有せるものなり。是を奈何と云に、全部の半を、夜半になすもの、特更に、午前五時の事なれど、勿論、徹夜して、其の設計方々從事しなくつてはなりません。何と大變ではありません歟。男子でも、今の薄弱生には、迚もつとまりません。況や、婦人には、又、難と云ても誣言にはあらざるべし客婦も、拂曉に起出て、茶に往と云は、容易になし得べき事ならん。婦人は、起床、早々、手水頭髮の搔撫、化粧の所作、着衣の次第も、男子と比較すれば、中々に面倒のもの也。前日より、其の準備をせではなりません。事に、曉の茶は、爐の邊に、専ら催すものなれど、寒氣の時候、多かるべし。すべて、準備向、鞅掌するには、修業大成の人にあらざれどやりきれません。第一、此の茶の習事とする處は、本文、四條目前茶と云ふは、則薄茶の事也。其の薄茶を點任舞炭するなり。炭、濟みて、膳部を出すに至り、夜明切て、日出の時を、其の適度とす。何とさう甘くいきませうか。其の邊が能くわかり、手に入たる人ならど、此の註釋も、無用なるべし。夜不明中は、寛々とし、夜明たらば、さら〳〵とせよと、是も、其の調子、未練の御婦人には六つかしき事なり。雖然、是は、重に、客方に係りたる文字なり。乃、客方、さら〳〵とする時は、亭主も、其の意を得て、其の運にせねばなりません。既に本文にも功者ならでは、難爲と、戒めあり。宵に、釜掛置て、湯の、十分に煮たる時埋火に致し置と云ふは、爐の四方の灰を搔上げ烈火の灰の中に埋め置なり。又、釜に、十分に水を差置べし。夜中に煮減するものなり。底

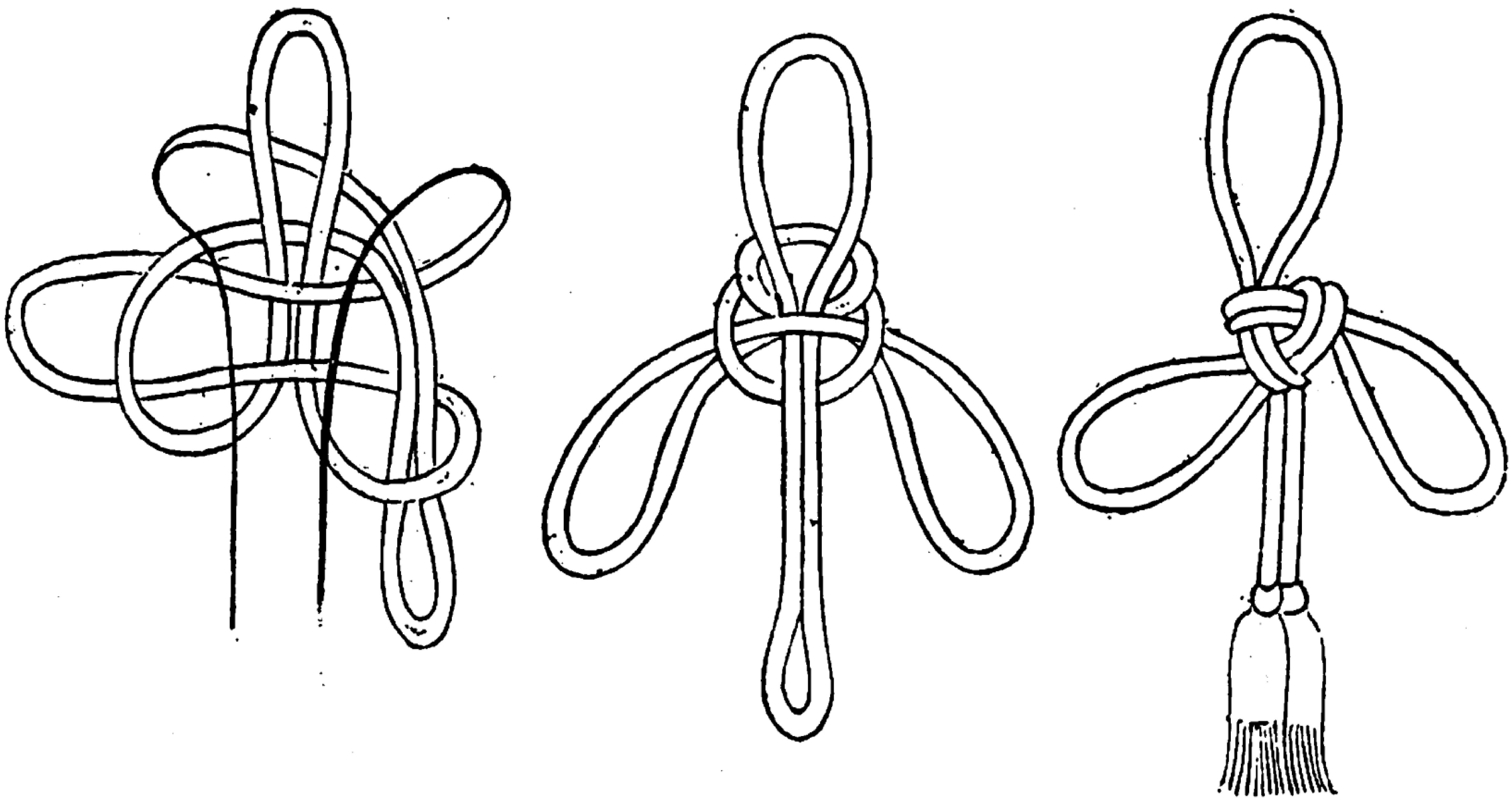
で、翌日、客來らば、此の火を披げ、爐中の体裁を直し、見苦く無レ之様、掻上げ繕へ、火不足ならば、炭もさしてよし。香も焚て、而後、迎ひに出るなり。其の外夜中は、手燭の用意して、置べし。夜明たらば、雨戸を迯し候場合も事馴たる半東を遣ふべし。料理向も、霄越に設置故、餘り手のかゝりたるものは、不、面白一主婦君の技量の顯出する場合なり。編者、觀客令孃婦君に可レ謝は、茶禮初學の註釋を書始めしより、數號を重ねたり。能も退屈を不レ生閲覽を賜りしは、予老の幸福僥倖、是より大なるはなし。以、庇蔭一、先、茶の湯、十種の註解、大略を竣効せり。何卒、茶道は、何流の御方にせよ、茶の大主義に至りては、佛敎の釋迦に於るが如く、利休居士を遵奉せずんばあらず。其の旨趣を解し、假初にも、輕佻浮渺の行なく、一手前中、數十條の一つだも、明細緻密に點前せば、其誠意、自ら茶味となり。物外の妙味を貯ふ事を得ん。其の人は、自然、優美、高尚、上品位を維持する事を得べし。尚、次號より、圖式を示し、諸手前の敎授にかゝるべし。愛覽を給はん事を希望す。

結方

中島義一寄

三つからみ一名つくはね結びと云ふ、





是羽ねに似たるより、名けて、つくはねと云ふ。頭はむくろじに擬すと翠香女史の新案とありて、至極面白き事なるが、余は以前より、三つからみとて、人に敎へ來たれども、こゝに出す。

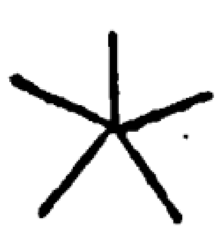
たちぬひ

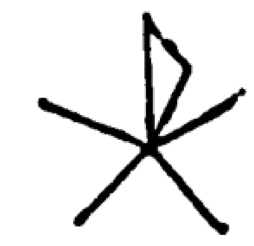
西山たい子

守りぬひ

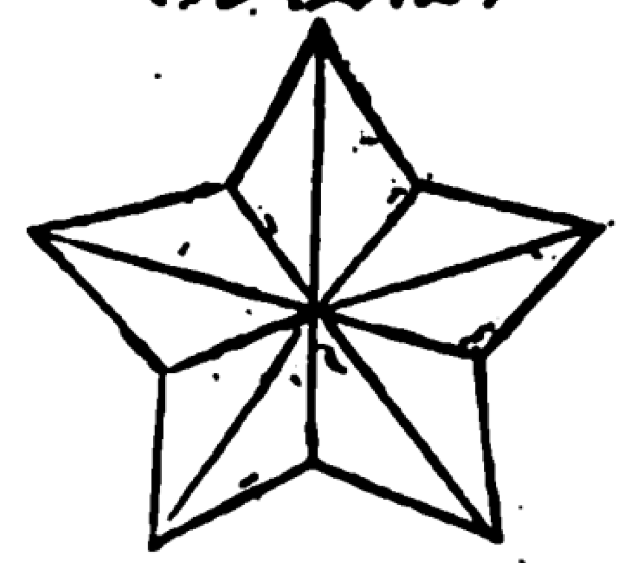
守りぬひは、乳のみ兒の背に、糸もてぬひつくる飾りにて、さま〴〵あり。左に其の二ッ三ッをあげん。

桔梗形

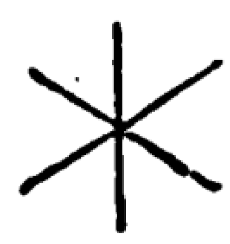
桔梗形は、最初、糸にて、圖の如く張りをかけ、次に裏面より、その張りのはしに、糸したる針を通し、張りと〳〵の間の眞中に、此度は表より、

その針を裏にぬき、又、裏より、中心に通し、中心より、張りと張りとの眞中に通す、即ち圖の如く、五方にかけ行くべし。さすれば、即ち、かやうなる形をなす、之を桔梗形といふ。又、張りをかけたる次に、はりより張りの眞中に亘し行きて、後に、五方を、中心にあつむるもよし。

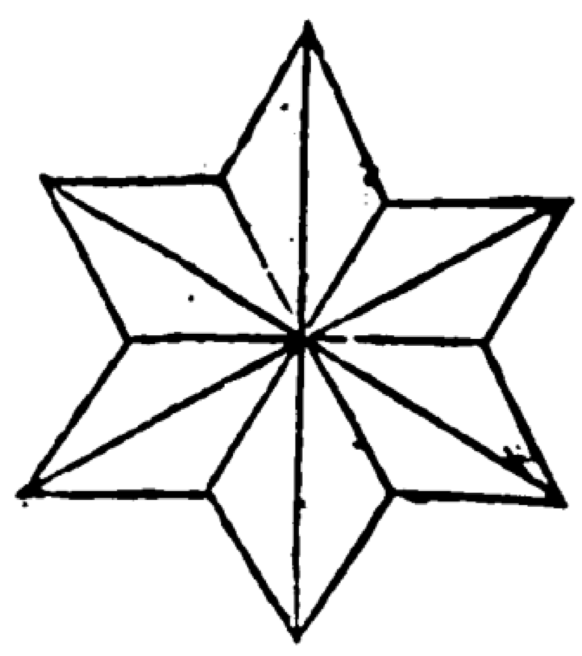
（桔梗形）



麻の葉形

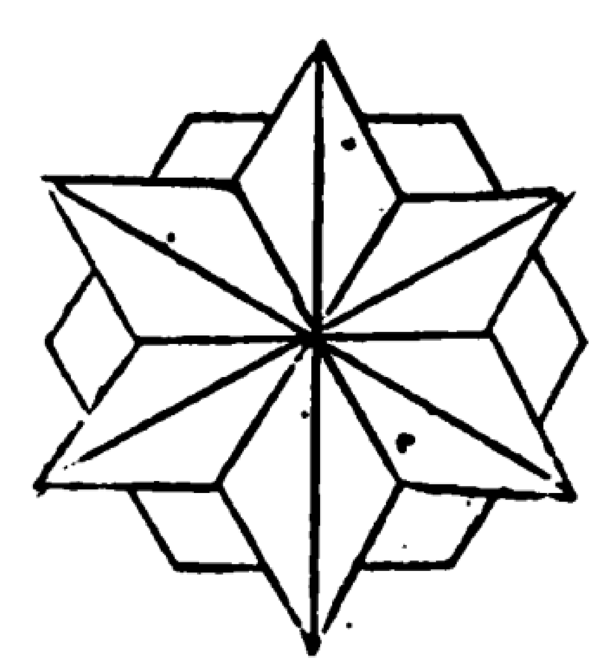
麻の葉形は、桔梗形に、一角多きのみにて、即ち、最初に、圖の如くはりをかけ、桔梗形をぬひし如くに、順次になし行くべし。さすれば、即ち麻の葉形となる。

（麻の葉形）

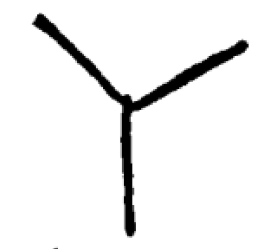
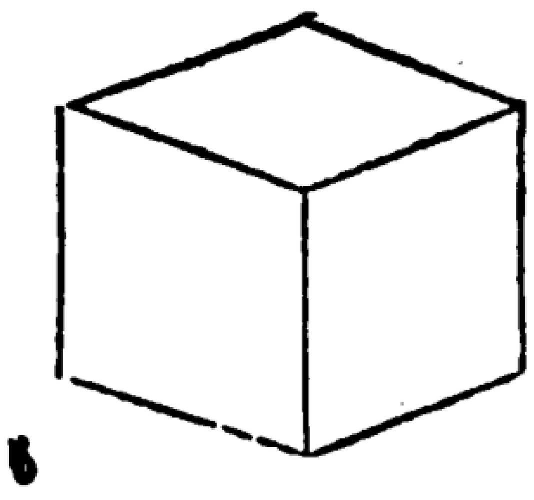


之が麻の葉形の角々の間々に形のひれをつけたるを、二重麻の葉形といふ。

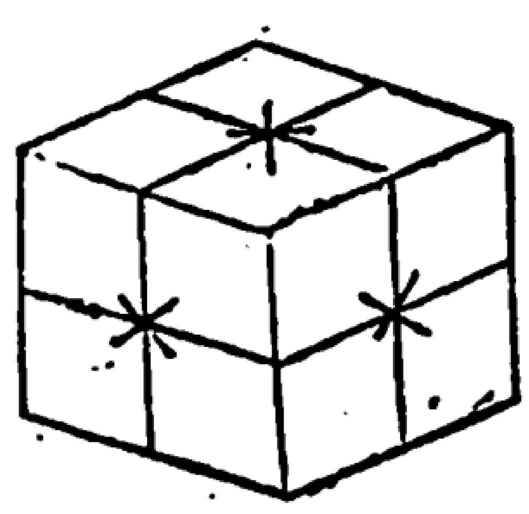
（二重麻葉）



三菱形

三菱形も、まづ、初めに、圖の如く張りおきて、次にそのまゝはりを圖の如く菱にぬひ、その菱形の眞中に、各、十文字に張りをかけ、その十文字にかけたる眞中を、小さく、十の字に留むべし。左せんには、左圖の如き、三菱形を得るなり。尚よろしく工風あれかし。

（三　菱　形）



だいどころ

季節料理

雛鶏と冬瓜の葛煮

雛鶏の毛を剝き、骨附のまゝ、五分程にきり、鍋に投れ、水を入れ、火にかけ、沸たちたる時、上に、かす、浮みあがりたれば、金杓子にて、かすをとり、しばらく煮たる後、冬瓜の角に、きりたるを、投れ、味淋煮切醤油にて、味をつけ、葛を、水にて、ときたるを能程に投れ、生姜の絞り汁を加へ、丼の類に盛りて、食すべし。

冬瓜の風呂吹

冬瓜の皮を、厚くむき、一寸角位にきり釜にてゆで、やわらかくなりたる時、器に盛り。胡麻、味噌にて食す、

芋茎と、枝豆の胡麻あへ

ずゐきの皮をむき、一寸程にきり、ゆでゝ、水氣を絞り、酢に浸し置、白胡麻を煎りて、能くすり、味淋の煮切、醤油、酢にて、味をつけ、枝豆をゆでゝ、はじき出し、芋茎と、いつしよにして、あへるなり。但、芋茎を、ゆでるときは、鍋の蓋をとらぬ様にすべし。

小鰺の酢の物

小鰺の、頭をとり、三枚におろし、腹の骨をすき去り、両面へ、薄鹽をふり置き、冬瓜を、薄く、たんざくにきり、鹽をふり、別々に、酢に、浸し置、鰺は、皮を去り、ほそくきり、たでは紫蘇抔、交ぜ合せ、器に盛り、甘酢を、かけて、用ふべし。

ふくさ芋

新芋の、なるべく、小粒なるをゆでゝ、味淋醤油にて、味をつけ、弱火にて、能く煮たる後、薄葛をかけて、用ゆべし。

栄花園

秋の草木いろ〳〵　（四）

これまでは、其の月々のをあげきたれども、此たびは、凡て、三秋にわたるものをあげむとす。

○柾　まさきのかつら。まさきもみち。此の文字は、正木の萬葉がきを、二つ合て作りし、日本の字也。まさき數種あり。一種は、蔓生のもの紅葉して、冬落葉するもの、これ、眞の柾なり。大和、金剛山、いこまよし野及び、畿内の山に有ものにして、人家に植うる物にあらず。人家の籬に植うる正木と違ふ也。

歌　古今

深山にはあられ降るらし外山なる
まさきのかづらいろづきにけり

○荻　すゝきの大なる物なり、俗に鬼茅とも云ふ。風に葉のすれあふ音の秋かなしく聞ゆれど、和歌には、大かた、風をむすべり。蘆荻といふて、水邊にも、山野へにも、又、庭砌に生ず。曠野の草なから、庭際に植えて、葉のそよぐ音にて、風のさゝやかなるを専ら賞す。

歌　玉葉

たそがれに物思ひをれど我やどの
をぎの葉そよぎ秋風ぞふく

○薄　しのすゝき。一もとすゝき。鷹の羽すゝき。尾ばな。すゝきとは、草の、多く叢りたるを云ふ也。草、多くあつまる物なれど、終に、此の草の名となれり。大なるは、長さ、四五尺にもおよべり。八月、白き花を開き、穂をなす、形、獸の尾のごとし。故に尾花と云ふ也。畿内にても、麥藁米わらの、高く積たるを麥わら薄、藁すゝきなどいへり。是も、多く、あつまるをいへり。鷹の羽のごとき彪あるもの鷹の羽薄といふ。一本すゝき、一村すゝき、同じものなるべし。然れど

も、今、種樹家にては一本すゝきとて、別に變生の物有り。全く、近世の事なるべし。篠芒とは、いまだほに出ぬをいふとぞ。しますゝきとは、竪彪あり。

歌　夫木　　顯仲

みこもりにほにはいでねど去の薄
風にはえこそすまはざりけれ

同　同　　定家

うちしめり薄のうれいつもりつゝ
にしふく風になびく村さめ

○糸薄　葉細く糸のごとく、長さは、四五尺に及ぶ、むらかり生ず、すゝきと同じき花を生ず。

歌　夫木

底もせに玉ときちらす白露も
みだれてぬけるいとすゝきかな

同　續古今

糸すゝきてなたかなたに植置きて
あたなる露のたまのをにせん

○葛葉　眞葛、くずかづら。眞葛とも云ふ。多く、秋風ひるかへるとよめば、秋季とせしなるべし。蔓長く、葉その蔓に付きて、薄くやはらかにて、表あをく、うら白し、秋風にひるかへり、裏葉のみ見ゆるが多けれど、歌人、葛の葉のうらみと詠みて、人の恨の秀句とす。

歌　夫木

たまさかに行きあふ坂の眞葛すら
まだうらわかしうらみたてしを

九月手入すべき草木

此の月になれど、ありとある草や木は、其の發育をとゞめ、己がむき〳〵其の實色づきそむるなり。此の時や、分栽移植などをこたることあたはず。分栽すべきもの

牡丹　芍藥　山丹　百合　木瓜　石竹　木筆　玫瑰
水仙　石榴　梅桃　紫荊　剪春羅　木賊　一ら旗

移植すべきもの、

すべて、分けうゝるものは、皆、移し植うべし。

牡丹　木犀　枇杷　木香　枸杞　銀杏　桃　梧桐
李　杏　梅　剪秋紗

挿木にすべきもの

朮香　薔薇

接換すべきもの

牡丹　薔薇　桃　垂絲海棠

壓條にすべきもの

玫瑰　木香

百合の輸出するもの

百合には、食用、及、賞花用の二種あり。賞花用に供するものは、其の種類、頗、多く、花形、色澤、千差萬別にして、現今の種類、三百餘種に達し、本邦に、自生、及、栽培するもの多きのみならず。歐米諸國に於ても、數多の種類を有し、近年、賞花用百合、球根の、外國に輸出せらるゝの、其の數を增加し、他の作物に比して、利益多きが爲め、農界の、一大流行物となれり。

現今輸出の種多き中に

白鹿の子　赤鹿の子　鐵砲　長太郎　夏透　樺透
重代　黄平戸　峰の雪　博多　立田　鳳凰閣　晩生
鐵砲　黄姫　赤姫

などは、尤も、よきものとて稱せらるゝなりと。

學園



漢文學講義（二十一）

大林弘一郎

十、遊比叡山　齋藤正謙

こゝに揭げんとする文は、拙堂翁が、京華游錄中の一節なり。こは、もと、一篇の日記なれど、もとより、他の遊記文とは異なり。之を見て、日記

の一體を知るべし。

十九日。遊二比叡山一。山在二京師東北隅一。爲二王城之鎭一。故稱二艮嶽一。巳牌。出二都門一。由二今出川一行三里所。抵二八瀬一。地僻在二山麓一。風俗醇朴。男子不レ去二頭髮一。婦女戴二薪材諸物一。徃賣二都下一。憩二一茶肆一。主人道。村民皆以レ供二事王府一。免二一村租税一。並受レ領云。

十九日は、文政九年の三月十九日なり。比叡山は、京都の東北の方にあたりて、むかし、桓武天皇の都をうつさせ給ひし時、傳教大師が、支那の天台山のかたをうつし、王城鎭護の爲に、寺を建て、延暦寺と名つけたりしより、永く絶えずして、名高き所となれりき。さて、又、艮の隅にあるゆゑ、艮嶽とも稱せるなり。巳牌は、今の午前十時なり。その頃に、京を立ち出で、今出川を過ぎて、三里ばかりゆけば、八瀬といへる村にいたりぬ。このあたりは、片田舍のことなれば、風俗も、まことにあつく、質朴にして、男子も月代をそらぬもあり。女子は、薪などを頭にいただきて、都に出で、之を商ふなり。むかしより、大原女といへるは、このあたりに大原といへる村もあるゆゑなり。さて、茶店を見つけて、ゑでし、こゝに休ひしに、店の主人語れるやう「この村は、皆、叡山の座主、法親王の御用をつとむることゆゑ、一村の租税は、すべて免ぜられ、また、別に受領するものもあることなり。」と。極めて、簡短に、かける所、甚、面白し。かゝる文は、簡淨なるを貴ぶなり。

出レ村數十歩。即入レ山。險甚。詰曲而上。五歩一立。十歩一息。喉中喘々作レ聲。凡行十八町。抵二元黑谷一。路漸平夷。過二淨土院一。佛堂前置二大銅盤一。其上設二一圓珠一。泉滃然仰出。掬飲レ之。清冷駃レ齒。觀二相輪塔一。高數十尺。飾以二鎖金一。輝二映山谷一。過二釋迦堂一。戒壇。講堂。遂抵二中堂一。尤爲二雄深一。堂下有二殘雪一。山之深。堂之

大可知矣。周覽而反。

八瀬の村を過ぎて、數十歩にして、やがて、山に入りぬ。その路の嶮しきこと甚しく、屈曲して、(詰は屈なり)上り行き、五歩に一たび立ちて休ひ、十歩にしては息へども、喉の中くるしくして、喘ぎ〳〵て、自ら聲をなせり。凡十八町ばかり上りて、元黒谷にいたりぬ。この邊より、路も、次第に平かなりき。それより、淨土院にゆきて見れば、佛殿の前に大いなる銅盤を据え、その上に一個の圓珠を設けたり。これより噴き出す泉は、滃然として、燦に噴き上げ流れ出でたり。手にて、之を掬びて飲めば、清らかにして冷かなること、齒を凝すが如くなりき。それより、相輪堂の方にゆきて見れば、高さは數十尺もありて、黄金もて、装飾を施したるさま、實に、いはん方なく、山谷にかゞやき渡るばかりに思はる。それより、釋迦堂戒壇、講堂なんどを見て、中堂の方へ進みゆけば、この中堂こそ、多くの建築物の中にて、いとも大いに奥ふかく、すぐれたるものなれ。堂の下には、雪の殘れるもありて、山の深きことも、はた、堂の大いなることをも知られたり。かくて、ここかしこ、周く覽終りて反りぬ。

上四明峰、得一大石、登焉。高出諸山上。豁然一望。右顧京城。粉墻丹樓。窈窕綠樹中。左則大湖。紺碧萬頃。如展西洋畫。其前有物。如展蓋者。蓋辛崎松也。相去數十町。歷々在目。其大可知矣。久之遂去。

四明峰に上りて、大いなる石の上に登れば、四方の山々よりも、遙に高くして、豁然として、はからかに四方を一目に見わたすべし。右の方、京の町をみれば、白く塗りたるついぢ、丹にて塗れる高どのなど、綠樹の中に見えて、窈窕と、奥ふかく、左の方は、琵琶湖の紺色をなしたるが、ひろ〳〵と、萬頃も、うちつゞけるは、さながら、洋畫の景色を見るが如し。その前の方に、車の蓋の如く見ゆるものあ

り。これぞ、辛崎の一つ松なりける。かく隔たりて、數十町のあなたにあるも、ありくと、目の前に見ゆるは、その松の大いなるがゆゑなり。久のく景色をながめ終りて、こゝを下りて去りき。

取路雲母坂。高屋建瓴。飛下不能自止。食頃達一乘寺村。抵詩仙堂。石川丈山先生舊宅也。林泉甚佳。壁板畫晉唐詩家三十六人。探幽筆也。先生又就畫像上。各書其一詩。古雅可喜。其餘手澤。琴書諸物。儼然猶存。先生以麾下士。從伐大阪。有殊功。勇名高於當時。老而卜築於此。誓不蹈市朝。風流文雅。爲海内之唱。使後之人想象歎息。可謂一代偉人矣。

かくて、路を轉じて、雲母阪より、下りしに、高き屋根より、甕の水を流し下すが如く、坂のけはしきが爲に、飛び下れど、自、止ることもなし難く、一食時が程にして、一乘寺につきぬ。こゝには、詩仙堂あり。石川、丈山先生が隱居の舊宅なりけり。(委しくは前にいへり)。その林泉の風致、實に、佳なりといふべし。堂の壁には、晉唐以來の詩人三十六人を畫けり。こは、狩野探幽が筆なり。(探幽、名は守信、剃髮して探幽齋といへり。延寶二年十月七日、七十三歳にして歿しぬ。狩野家中興の畫家なり。)丈山先生、畫像の上に、自筆にて、各人の詩を書したり。その古雅なる所、實に面白し。こゝに、また、先生が手なれし品、琴書などもそのまゝ、遺り居れり。

先生は、徳川家の旗下にて、大阪の役に從ひ、特殊の功名をなし、勇名は、その當時に高かりしが、老いて、此に隱居所をつくり、都には、出でじ。人には、仕へじと誓ひ立て、(市は、市街、朝は、諸侯の朝とみるべし)。風流を樂み、文詞を玩びて、海内の人の首唱となり、後の世の人をして、その風采を想像して感歎せしめたりしは、いかで、なみくの人

のなしうべきことならん。まことに、一代の偉人とこそいふべけれ。

この文の簡單にして、辭のよくゆきとゞきたる所、讀者の心を注いで見るべきところなり。文山先生の事實は、前にのべけるゆゑ、こゝには、もらしつるなり。

布美安波勢（十二）

白松園主人

十二月

山ざとのゆきのあした

左　　徳

ひとめもくさもといひしふるさとの、思ひいでらるゝむかり、淋しさの日ごとにまさりて、いつしかとみどころもなき山ざととはなりにけり。されどから衣めやかに、庭もまがきもおしなべて、白雪の所せくふりつもりたる、今朝のけしきのいひしらずめでたきには、日ごろのそゞろさむさも、ほと〳〵わすられつゝ、火をけなども、かたへにおしやられて。

右　　勝　　尙　文

冬になりては、むぐらわくる人もなきまゝ、ことさらにちりもはらはねど、木の葉いたうちりしきて、とばかりこそもみぢの色も殘けれ、いつしかくちはてゝ、ちりづかのやうなる庭もふりつみたる雪に、おもがはりし、木々の梢は、ときならぬ花さき、みわたす峯は白玉をつみあげたらんやうなり。さぞかり音すさまじき谷水は、物のそこに聞え、しもと吹ならすあらしのおともたえはてつ、しづかなる心にかなふ、雪のあしたの山ざとなりけり。

評判　左の文、こともなし、されど、そゞろさむしと。云詞の、つかひざまかなはず。右の文もとぞかりといふ詞のつかひざまは、たかひたれど、なべてたくみにおもしろく、ひだりよ

りはいたくまされり。

左　持　　　　保世

ひとめも、草もかれにし山ざとの、柴の戸をおとづるるあらしも、今朝は聲たえて、ふりつむ雪に、冬木、ときは木のけぢめは、をかしうおもしろさに、歌おもひに、つらづゑつき居るに、さとおとするは、たがきぬらむと、ふりさくれど、朝顔のかげ見えて、人なきは、軒ぞの竹のれのれとおきかへりて、こぼれしゆきのおとにやあらむかし。

右　　　　重豊

みねのあらしのおとも、谷のかげみちもあとなく、なにも〳〵うづみはていともけはひしづけく、そがひにのこる有明月のひかりもむとくにて、あなをかしのゆきのあしたやな。

評判　左右の文ともによろしく、もちとすべし。

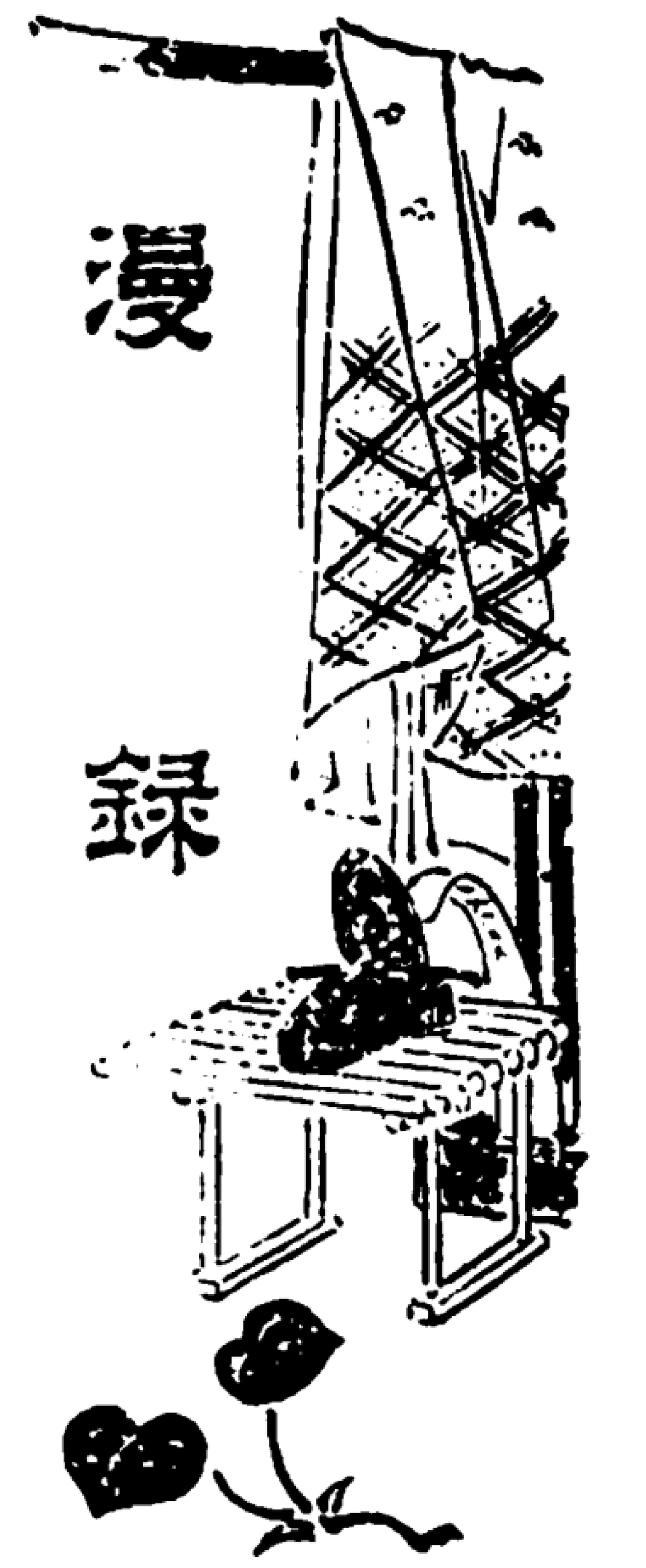
左　勝　　　　祝之

夜もすがら枕がみにひゞきし、下折の音のかしがましさに、まだきに柴の戸おしはなちたれど、のき近きたかむらもみなをれかへりつゝ、めづらしうさしつけたるさはりもはれて、このもかのもおしなべて、さらにものゝけぢめもなく、白う降りしきたる雪の、きはもなう見わたさるゝに、此の岡のべのもりより、さとこぼれいでたる朝がらすの、とびわたるさまいとけぢかんなるもをかし。

右　　　　清風

いづくも、かくこそある風のおとなれど、今れもひいりたらん山ずみのこゝちして、いのねられねど、よもすがら埋火をかきれこしつゝ、からうじてあけぬるけしきなれど、やをらおりたちて、柴のあみ戸をおしあくれば、しめやかに、雪かきたれて、いみじうふりけり。庭もまがきもしろたへに、谷のかけはしうづもれて、梢ぞふゆの山路なりける。さても〳〵

評判　左のふみめでたし、末にいたりては、いとゞ。右のふみもわろからねどおとれり。（をはり）



續人名（卷二）

釋法忍

それ夫婦の道は、よろづの道のはじめにして、天地とひとしく、千代萬世の外までもつくる事なく、夫は、天になぞらへて、陽也。つまは、地にかたどりて、陰なり。天より精惠を下し、地、これをうけおさめて、萬物を生ずるごとく、夫婦、陰陽合躰して、よろづを生じ、此の子、また、夫婦の道をおこなつて、子を生ず、かくのごとく生じてはうみ、生れては、生じ、天地とともに、相續し侍るなり。さるによつて、神といひ、佛といひ聖人といふとも、陰陽の間に出給はさるはおはしまさず。こゝをもつて、聖人のをしへにも、夫婦の道を、五倫のひとつとして、いたつておもんじ給ひ侍ふ也。されど、男は、日にかたどりて、晝をつかさどり。女は、月になぞらへて、夜をつかさどる、地に有つては、おとこは、火にたとへて、心はげしく、陽にして、外の事をおさめ、女は、水にたとへて、しづかに、うるはしく、陰にして内の事をおさむ。此の故に、男は、つよきをたつとび、女は、やはらかなるをよしとす。されど、女のつねゞゝ心がくべきは、つゝしみの心をもちて、おつとのたけく、つよき心にさからはず、物ごと、しなひしたがふようにあるべし。つゝしむといふは、常に、まことの心を盡し、だんたん、大切におもひ、かりそめの事にも、心を付けてそまつなきを申也。またしたがふといふは、物やはらかなる心をもちて、夫にへりくだり、したがふ事に侍ふ也。此の二つの道は、女の大なるれい義にておはしましが、かくのごとくなるときは、ふうふの中、をのづからやはらぎ、行すゑながく、はんじやういたしつゝ。

女は、一たび、人のつまとなりては、一せうおつとの家を出ざるやうにいたすべき、事かんえうにておはしまし候。しかれど、つね〴〵、心をつゝしみ、舅姑に、孝行をつくし、たとへ、子供あるとても、夫に如在なくうやまひつかへ給ふべし。あさとくおき、髮ゆひ、身をうせうにするは、しうと、おつとへの禮義、つとめにておはしまし候。しかるを子どもの、ひとりもいできぬれど、いつしか、まへかたの心ざしもなくなり、心もおちつくにしたがひ、夫になれすぎ、心ゆすたて出き、いふまゝ、きまゝおもいひ子どもにかこつけてあさね、長々いたし、しうと、おつとへ、つかふる道をわすれ、子どもを、おゞどゞの世話にかけ、われひとり、子を持たるやうに、子どもをはなにかけて、すべきこともせず、髮は、おどろをみだし、身をきよめんともせず、かれにつけ、これにつけ、我まゝなるふるまひありて、いつとなく、夫をあなどり、身のほどをわする丶樣に成行くものにておはしまし候。是、ひとへにつゝしみなきゆゑにかゝるあさましき事のみありて、夫に見かぎられ、身をしりぞけられ。親兄弟の顔をよごし、人の嘲をうけ、申事にておはしまし候まゝ、かね〴〵御心得よく〳〵御つゝしみ遊し候樣、せん一の御事にておはしまし候。

つねに夫のいふ事につき、よしあしをいひ、またおつと、人とはなしあふせつ、そばよりさし出、おつとをさしをき、そのはなしをかひとり、われ知りがほにりくつをいふものあり。これ、夫にへりくだりしたがふ心なきより、おつとをないがしろにするなり。これらの女房は、わき目よりさへ、にくましくおもはるゝなり。まして、おつとの身にては、いかばかりはらあしく、あいそうもつきなん。されば、か樣の事かさなり、おのづからふうふ中もうとく成。終には見すてさらるるものにて、おはまし候へば、これらの事ども、とくと御辨へ候樣いたし度御事にぞんじ候〳〵。

夫婦は禮義を以てしたしみ、おんあいをもつてまじは

るものにてれはしまし候。去かるに、髪けはひも、禮義の爲にはせず。顔をいろどり、風俗をつくろひ、おつとの心をたらさんために、いろ〳〵の風情をなす事第一心ざし大きにたがふ也。或は、内に居るときは●おつとへの禮義もなく、幾日にも、髪、一くしを入たるとなう、山の神のごとくうちかぶり、見られぬなりふりにて居るも、外面へ出るには、俄に、すりみがき、顔には、べにれしろいをぬり立、髪風流に結ひなし、うしろかゞみにてる風俗をかへりみ、手足の爪へも、ようじをつかひ、みがきにみがいて、出る、是れも、夫の外聞をおもふにはあらず。●誠にれつとのはらをおもはゞ、外ぜかりにはかぎらず、内へは、人のこぬものかは、内に居るときも、相應に見ぐるしからぬやうにすべき事也。又、外へ出るとても、見こしらへ、相たうに、人の目たゝぬ風俗にて出べき事也。去かるを、風流をつくし、よそほひかざるは、他の●おとこにおもはれんことをれもふが●ゆへなり。是、たとへ不義はせずとも心の不義にてまおとこするも同じ事也。今樣の女は、きはめて、心いたづらにて、道芝の露にひとしかるべし。是、皆、まことの心ざしなき故なり。今樣の心より、すべての事、道にたがひ、是より、夫婦のしたしみもうとくなり、りべつのもとひと●成りゆく。かへすぐ〳〵も、れそれつゝしむべき事にておはしまし候。

女に、四つのおこなひ、七つのふせうあり。その、四つのおこなひといふは、言德功容の四つなり。これを婦の四德と申し侍ふ也。先、言とはことばなり。惣じて、女は、言葉おほからず、そのことばを●ゑらび、物もゑしやくして、ことばやさしく、しとやかにいひなし、さがなき事をいはず、いふべき時におたりて、言ふぜかりにて、とはずかたりせず、はすばなることをいはず、かたましと、人にいとはれざるやうにするをいふなり。德とは、貞順をさしていふ也。女の心ばへ、いさぎよく、心だて、正しくして、まことふかく物のあはれをしり、身のおこなひをつゝしみ物にはぢらひ、貞心に

して、人をねだまず、心ざしやさしくして、情をおもひ、いかりのみゆる事なくすべて、禮法にしたがひ、たがはざるをいふなり。功といふは、女のなすしはざなり。惣じて、女は、つねにおりぬふわざにをこたらず、心に入れて、いとなみかりそめにもたはふれあそび、いたづらに、日をすごさず、家内のはからひ、取つどめなどに、心をつけ、よく家をおさめ、りつしんするをいふ也。容とは、女のかたちをいふなり。わざごとに、おつとにさきだちて、をきけはいし、髪をゆ結、或は湯あみかみあらふ事、をこたらず、ずいぶん身をきよくし、けがれたるいしやうはあらひすゝぎて、いさぎよくし、いしやうのきなしふつゝかならず、いもんかいつくろひ、立ふるまひ、しとやかに居すりゐ、正しく、よろづ、身持をたしなむをいふなり。此の四ッのおこひは、女のおはい成る徳義なれば、これを四徳と申し侍ふ也。されど、一つとして、かけては、女の道にそむき侍り候へば、かならず、おろそかに、おもひ給はで、身分相應にまなびおこなひ給ふ樣に、御心がけおはしましませ。

女の身に、七つのふせうと申は、一には舅姑にしたがはず、おろそかなれどさられ、ねだみふかければ、さられ、言葉多きはさられ、いんよくふかきはさられ、子なきはさられ、あくしつのやまひあるはさられ、ぬすみするはさらるゝはづの習にて候へど、人のつまとなりては、此の、七つのつゝしみかんえうにておはしまし候。しかし子なきと、あくびやうの出る所と、生れ付の事は、天命なれど、せひなき事なり。しかれども、大かた、よの中を見侍るに、心いたづらにて、あまたの人に袖ふれたる女は、たゞうとにても、子はなきものなり。是、つねぐ〜の心ざしあしきゆゑなれど、さらるゝもにくからず、また、あくしつも、さの通り、あまたたゐんをおかせる女は、きはめて、あくしつをうく、また、女に似合ざる肉食をいたし、五しんをたべ候へど血、あまりて、くされ、かならず、あしきやまひを生ず

るものにて候へど、か様の女はさらるゝも、また、にくからずおはしまし候。されど、女はつねぐ\、心をつゝしみ、身をたしなむことかんえうにおはしまし候。

（つゞく）

さこし草（一）

故　兒島顒齋

繼母につかふるは更に心得あるべき事

幼くして、母をうしなひ、父後の妻をめとり。或は妾を入ることありとも、父の心にさからふべからず、さるは、世間、多き例にて、父、後の妻をむかふれど、それより子の心かはり、父もまたいつくしみうすくなりて、波風をさまらざるものあり。子たるもの、よく心得て、平生むねに忍の字をおきて、父の仰にしたかひ、萬のこと、ねもころにもてなして、父の心をよろこばしむべし。たとひ、他より、愚に、つたなく見ゆるとも、かりそめにもうとみにくむことなく、うみの母とおもひて、ひたすら、なさけふかくつかふべし。難きことにはべれども、孝の道をおもひて、其のつかへをとぐるこそ、子たるものゝ本意なれ。

閔子騫はいとけなき時、母をうしなひしが、父後の妻をめとり、二人の子を得たり。かの妻、わが子を、ふかく愛して、閔子騫をにくみ、冬のさむきにも、きるものに、蘆の穗を入れてきせけり。父これをしりて、大きにれどろき。妻をさらむとしけれど、閔子騫かなしみ、われ、一人、さむきをこらへなど、二人の弟はあたゝか成るべしと、つくぐ\、諫めければ、父は、去ることも止みぬ。繼母もつみを悔い、ふかく、閔子騫が志しを感じて、其の後は、まゝ子の隔なく、親みふかく成りしとなり。

薛包は書よむことを好みて、孝行の志しふかき人なりしが、はやく、母をうしなへり。父、後の妻を娶りて、常に、妻のあしさまにいへるを信じて、深く薛包をに

くみ、杖をもてうちたゝき、終には、追ひ出しけり。薛包なげきかなしみて、旦ごとに、其の家にきたり、水をうち、掃除などして、父の心をなだめけれども、其のいかりなほ止ず。されど、露うらむる氣色なく、家ちかき所にやどりて、朝夕、父、母の安否をたづね。一日も怠たることなかりしかど、父遂にはぢてよびかへしけるとかや。是は、唐士の美談なり。本朝にても、繼母につかひて、孝を盡せしことも、例すくなからず。これ、皆、こらへがたき所をこらへて、我は子なれば、親に敵すべき理わるわけなし。劔をもて怒りたまはゞ、我は、綿をもて受くべし。角を立て罵りたまはゞ、我は、首をすくめておそるべし。兎の毛の末程も、逆ふことなかれ。ものごと、恐れつゝしみて事ひまつりなど、つれなき、まゝ母なども。いつしか和ぎて、親みふかくなりぬべし。古き歌に

風さゆるをしまが磯のむらちどり
たちゐは波のこゝろなりけり

とよみしも起も居るも、波のよするごとく、何事も、ただ、親の心にまかせよといふなるべし。

故栗田博士の手簡

大高常雄

余の、初めて、先生に見えしは、明治二十三年一月にして、先生、未、鄕里なる水戸に在す頃なりき。由て、直に、門人の籍末に列し、從ひて學ぶこと、僅に四ヶ月にして、師の許を辭し、鄕里に歸らざるべからざるとの起りければ、再び見え奉らむ事を約して、空しく、鄕里に歸りぬ。かくて國にては、國典敎育に從事する傍、雁信に托して御敎をうくること二年にして、再見ゆる幸を得しは、明治二十五年七月なりき。時に師は、なほ水戸に在しき。かくて、余はおほけなくも師が、大日本史編纂の傍ら、尤も、御心を用ゐ著述せさ

せ給ひし姓氏録考證の材料を蒐集しつゝ、師が蕉窓書屋の下に在りて、專ら、國史制度を研究し居りき。この頃より、其の向にては、師を大學に出さむとて、頻りに交渉中なりけるを、師の君はいとうるさげに思ひ給ひけれども、遂に、十一月十五日を以て、召しに應じて、都には上らせ給ひぬ。余も尾して上れり。かくて、猶教を膝下にうくること二年にして、余は出で、山口縣に國史制度の敎授に從ひぬ。時に明治二十七年九月なりき。山口にあること中二年、この間、雁信によりて、御諭をうくること數を知らず、然るに、余、母の病の故を以て、生國なる中學校に轉せし後も、猶かくの如し。かくて、余や、三たび、師の許に學ばむ計畫をなし居つるに、母、先逝きぬ、其の十日を出でざるに、師の君、御病篤きの電報に接え、追ひつぎて、遂に御うせ給ひし凶報をうけたり、嗚呼、余は、朝に慈母を失ひ、夕べに、恩師に、長なへに訣れ奉る。あはれ慟哭の涙は、枕を浮べ、悲哀の情、水漿喉に下らずと、古人の言ひけるも、げにさることなりと感じぬ。師の御疾を訪はむか、母が病の危きを如何にせむ。志の危篤に趨らむか、母が忌中なるを如何すべき。噫、余が畢生の恨事は、此の時なりけり。明治三十二年七月三十日、余、水戸に到り、謹みて、恩師の御墓に詣うづ。歸りて、師が未亡人、及び、嗣子勤先生と、舊事を、御靈床の御前に談じ、懷舊の情禁ずる能はざりき。勤先生曰く、大人の遺著は、追ひ〳〵、出版の運びをなし居たり。猶、大人の書簡を集めて、一冊子となさむとすと、其の言、余が所思と符を合せたるが如し、余曰く、生の故大人より賜はりし御書簡は、其の曾て、山形縣、庄内に在りし時、山口縣山口に居る頃、再び山形縣庄内(今の在所)に住める程に下されしものにて、國體に關するもの、德義に關するもの、學問に

敎育に、時事に、又、我母の病氣看護法に、さては、我ら、夫妻の心得に係れるものの御手簡のみにて、一百餘通あり。之を、年月日の順序に排列して印刷し、同士に頒たむと思へりき。今、其の御企てまさば、猶、他の門人方よりも徵して、之を、一つに纏めて、一冊となし、侍らむと約して、余は、當地に上りぬ。上り見て、余や、頗時事に感する所あり。由て、今、茲に、師が、余への最後の御手簡を世に公にして、一つは天下の風敎を維持せむ重任ある世の敎育者諸士に、吾が栗田先生が弟子を愛せられし、温情の程を知らしめ、一は、今の女學生諸孃達の心得とも爲さむやと思ひ長々しき添言を加へてかくなむ。

先生が、曾て、家居せさせ給ひし、東京小石川區同心町の邊なる客舍にて誌す。

（明治三十一年十月二十二日賜はりし御手簡寫）

九月廿日、御認の狀、一昨日、佐藤（文學士佐藤小吉君羽前國鶴岡の人）より相屆き、林檎、多分に御惠贈遠方より到來に付、めづらしく存、早速、晩酌の節、相用ゐ申候。涼秋の節、燈火可親の時に相成り、一層、御勉勵所祈候、令閨（八月迎へし愚妻）段々、居なれ候は丶、何角、御便利と存じ候、容貌は、もとより頓着すべきにあらず。平生の心懸け、行儀等靜肅にして、男唱女和の義に不違樣、神州の大道に服膺爲致候樣、御敎可被成候。次に、一家の經濟をも、よく心得不申候へば、家計窮乏の患を生じ候。是は、專ら、婦人の職務に候。衣食の事より、野菜、漬物等に至る迄、屆き候樣いたしたく候。近來、女學校の風俗、唯、表面の容貌貴女の如くにのみ相成り。食を炊き、香物を漬け、煮燒を致し候は、賤劣の事の樣に思ひ、又、自、櫛り、髮を結ひ候もならぬ婦人比々、皆、然る樣に候。是も、亦、段々には、出來候樣にと致したく候（愚妻は女學校生なり）或は、自申候てはいかぬ事もあるべく候間、吾申候とて、御申可被成候。互に、よき事をいさなひ勸め候が、伊奘

諸尊の御教にて候。此の頃は、とかく痛き處抔、多く、相成申候。リーマチのセイ歟と存じ候處、醫者の言にては、胃病なりと被申候。

されど、蠅頭の細字を書し、著述のみ致し居候。風土記逸文も出版候處、評判よろしく、最早うり切れ候との事、餘は五風土記の版にかゝり居候。新編常陸國誌出版、追々、出來可申候。當分は、食貨志講義に付き、兒輩の分り候樣にと存じ、租税略、調庸略（正税公廨雜稻のこと附）と申すを認め、二冊程出來申候。追追度量等の略、戸籍略をも作り可申かと存居候。

十月二十二日　栗里

簣山雅契

神嘗祭の節、大禮服にて、賢所參拜致し、折よくも主上、御拜禮の御容子を拜し候に、龍顔、殊にうるはしくおはし候。其の歸途、寫眞致し候間、出來次第、一葉進上の心得に候。

日本人の性質

こは、大鳥圭介翁の講話せられしを、速記したるものなり。

今日、皆さんの御寄合の所で何か御話を致せと云ふ御依頼で出ました、別段面白い話もござりませぬ、又、學問上のことも、大抵世間で演説などをいたして居る位のことで、別に耳新らしいこともありませぬが、日本人の性質と云ふことを御話をいたさうと思ひます、以前は、日本人の性質といふものは、西洋人とは異ッて居るかも知れませぬが、亞細亞洲の者は大同小異であると思つて居りましたが、支那に、足掛四年、朝鮮にも二年、此の間に於て、公務の遑のある時分には、餘程、其の邊を考へて、市を歩行するにも、其の風俗等に注意をいたしました……日本人の性質は、亞細亞人種の中では、先づ善い方でありませう、例へば愛國心だとか、忠孝の道と云ふやうなことは、他國の人

に劣らぬ、或は戰をすると云ふやうなことは、一番得手のやうに思はれる…………

日本人は、一体に英敏と言つてよい。緩い方ではあるが、物の合點の早い所は善い方である、……善い方がそれとして、惡い方が澤山有る、それはどう云ふ方に惡いことがあるかと云へば、一体日本の人は輕卒である、何事をするにも、熟考して、長く物に堪へて、例へば、一度二度失策がありても、最初に見込んだことを、遣り通すと云ふことはない、それは、輕卒だから起る、チヨツト良いと思ふと直ぐ取付く、假令、製作塲を拵える、どう云ふ事業を起すと云ふても、熟考しないで、思ひ付いた儘、直ぐに起す、甘く徃かぬと直ぐに止すと云ふやうな譯である、起すにも、いろ〳〵と考へた後でないから、遂には輕卒に止めるやうになる、之は日本人の性質として、極く惡いのである、支那人などはさうでない……商業や工業をするに就ても、御同前に恥しいが支那人には及びませぬ、只戰をしては强かッた、日本人は戰が得意だ之に反して、事業を起すとか云ふやうなことは、餘程下手だ、朝鮮人は勿論いけませぬが、支那人は商法は上手であります、私は朝鮮から歸つて來たときに、横濱の商業會議所の歡迎會と云ふことで、東京の人も申合せて、招待を受けたことがござります、其の時の席に於て、日本も鐵砲丸の戰爭では勝ッたが、算盤珠の戰爭では勝てまい、恐らくは負けるだらうと云ふことを言ッたことがござります、之は誰も知ッて居ることでありますけれども、戰をする方で勝ッても、商業上の方で負ければ、實は本統の勝と云ふものでない、喧嘩をしては勝ッたが、さて財布を見ると一文無しだ、それでは、格別有り難くない、そこで、どうしたならば、まア輕卒でないかと云ふことは、ヨッポト六ケ敷い話だ、忍耐力と云ふことも、無論ない、遂に遣り掛けたことを止して仕舞ふ、それは尤も金も少ないからである、例へば、一萬圓の金がある、それで一ッの事業を起さうと

する、紙を漉くとか、糸を製するとか云ふ事業を起すにも、先づ、初は三千圓か四千圓を掛けて、確かに試みして、それで愈々宜しいと云ふ時分に、資本を多くすればよいのであります、試して見ていけぬときは、五千圓か六千圓殘ッて居るから、二の矢を即ち別の事業をやれば良いのである、それを、最初一萬圓あるのを、一萬圓やッて仕舞ふから、二の矢が利かぬ様になる、さうして、事業を起すに、能く考へぬ、善いことばかりを考へぬ、此の事業を起せば、斯う云ふことがある、いつまでにはどう云ふ儲があると云ふことを言ひます、能くさう云ふことを私の宅などに來て言ふ人がります、それで、私はいつでもさう云ひますが、良い方ばかりを考へれば宜しいが遣り損つたときはどうだ、如何にも、新規の事業とか、實業などと云ふことは宜しい、さう云ふ事業を起して、今立派になつて居る人もあるが、其の實は、遣り損ッた人ばかり多い、事業を起して、立派になつた人もあるが、事業を起して貧乏になつた人は百人の中八十人位はあるだらう、船を持つにも、何處に航海してどう云ふ風にすればよい、難船の時はどうする、暗礁に乘つて破はれたときはどうすると云ふやうに、難船をすると云ふやうなことも考へて見なければならぬ、儲かる方ばかり考へてはいかぬ、途中で故障のあつたときにどうして凌ぐと云ふ見込を付けなければならぬ、……日本人は輕卒だと云ふことは、大分世間でも言ふて居るやうであります、一冊の本があるそれを繙て讀んで見れば、字の誤りのあること、文章の假名違の誤りのあること、尤其中には出版するものゝ、校正の行屆かぬと云ふものがあるが、著述者の間違もある、又活字の間違もある、西洋の本には、丸で無いとは言へばせぬが、近來の本は、段段讀んで見るに、こゝは間違であるだらうと云ふことは心付かぬ、支那の本にも、誠に間違が少ない、日本の本は、今申したやうに誤りが多い、近來大部の本を豫約して取ッて見ましたがどうも、誤りが多くて、嫌

になッて、本を抛り出して仕舞ふかと思ふやうだ、これも、輕卒から起ることだ。……日本人は一体輕卒で氣輕い、氣輕と云ふことは、チヨツトよいことだが、又餘程心を用ゐなければならぬ、西洋人などは、氣輕い方である、應接などをするには餘程輕氣く言ふが、心までは輕くないやうに思はれる、日本人はどうも物に變りやすくて新規のことが好きだ、さうして長く續かぬ、……

敎梯抄（十四）

古今集雜下

題しらず　　讀人しらず

風ふけばおきつしらなみたつたやま
よはにや君がひとりにてゆらむ

ある人この歌はむかし大和國なる人のむすめに或人すみわたりけりこの女親もなくなりて家もわろくなりゆくほどにこの男かうちの國に人をあひしりてかよひつゝかれやうにのみなりゆきけりさりけれどもつらげなるけしきも見えでかうちへいく毎に男の心のごとくにしつゝいだしやりければあやしとおもひてもしなきまにこと心もあるとうたがひて月のおもしろかりける夜かうちへいくまねにて前裁の中にかくれて見ければ夜更る迄琴をかきならしつゝうち歎きてこのうたをよみてふしにければ是を聞ていとあはれなりとおもひて外へもまからずなりにけりとなむいひ傳へたる

古今集誹諧歌

左のおほいまうち君

もろこしのよし野の山にこもるとも
おくれむとおもふ我ならなくに

同　同　さぬき

ねぎ事をさのみきゝけむやしろこそ
はてはなげきの杜となるらめ

同　同　よみ人しらず

世のなかのうき度ごとに身をなげば
　ふかき谷こそあさくなるなめ

同　同　讀人不知

なにをして身のいたつらに老ぬらむ
　としの思はむことぞやさしき

貫之

後撰集雜二

世のなかはうきものなれや人ことの
　とにもかくにも聞えくるしき

同　同　よみ人しらず

あはれてふことになぐさむ世の中を
　などか悲しといひてすぐさむ

同　雜三

はしめて頭おろし侍りける時
ものにかきつけ侍りける

遍昭

たらちめはかゝれとてしもむば玉の
　わかくろ髮をなてずや有けむ

後拾遺集雜上

小一條右大將のなつき給ふとて
よみてそへて侍りける

源重之

むつのくのあたちの眞弓ひくやとて
　君にわが身をまかせつるかな

金葉集雜下

題不知　よみ人しらず

身をすつる人はまことにすつるかは
　すてぬ人こそすつるなりけれ

同　同

舍利講のついでに願成佛道の心を
人々に讀せ侍りけるによみ侍りける

左京大夫顯輔

いわて我がこゝろの月をあらはして
　闇にまどへるひとをてらさむ

新古今集雜下
題不知

つら〳〵とおもへはやすき世の中を
こゝろと歎くわが身なりけり　荒木田長延

同　同

なからへは又このころやしのはれむ
うしと見し世そ今はこひしき　清輔朝臣

新勅撰集雜二

あすもありと思ふこゝろにはかられて
今日もむなしく暮しつるかな　前參議俊憲

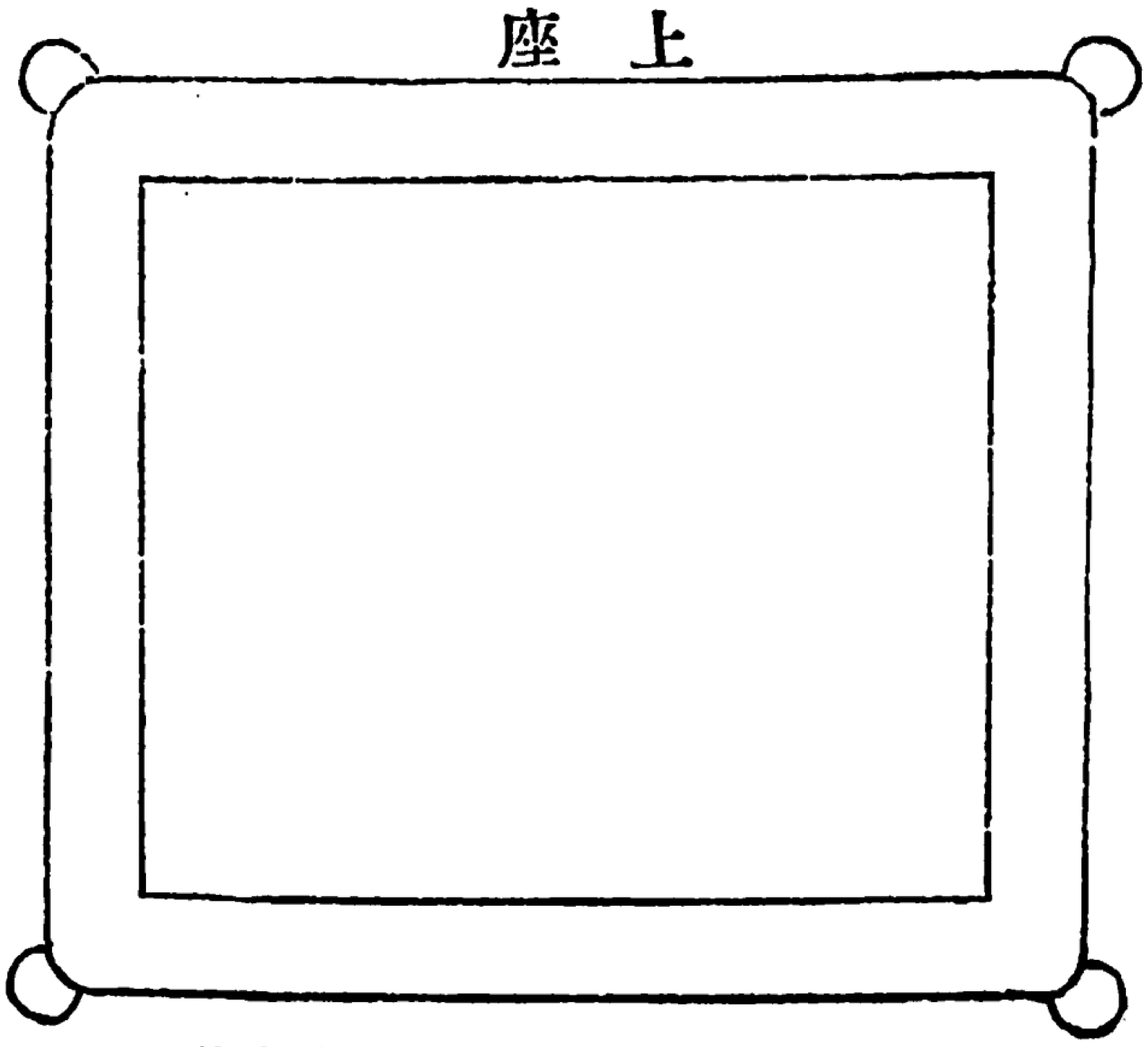
同　同
ひとり思をのへ侍りける歌

山はさけうみはあさなむ世なりとも
きみにふた心われあらめやも　鎌倉右大臣

（未完）

飛鳥井家和歌の法式（四）

文臺置樣同讀師講師發聲役の次第



講師、文臺のあ一眞中の遠くより、畏り文臺のそばへ、能ほどによるべし。此の役は、二老の人すべし。講師は、よみはて、早く立べし。

下講師といふものあり。文臺の上に卷てある懷紙を見合位にまかせ、かさねておく也。是は、三人の役者の外也。下廊から、次第〳〵に重ね

べし。一の上が、上手の人の懐紙なり。中より、二に折りて、文臺に置なり。下講師は、案内者のわざ也。講師、文臺より懐紙を取おろし、中より、二に折りたるまゝ、右のひざのかたへよせて置、其まゝ、下の懐紙から、讀初むべし。下の懐紙から、一枚づゝ、文臺の上に置て、講師によますべし。詠みわげむ、引かさね、字頭を、講師のかたへなるやうに置べき也。

一懐紙のとき、講師一人して詠事、懐紙を、文臺よりおろして、左の手にて、懐紙の端をおさへ、上下、次第に詠ては、返し〳〵詠ずべし、よみあげてもとのごとく、文臺のうへに重ね置べき也。

一懐紙と、當座の短ざく有時は、先、懐紙、後に、短冊なり。懐紙を重ねて、折りかへして、文臺に置て、其の上に短冊置べし。讀はたして、置時も初のごとくし。先懐紙を講して、後にたんざくなり。

一懐紙とぢやう、紙色、大小、いかやうにもあれ、上の切目と、奥のかみの端を揃へてとづべし。先、一枚、横に中より折りて、その紙を定規にして、とづる、中三寸ばかり。間を置きてとづべし。とぢの引合をたてに能頃を見合たちて、兩方の截めのはしを中へ折入るやうに四重に折りて、ほそく能頃に成やうに、紙をたちて、折合の懐紙のとぢめを、小刀の先にてわけて、その穴へ、引通して、懐紙、面にて、二むすびにすべし。二むすびめのはしの上になるかたを折返して、結ぶべし。閉て、兩方のはしの同じやうに成やうに結合すべし。とぢて後懐紙のうらの前のはしに、年號月日を書、會と書べし。月次の會ならむ、日付の下に、月次會と書べきなり。

一披講を、二條家には、甲乙とする也。冷泉家には乙甲とするなり。

一大内にて、むかしは、三曲の御會とて、詩歌琴、三様、清涼殿にて、有之、今は、詩を講ずるもの無之、故に歌と琴とかりあり。清涼殿にて、御會あれば、天下、兵亂有とて、今は別殿にてあり。

一女房懐紙ちらし書の様躰

かめのおのやまの
いはねをとめて
おつる
瀧のしら玉
千代のかず
かも

飛鳥井いえの式（終）

（つゞく）

歌俳百人撰（五）

故海壽翁

獨歩菴超波

第二十六

蜻ぼうや飛直しても元の枝

此の句、飛直しても〳〵、元の枝、また元の所へ止るが、蜻蛉の生得なり。是は、よく人情に通じたりと覺え侍る。一家の主たり共、奉公人成共、旦那がやかましく、爰は、商がないのと、他所へ引越、亦は、主人を取替、こゝはよしとおもへども、左のみ心に叶ふ程宜敷事も無きものなり。一兩年も立、我が思ふ樣にもなければ、又、他所へ移り、奉公人なれば、また、主人をとり替、色々氣をもめども、いづくへ行ても〳〵、我身に備りし、同ほどならでは、あたわぬ物なり。一升入る袋は、いつにても、一升とやら、所をかへ、主人を替へても、己が心ざまあしくぞ何國へ行きても勤まらぬ、又、もとへ戻るより外なし。鼠が、月日を聟

にせんと、いろ〳〵、心をくだき、また元の鼠を聟にとりし、子供らのむかし咄しもはべるなり。日は照れども、此方の心に曇りあるゆへ、中〳〵てらぬなり。主にもせよ、奉公人にもせよ。身を動かす度に、金銀は人ともに段々ひろくして、元の木阿彌となれり。少し心に入らぬ事あるとも、やはり、同じ所に居れば、馴染も出來て人も知り、おのつから、商の得意もふゑ、奉公人は出生するうたがひなく、度々、主人を取替るといつても、新参ものと成て、出生は遲し。飛直しても、元の枝なれば、初より、おなじ所に取付て居るがよし。石の上にも、三年居れどあたゝまり、生米も、かみし●めれば甘くなり。味が出ると、あそこよ、こゝよとせんざくするはあしく古歌にも

爰はうしかしこはうしと嫌ふなよ
　いつくも同じ秋のゆうくれ

といふたはれ歌あり。此のてには、病死の、一兩日前に、門人、祇亟黄明、側にあり、辭世を殘し給へと云ひけれど、去年の冬讀たりし、氷の句を、●あれにましたる辭世なし、墓に彫付置るべしといひおわりて身まかりぬ。其の句

あら海え●舟からなぐる氷かな

海へ乘る舟、まん水を汲込置しに氷りしゆへ、●又海へなげ入るれど、元の水となれり。人も生れ來て、又、死の道にもどるをいへり。いかさま辭世にはよき句なり

　　仙臺陸奥守宗村公

第二十七

よをしのぶたか文字摺の玉つさに
　末の松山我もしるなり

此の歌よを忍ぶにいゝかけしは、●奥州忍ぶ文字摺の名も、爰にあり。むかし、玉手の峯實といふ人、石の面に、しのぶの形ありしを絹をあてゝ、是をうてど、しのぶの形うつりて見事なり。夫をあたりの人に遣したり。百人一首のうちに、「誰故に亂れ染にし」と讀しは此の古歌の事なり。末の松山も奥州の名所なり。陸奥守宗村公は、我、此の國守と生れ、殊に類稀なる歌枕

せらし、末の松山も、しのぶ摺も、我領分の内に有てそ滿足さよとの歌なり。我も知ることは知行の内ぞと云ふ事なり。伊勢物語に「はる日の里にしるよしゝて」とは、春日の里を領してといふ事、漢土人も、男は、おのれを知る人の爲といひしを、知行に預ると云ふ事なり。此の陸奥守宗村公は吉宗公より、御一宗拜領ありて、利根姫君を進せられて、家女となし給ふは是なり

第二十八　加賀　黒露

ますら男に我しらせたり雉子の聲

これは

春の野にあさる雉子の妻乞に
己があり家を人にしれつゝ

の歌をふまへての發句なり。蛙は、口ゆへ蛇に呑るゝやらん、人も口故、樣々の事出來て、難澁と成る。口は禍の門は、能く云ひたり。古大佛の玉眼をぬすみしも、夫婦いさかひ、りん氣の口より、あらわれ、太平記四十餘年の軍も、夫婦義物語より起れり。可愼恐べし。

第二十九　徳川刑部卿宗尹卿

君かため春野に出でゝ武士の
雪ふみ分けし里の山吹

大御所吉宗公、御三男御幼少の御時より、御元氣よく生れ付給ふ。御鷹野好にて、殘ん雪を踏分け給ふの本性の御歌なり。吉宗公も、御好の事ゆへ、御鷹野の節ともに、御手を下させ給ふ。夫ゆへ君が爲の御手仁葉あり。里の山吹とは、いにしへ太田道灌、たか野の節「七重八重花は咲ども山吹の」といへる古歌を引、いやしき賤の、簑一ッだになきぞと讀みしをとりて、御謙退の體なるべし。

第三十　自在菴　祇德

鶯や　あまりにめでゞ操れ梅

此の句は、今の祇德にあらず、前のごとくにして、祇空が弟子なり。今のごとくは、祇貞といひし也。鶯は、梅を愛する鳥なれども、流石に鳥類の淺ましさに、能はどを辨へずして、寵愛するによりて、むめをこぼし

散らせし、あやまちをいひし句なり。夫を、今日の人情にくらべていはゞ、親しみの及ばぬはあしけれ共。過たるは不及が如し。餘り去たしきは、何事もあやまちの元となるべし、甚しきは亂の元ともいへり。此の發句は、江戸淺草、御藏前小島屋武右衛門、壯年にして、傾城狂ひに身をゆたね、吉原にのみ居つゞけして、何日も歸宅せざれば、母、之を歎き、如何樣に申遣しても不歸よつて、ぎとくに、此のわけ咄しければ、祇徳方より、迎に遣すとて、此の句を手紙の中へ書入れたり。（中略）

此の句を見て、小島屋、氣を取直し、歸宅し、其の後は心得て、身持をなをしけり。目に見へぬ、鬼神をも感せしむるも、和歌の徳ぞかし。祇とくは、同じ發句をなしたる宗匠なり。

第三十一　尾州宗春卿

ぬる間のみ人にかはらぬおもひ出を
むかしにかへす曉のかね

此の御歌は、此の節、宗春卿、御身持あしく、吉宗公御代に、御とがめを請させ給ひ、御隱居、被仰付、うき年月を過ぐし給ふにより。今は、御身を悔み給ひて、罪障をさんげし給ひ、三家の中にても頭をふまへ、多くの人にかしづかれ給ひし、御身の勢、とてもいまさら人に交り給ふ事も御免しなく、人ならぬ心地こそすれとの思召にて、唯、御寢ならせ給ひし時斗、人らしき夢を結び給ふらん。御目覺の時はさりとは〳〵、ひとの心もせざりと也。曉の鐘のひゞきに、むかしにかへすとの御述懷の、いとあはれ深し。

第三十二　皐月平砂

はたらきは後に去らるゝ案山子かな

今、専江戸の日本橋新道に住居して、はやる宗匠なり。此の句秀逸なりとてもてはやす所なり。案山子は、鳥おどしにて、田畑の中に終日立て、動くこともなく、やぶれ笠にやぶれ蓑を付、二三本に引まとひ、ひとの姿になし。何の役にも立ぬやうにみゆれども、秋の半

より、末に至りて、稲かりの納俵にして見ればすさまじき働なり。人、廿人三十人には増れる也。かゝしわる故、數多の鳥よりつかず、つゐばむ事なき故、働は知れたり。人にも、此の案山子にひとしきものあり。只見せにて、折々小使に行斗、何の用にも立ずあれど、何をするやとおもふ男、おもひの外家業の道にかしこく、身代の重みとなりて、今年も、三百兩延たは、あの男のはたらき、五百兩のふり廻し、あのをとこ商功者故とほめられ、人々目には、左のみかゝる程の働は見へずとも、十露盤の手練くり廻しの達人ある如くかゝしの手からと同じ、又方々の御屋敷方をかけ廻り、御普請の請合、堀浚の落札、川普請、金山の金元のと、常袴して、或は惣代の願なんど、、寸の間も油斷せず働く男に遣れ、込れ、多くありて今度も、二百五拾兩の損毛、今年も三百兩の不足ありて、つゞまる所は手と身にあつて、むかしは、何の某とい●われしに、今は、少しも覺ねし歟か、三味線の糸に、露命をつなぎ、去さびらしい顔をして、口は減らず、藝は身を助くるとの云分、これらは、働ても、案山子にはおとれり。

第三十三

松が枝の直な心をたもちたし　柳の糸のなへて世の中

大岡越前守忠相

是は、大岡忠衞門とて、伊勢龜山の郡奉行より段々出世して、夫より山田奉行となりしを、吉宗公御見出しに預り、江戸町奉行になり。相勤め、自分の志を述べ、我と、我身を戒むる歌也。昔、本多佐渡守正信三州奉行の節、狂歌に

からさきの松は奉行にさも似たり　直なようても曲らぬはなし

とすさみたり。都て奉行は、常盤の松のかわらで、●久しく勤むるに付て、松か枝のまがれるは、いかにせんと、曲節狂歌を戒めたる心嚴重にして、よきけふかゐなり、下の夕、柳の枝の末永く成て、直なるなりを、

柳の糸にたとへ、これになつて世を奉行といたし度となり。

第三十四

三つの内ふたつの猿はほと丶ぎす　　成屋

此の句は沾州門人成屋宗匠の句也。三の猿は、庚申の見ざる、聞ざる、云はざる也。其のうちきかざる斗は、耳をふさげて、時鳥の聲を聞ず。二つの猿は、耳をおほはねど聞へたる徳なりとの句也。去ながら、二ッの猿もほと丶ぎすはきけども、物云はず、見ずのくるしみあり。一ッよけれど、又ひとつあしきが世の中の習ぞかし。出る舟の順風は、入船の逆風なり。秋月輝揚盗者、其の照鑑憎とやらん月のさへたるは、風雅人は悦べども、とうぞくなんどは嫌ふ。水仙は、日向を好み秋海棠は、日陰を好む、牡丹はあをのき、百合はうつむく、藤は下り、蔦は上る、是を違變といひて、こちらからは是、あちらからは是、とひとつよけれど、一ツあしく、時鳥はきかね共、きか猿の一徳は、世のうきつらき有るならむもやかましきを聞ぬもまし哉。

第三十五

名月やわが圖兩の白地　　大阪才丸

此の才丸は、今の團十郎の爲には、祖父の、海老藏が、俳諧の師なり。海老藏、始は、才牛といへり。後に三升と改め、又、柏莚と改名したり。團十郎は、三升といへり。此の才丸が句は、晝もけつく影ぼしのあからさまにうつると、月を稱美したり。日月の、我影をてらし給ふかへ、かたちに影の添ふごとくと云ふたとへ有、月影にもかけぼしあれども、目に見へず。夫故、日向斗、影の有と思ふ如く、例へぞ、盗賊などか、夜道にて、人を害し、金銀をうばひ、誰も知らぬとおもふがごとし現前天の照覽ましますは知らで、淺ましき事、人の身るより恐ろし。むかし、近江國に平太郎といへる貧しき百姓あり。世渡りのくるしさに畑盗人をせしが、ある夜、みどりといへる七ツに成我子をつれて、畑へ行、大根にんじん樣なるものを堀返しけるに、みどり、聲を

あげて「おれ見てござる」といふにぞ平太郎、大に驚きみどりに「誰が見ているぞ」といへど、ゆびさして「上からお月さまか見てござる」といふに、はつと驚き堀返したる所に、又、元の如くにうづめ、みどりをつれて、宿へ歸り、つく〲おもふに、是、自然と、天幼き子をしていわせ給ふ成べしと、今迄なせし惡業を悔み、首を縊りて、相果てぬ。書經洪範の篇に云へる、其の身正しければ、影正し、曲れど、影も曲るべし、揚震か四知、是なり。天知る、神知る、我知る、人知るなるべし。

競點歌（二十五回）

諏訪忠元

阿部光忠翁評　相澤朮

春夜待友

朧夜の月さへ窓にさしいるを
ともは影だにみえぬ成りけり

土岐頼知

下ノ句、わがまつ友はかげたにもなし、ナドニテ、如何ヤ。

梅の咲月も霞みて魂わへる
みやひの友をまたれぬるかな

仝　ときえ子

二句霞みてトアルハ、霞めバトシ玉フ方ナラン。

梅薫り月朧なる春の夜は
語ろふ友を待わぶるかな

土岐以久子

下ノ句、かたらん友のまたれける哉ヲトアラマホシ、但シ、假字違ヘリ。

梅薫る朧月夜にみやひとも
われはこゝろにまつの下庵

二句以下、四句ヲ朧月夜は、みやひをの友をこころにトシ玉ヒテ、如何。

春の夜の月の朧のあはれさに
おなじこゝろのともぞまたるゝ　水野鈔子

二句、おぼろの月のトシ玉ヒテハ、如何。

山田謙益

更ぬまに友とひこよと思ふ哉
こよひも春の遊びせんとて

大田原一清

月花に心ひかるゝ春の夜は
おもはぬ友もまたれぬる哉

初二ノ句、月影に花の匂へるナドニテハ如何、月花ト春ノコトノミニハ云難キ由ハ、四十七ノトコロニ辨ヘ侍レリ。

大田原千秋子

契りにし友まちをれは常よりも
更るに早き春の夜半哉

仝　清治

庭の面の花咲ぬれと柴の戸を
夜にも音なふ人をしそまつ

結句友をこそまてニテハ、如何。

飯田いね子

おぼろ夜の月の梢にみえそめぬ
親しき友をまつの下庵

長谷川美材

てりもせず曇りもはてぬ春の夜の
月とうかれてくる友もかな

川島宗端

をりをりは梅も匂ひて霞むよの
あはれ語らむともとちも哉

初二ノ句、梅も咲月も匂ひてナドニテハ、如何。

仝　さかえ子

梅が薫のをりをり窓に薫る夜は
かねて契りし友ぞまたるゝ

下ノ句契らぬ友もまたれこそすれト改メ玉ハヾ、

イトヨキ御歌ニヤ侍ラン。

まちわぶる友はとひこであたら夜の
　　月と花とをひとり見るかな

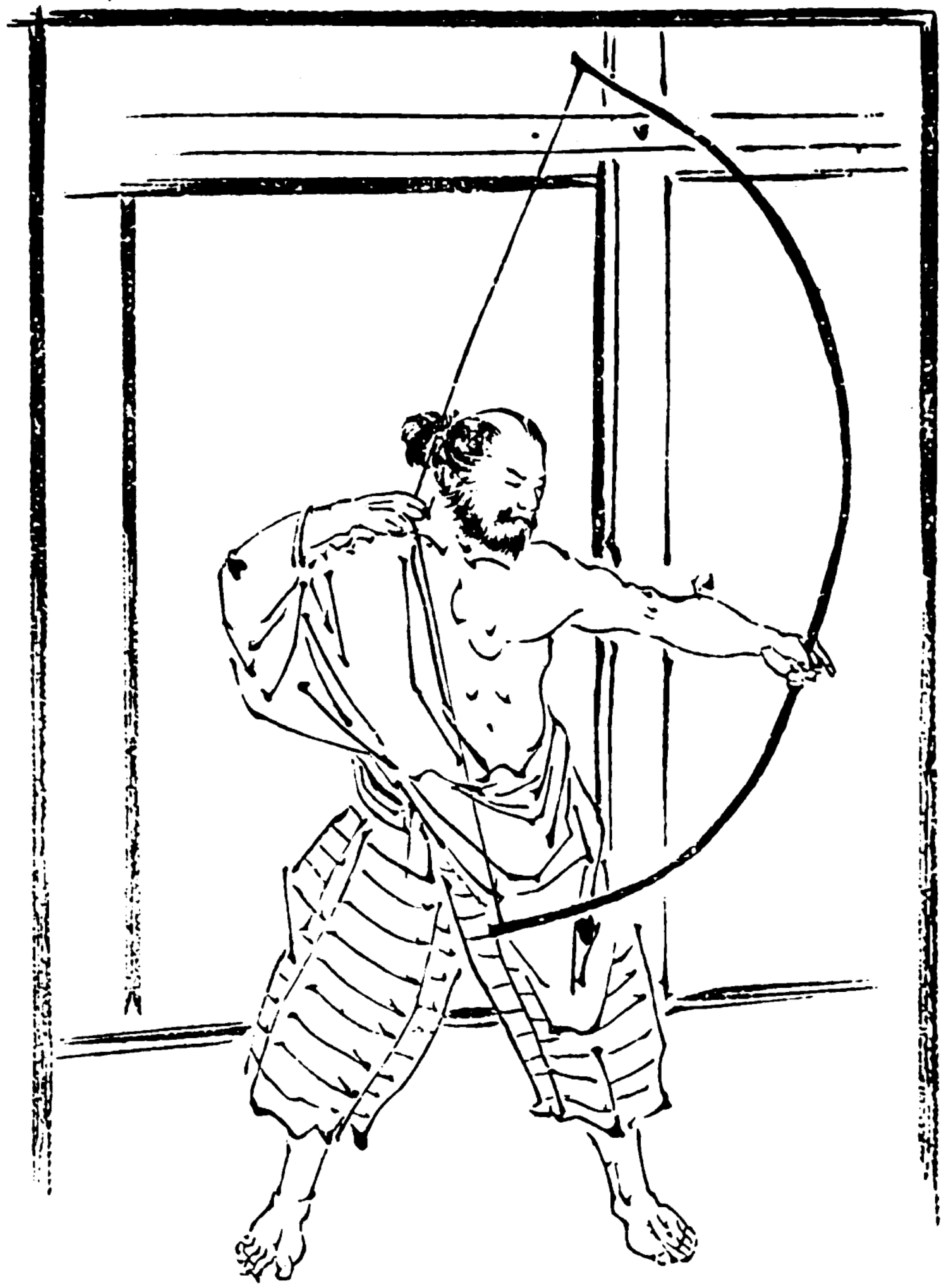
牛山寛

はゝその露

はゝそ

之は、尤も孃樣だちにお聞かせ申たいお話です。そして、尤も聞いておいて頂きたいのです。それは、板倉内膳正重知の家に故ありて、傳へられた弓を、つねに居間におかれ、大事にせられましたが、内膳の正がお留守の間に、いつもお側にめし仕はるゝお小姓が、若き心にいたづらにも、其の弓を素引して見やうと思ひまして、引き込みましたら、もとより古きお弓でありますから、さのみらんぼうにもつたのではありませんが、大鳥打の外竹がはしりて、こはれました、そこで此のいたづら小性は、おどろき眞靑になりて、後悔を致しまして、いろ／＼につけて見ましたけれど、一旦引き放ちました弓の、あとにかへるべき道もなく、しほしほ、御家老のものへ、この由を聞えましたのに、それは、以ての外の事をしてけるよ、其のおん弓は、板倉家、代々につたへられたる、御重寶なれど、御きげんの程もはかりがたしとて、まづ遠慮いたせと申されぬ。かくと聞きては、いよ／＼、いたづらせし事の口惜しく、お手うちになるか、切腹を申しつけらるゝか、何れ重きおとがめを蒙むらんと、生きたる心地もなく涙にしづみ入りたり。やがて、内膳正お歸りになりけり。家老、折りを見て、お小性がいたづらの事を申し上げ、何とも申分けなき次第、何とぞ、御寛大の御しおきをと、恐る／＼申述ぶれば、内膳正きかせ給ひて、其の者これへ呼べと申されけるに、いたづらものは聞きて、すはこそお手討と覺悟しながらも、なほ悲しく屠所の羊の歩みも、たど／＼まかり出で、ました。内膳正は、お小性をいとおだやかに見そなはし、つねよ

り、おん聲をやさしく、我が居間にかけありし弓を引き折りたりとの事、其の方は、つねぐ\、我へ、奉公の志深き故、心の外の忠義をなしてけるよ、そは、何



故と云ふに、かの弓は、某、つねぐ\、身に難義の來る折り用に立てんとて、かやうに、居間にかけおきつるなり。しかるに、其の方、素引して折れる弓ならで、我引くとても、又、折れるは必定、今、汝、素引して弓を折らずば、我ゆゑあるときに、之を用ゐて、思はぬ不覺をとるべし。急難の折りならで、無事の事に損じしは、こよなき幸、何をあやまる事のある、よろこぶべき事ぞと仰せられしに、いたづらお小性は云ふまでもなく、近習、外ざまの侍まで、感涙を流して、此の主のためには、如何なる玉の緒をたつともをしからじと思はぬものはなかりしとなり。さもなき事にも、人は腹立ち安きもの、まして、家代々の重寳を損ひしなど云はゞ、誰れとても

腹を立つるものでありますが、よく〳〵心をしづめて此の内膳正のやうに思ひわきまへなば、人もよろこび、己も、また、人を罪し損はで、すみます、めぐみ深き母にならうと思ふ孃たちは、此の話をな忘れ給ひそ。

思立旅の記

故細川治年の女

此の紀行は熊本藩主、細川越中守源治年朝臣の第末女にて。京都の公卿。久我家の令夫人に。輿入の時。江戸邸より。上京のをり。ものせられしを。予が親族。熊本藩士。鹽山又右衛門林常が。令夫人の側用人をひさしくつとめて。京都にありしころ。令夫人の手づからたまひし。自筆のものとぞ、今度寫して。こゝにいだしぬ。稽古の料になしたまへ、

佐々豊水誌るす

文化四の年、彌生の、はつかあまり九日、朝日影のどかなるに、故郷を立いづ、まことに、今日こそは、年ころのほいをとげ、都へおもむく旅なれば、いとうれしさは、いふはがりなけれども、さらでだに、しばしのうちのわかれさへ、名殘あるものを、まして二度、かへるべしとも、おぼえねど、いまさら武藏野の、はてしなきことのみ、れもひつゞけ侍りぬ、

おもひたつ旅のこゝろのつゆけさも
わかるはそでにまづしられけり

かくて品川にいたり、しばしやすろふに、孝應の、此所まで來り、こたびの餞別にとて、一首の歌を詠ておくられけり。

わするなよほどは雲居のそらにしも
つきよはなよとなれし世のとも

かへし、

なれし世の友をぞいかでわすれまし
つきよはなよとみるにつけても

なほつきぬなごりをゝしみつゝ、時もうつれど、立わ

かれゆくほどに、つくづくとおもひやられ、はるばると、都へおもむく、旅の道、いかゞあらんと、いと心もとなきに、はや暮ちかく、田面に、蛙のなくをきくも、心にさびしくおぼえて、

旅なれぬゆふべのみちのものうきに
　こゝろほそくもかはづなくなり

やう〳〵、暮ふかく、六郷のわたりにいたれば、なにかは春のことなり、松ともしたてゝ、川のほとりにのぞむ。やがて、舟に、駕かきのせて、わたるも、いとさうざうしくぞある、ほどなく、川崎のやどりにつきぬ。此所まで、おくり來し人々に、おはみきすゝめなどして、今宵は、何くれと、旅なれぬやどりの、ものさわがしきにまぎれて休みぬ、

晦日

つとめて、つくづくと、ながむるにも、たゞ故郷のことのみおもひやられて、

草まくらむすびそめてしゆめにだに
　ふるさとびとのおもかげにたつ

おくり來りし人々も、こゝにて、わかるゝに、いと名殘ぞをしまれける、とかくして出ゆく、道すがら、ころしも、在國の人の參勤のをりなれば、はからずも、こゝ、かしこに、ゆきあひて、いとうれしく、なつかし。かな川に、いたれば、おもひもかけぬに、齊樹朝臣の、馬にて、ひそかにきたられ、とくよりこゝに、待てありけるを、つゆしらでまゐりあひたるも、なか〳〵うれしともいふばかりなし。しばしがほど、物語などして、さていつまでありても、名殘はつきじとて、ともに立わかれぬ。程ケ谷のやどりもすぎて、ほどなく、武藏、相摸のさかひにいたる。こゝに、此の國のかぎりぞと、いとすぎさりがたくおぼえて、

ふるさとはこゝろつよくも出にしを
　なにいまさらにゆきなやむらん

戸塚の山をわけゆけど、やゝくれかゝる空のけしきのさびしきに、杣人、薪おもげに、おひたるが、家路に

かへるけしきも、ところからいとおかし、

いづくよりかゝる山路をはるばると
たきぎこりつゝわけかへるらん

とかくのうちに、日もくれゆけば、さらでしもわづらはしき、山路のなほはるかにみればえ、からうして、藤澤のやどりにつく、

朔日

曉より、雨しきりにふりければ、川々の水かさまさらん、わたりのほども、いかならん、とくとくといふに、はるゞるとおくり來りし人の、今日、此所より立かへるに、わかれゆくなごりさへも、えいひあへずして、いそがはしく、心ならずも立ちいづ。なほかきくらしふる。まゝに道のほとりに、立つゞく。木末の風も、身にさむくて、夏衣立かふる、ことわするゝぞかりにぞおぼゆる。馬入川にいたれば、待もふけたる舟のよせつらねたるにうちのりて、川つらをみわたすも、雨のうちなれど、ひとしほめづらしおくかし、むかひの岸を、みれど、土州、一柳などの、わたりたまふにぞありける、やがて、あまたの舟どもの、あなた、こなたより、ひとつにやりちがひて、おしわたりゆくに、いとものさわがし、なほゆきゝて、酒匂川にいたれど、すこし、雲間もみゆるばかりになりぬ。川のれも、川のほとり、もつともきよげなるに、見わたさるは、山々のけしきは、えもいはず、きゝわたりし川よりも、まさりてぞおぼゆる。とかくはいふものゝ、すべて、何も、何も、をかしからぬ所もなし。なほゆくさきは、いかならんと、おもひつゞくるほどに、今日も暮はつるころ、小田原のやどりにつきぬ。

二日

つとめても、なほ空の雲ははれず。ことに、今日は、名におふ、箱根の山路なれば、たやすくも越がたかるべしと、いそぎ立いづ。やがて、坂路にかゝれど、谷川をながるゝ、水のひゞきも、ものすさましくぞきこゆる。やゝわけいれば、夏木立しげりあひたる、青葉の

なかに、一木の櫻、をりえりかはに、いまをさかりと、さきいでたるも、いとめづらし、

あはれまた人もたづねぬみやまには
なつかけてさくはなもありけり

山ふかくなるまゝに、地は石をたゝみ、あげたるやうにて、さかしきこと、きゝしにもまさりぬ。からうじて、のぼれば、是ぞ、此峯のかぎりと、れぼゆるところに、おもひもかけぬ、湖水のみえければ、

たよりなき山のたかねにみづうみを
いつよりかくはたゝへそめけん

やがて、關路も越え行ど、いつしか、雨雲もはれぬ。それよりほどちかき、やどりにやすらふ。常は、此むかひに、富士の山みゆるよしなれど、まだ雨の名殘なれば、さらにみねず。あはれ、すこしははれよかしと、いひてうちまもるに、をりふし、雲の立わかれ、雪の光のにほひやかに、あらはれければ、うれしくて、

みるがうちに高根の雲ははれにけり
あめのなごりのそらともなく

ほどなく、こゝも立いづ。道すがら、富士のすがたのめでたきを、ながめつゝ、ゆくほどに、今日も暮すぎぬ。今宵は、三島にやどりをとる、

三日

朝日影のどかにさしわたれど、やがてやどりを立て、原、吉原のあたりをゆくに、富士のあざやかにみねければ、

日の影もまばゆきばかりこのあさけ
くもゐにはふゆきのふじのね

所につけて、みるけしきの、かはりゆくもめでたし、まことに、筆にも、詞にもれよびがたしとは、是なるらんと、えばしが間、めかれもせずみるうちに、麓の雲の立のぼり、ありつる富士の、名殘もなくみえずなりゆくぞくちをしき、やがて雨もふり落ぬべき、空のけしきなれど、今日のやどりへといそぎぬ。

四日

よべふりいでし雨の、今朝までも、なほ、はれざれど、道のほども、いとわづらはしけれど、しばしがひまもいそぐ旅なれば、いかゞはせん。いそぎやどりを立いづ、さつたの山を、越え行に、此の峠にいたれど、常にはれし時は、はるかに、伊豆のみさき、富士、三保の松原もみゆるときけども、しきりに、雲の立おほひたれば、音にきゝしは、いつはりなりけんとれもふぞかゝに、そのけしきもなきぞいとをしき。それより、興津わたりをゆくに、此所よりも、三保の松原のはるかにみゆるといへど、このあたりの家にしばし立よりてみるに、海面のなべて、くもりたれど、さだかにもわらねど、さすがに、名たゝる所とて、雨のけしきも、おかしくぞある、

遠ちこちのほどもわかねどあめの中の
　　なみちおぼろに三保のまつばら

それより、阿部川にいたりぬ。此所は、かちにてわたる所とて、あやしの、れんだいといふものに、駕ながらかきのせて、わたるなりけり。つひにみなれぬわざなれど、いとあやふくおぼえて、やう〳〵むかひの岸につく、とかくするうちに、はや、日もくれはてゝ、戌の時ちかきころ、丸子の驛にいたりぬ。(つゞく)

家兄遺文

白松園主人

寐覺草紙

きのふまで見し、あづまの旅の夢も、軒端にかよふ松風のおとにおどろきさむれど、つゞれさせてふきり〴〵す、蟬のしらべも異なりて、露におきふす床夏も、女郎花のぬれたる顔も、朝貌のやさしさも、皆、枕近う見えたる。おほかた山里は、こゝちよげに、めさむるおもひのするものなりけり。岩間より湧き出づる清水を、手に受けて、頭そゝぎ、顔洗ひ

て、朝餐したゝめつゝ、北風凉しき窓のもとに、書箱數多とり出でゝ、例の虫ぼしせんと底うちかへし見るに、あはれ僅かひとゝせのうちに、虫の、いといたう食みける者かな。わきて　おのが、こよなう思ひける、父の日誌も、おほくは、此の害にかゝりて、讀みわきがたきまでになれるこそ、悲しけれ。主の留守は、何事もびんなきものぞと、ひとりごちつゝひとひらづゝおしなほしもて行くなかに、なき兄の、をさなき時かきすさびつるものなん、おほくいでたる、れはかたは、反古のはしに記したるなれども、なかには綴ぢてひと卷とせるもあり。よになき人のかきつる者かと思へば、なつかしくて、うちもれかれず、先づ寐寤草紙と題せる者より、年をれひて、つぎ〳〵に記してむ。漢文なると、和文なると、共にあれど、漢文のかたは、すべて省きつ。そも〳〵この頃は、維新以來、年なほ淺く、西洋の文物技藝に心醉して、歐化主義の絶頂に達したる時なりければ、片山里に至るまで、和漢文やうなきものにはふらされて、顧みる者だになかりき。我兄、心ざま、いとたけくて、十ばかりのころよりは、軍記物語等の書をこよなく好みて、板を切りては、鎧を作り、牧場に行きては、馬に乘りなど、雄、雄しき武夫のあとを慕ひ、いかで男子と生れては、馬に乘らでやは、劍を佩かでやはと志ざすに至りぬ。さるからに和歌和文を讀むことをも、いとよろこびて、人の家より古書など借りきては、父の目を忍びてはよみけり。さればおのづから、漢文つくるよりも、國文作ることを好みて、いとまあるをりごとには、そゞろにかきすさびけり。田舍には、まだ和文などいひては、夢にも書く人なかりけれど

學びの師もなく、よき書もなし、されどみづからの心にも、學ぶといふにもあらず、たゞすきのすさびに、讀みもし書きもしつるなり、文中、語格假字遣ひのあやまりは、をさ〳〵見えず、まゝおのれがひきなほしつる處もあれど、文章は少しも改めず、すべてもとのままなり。まだ、をさなきをりのことなれど、筆つたなく、心いたらぬは、さるものぞと見ん人は見給へかし。

ねざめ草紙はしがき

あはれ、世に住へど、をかしきことも、悲しきことも、うるさき迄になん多かる。されど、若き時のみにこそ。おいかゝりては、何をかは目に見、耳に聞かむ。すべてをかしきを見、悲しきをきくも、たゞ、その時のみぞかし。沖ゆく舟の過ぎけん跡は、またなにをか見、何をか聞かむされぞこそ、よにふみてふもの出來にけれ。われ、今よはひわかく、世のをかしく、かなしきを聞く事しきりなり。そもわかき時いくぞくぞや。ときはぎのいつまでも、かくてはあらじ。いでや忘れぬひまに志るしおきなむ、むかしをしのぶたよりともなり、老ての後も、岩間の清水わきかへるべき心地やせましと、おもひてなむ。

明治十八年三月　新井健之助識

生年十六歳

第一段

雪のいとをかしう降れる日、火桶かきいだきて、さうじすこしぞかりあけ、四方のけしきうちながめて、歌などかうがへたる、いとをかし。又、友などこよと思ひゐたるに、柴の戸れしあけ、袖うちはらひて、いりくる人あるをくびさしのべて見るに、おなじさまに、心をすます友なり。うちゑむまなもくあがりて、はかなしごとうち語らひたる、いとうれし。ひたいつきよきはぎのそのことをつぞへて、あとさきたしかならぬ物

語などさせたるも、をかし。すべて、雪のふりたる日は、老いたる人こそつぶやけ。わかきものは、何となう心うれしきものになむ。

第二段

賤の男ども、ておひの鷺おりたりとて、かしがましくうちさわぐ。出で見るに、げに、十町ばかりへだてたる水田に、しろきもの、かすかにうごくさまなり。あたりをすぐる人、みなさりげなくゆくは、いかにぞや、いとおぼつかなしとおぼゆるに、賤が男のども、はやうちとらんとて、あるは鍬、あるは棒やうのもの、ひきさげてはせ行に、やうやくかのほとりになりて、えものをばうしろざまにかくし、さしあしして近よりぬ。鷺はなほしらずやありけむ、にげんともせず。やがて今うつかと見るに、何思ひけむ、皆棒うちかつぎてかへりけり。案山子に、白きぬなどつけたるが、風にひらめきて見えけるなりとぞ。おのれこれを聞きて、さ思ひしことよと笑ふに、賤の男等、うちつぶやきつつ興さめがほなる、いとをかし。

第三段

物しらぬ人には、三史五經の道々しき教をよませんよりは、芝居を見するにしくことなしと、某のいひけむ言葉は(自註)松乃屋文集に見えたり。むかしは、さることもありけめど、今の世にはやくなきわざなり。昔も、今も、芝居の物のあはれをもよほす事こそ、かはらねども、今の若き男女は、その中の、たはれたるをのみむねと見て、哀をえ汲まぬのみかは、はては人くずの役者をさへ、めづるやうになんなりぬる。芝居見にゆきたる人人の、道すがらの話をきくに、若き男女のみかは、四十路にもあまりたるさへ、なにがしはいみじき上手なり、くれがしもわろからずなど、役者の評をのみして芝居を見て物の哀をしりぬとは、露ばかりもいふ人なし。たゞ哀をいうて、はなうちかむは、れいかゞまりたるあやしの翁などのみ。かひなき翁等が、今さらに物のあはれをしりたりとて、何にかはせん。さしあた

りて、しらでかなはぬ若き男女は、芝居をぞよそにして、役者にのみぞおぼるゝなる。そも人がらにこそあれど、いふものあれど、(自註)松の屋文集に、わかき男女に見せてはわろしといふ人あれど云々、人がらにこそあれと出てたり。れしなべてしかるをいかにせむ。されど、昔の人の心正しき時だも、なほ若き男女に見せてはわろしと、いふ人ればかりき。ともあれ、かくまれ、芝居は、若き者に見せしむべきものならず、老たる人々のうさぞらしばかりにやなるべからむ。一たび、芝居見にいけば、物のつひへすくなしとせず。そのあしにて、さるべき琵琶法師などよびて、むかしのをかしき物語かたらせて、聞たらんこそ、中々にあはれはふかゝるべき。

第四段

すべて、人は嗜むことよりぞ、身をあやまる者おほかる。むかし、武田晴信は、笛をこのみて、命をおとしき。足利義勝は、馬に乗ることをたしみて、身をそこなひき。されど、たしむことにて、身をたて、面目を施すこともおほし。よきほどにわりなむ。

第五段

ある男、いたく劔術をたしみけるが、かつて、友一人二人して、たびだちけるが、道に山だちに出であひけるに、友らは、身におぼえたるわざなければ、にげうせにけり。かの男、日頃をたのみて、一人たちとまり、ぬきかざしてむかひけるが、あまたの山だちにとりこめられ、つひに斬り殺されにけり。山賊ども、衣をだ剝ぎとりて、屍をかたへなる、古井の柱にかけれきて、うせにけり。すべて、わざは覺えたるがよけれど、なまればえいとあやうし。心には覺え得たりと思ひぬるとも、かろぐしくふるまふまじきことなり。世のなま學者のくちさかしくて、不覺をとる事、いとれはし、かくては無下に知らぬかたぞ、まさりぬべきとやいはまし。

(以下次號)

禽獸の言行

田端の隱居

小貳大友、何の狗鼠ぞ、世に國を愛さず、君を尊むず、私利のみをたくましくするもの、もとより、狗鼠なり。むかし豐臣秀賴の臣、木村長門の守と聞えたるは、いみじう堪忍づよき人なりしが、名は忘れたるが、あるあらくれ法師、大野にくみして、長門の守に、さまざまに無禮を加へ、はては、長門の守が首を叩き、なまくら武士とさへ呼ばりたり。されど、長門守は、なほ怒らず。そのまゝに捨ておきけるを、傍らの人、見て、君ほどの勇もて、彼の法師、一人、何の事かある。うちころし玉へと云ふを、我が勇は、君がためにこそ用ゐめ。何の蝿法師などに用ゐんやと、げに、義も理も知らず、無禮を加ふるものは、蝿、かの、五月の頃、わき出るさばへなりけり。さやうの者には、かまふもうるさし。もちだにのべ、くされ酒だに設けて、よき程

にすゑおき、自死するを待つべきにこそ。何事も小成に安じ、鯤の南冥するを思はず、反つて、之を笑ひ、我決起して飛で、楡枋に槍す時に至らずして、地に控るのみ、彼、何ぞ南をはかる事の大なるやと、これ、蜩か、鷽鳩か、扶揺に搏して、鵬が九萬里に上らんとするを聞き、彼何處に行かんとするや、我騰躍して上るも、數仭にすぎず。下つて蓬蒿の間に翺翔す。此、また、飛ぶの至りなり。彼奚か適かんとするやと、斥鴳、笑うて、小は大を知らず。小虫、小禽、もとより、鯤と鵬との心を知らざる、燕雀が鴻鵠の心をしらざると同じ。人も、大人が心を知ざるもとより、燕雀か、蜩か、鷽鳩の徒のみ。

意氣（一）

白魚女史

白雲、流水、いづれはかなき世の中は、昨日の富貴も

うたかたの、今日の全盛も水の泡、消えつ、もえつ、かげろふの、住家も、ありかも、もとより定からぬ世とは云へ、之は、又、浪花屋とて、難波津に咲くや目出たかりし生糸商店、主人の義作の、あまりに義に富みしばかりに、主の負ひめを身にひきうけ、家も、倉もうりしりぞけて、いとしや、一義にしづみし伏屋、いぶせげにしはぶきして、コヽ、こや一作、オヽ、おきてか、ヒヽ、日影も高う上りたるに、マヽ、まだか、へ、へ、返事もせぬ程にねこみをる、ノヽ、のろ一め、もう起きぬか、グヽ、ぐづ作め、何處までねぼうぞ、アヽ、あほうめ、ぐづめ、クク、口惜しい、口惜しい、クヽ、口惜しい子をばもちけるよと、病ひに言葉もふるへながら、立たんとするを、妻のおしとゞめ、今日は、休暇日、今、少しゆつくりさせておやり遊ばせ、私が起します、さやうにおせき遊ばさでと、その身はやつれたれど、言葉は、なほ、むかしながらにしとやかに押しとゞむるを、此方は、いよ〳〵せきこみ、キヽ、キヽ、キュ、休暇日が何ぞ。休暇日には日のさし方がおそいか、オオ、おろかめ、キキ、貴様が、ソヽ、そのやうに甘き故、ノノ、のろ一が、いよ〳〵、ノノ、のろくなる。おヽ、おろか、た、たわけ、ビヽ、貧乏人は、休暇日はなほの事、勉強日だ、オ、起せ、オヽ起せ、スヽ、すぐひつ起して、コヽ、こよと、いよ〳〵せきこみ、身躰ふるはせて、立たんとするを、あな、もう、只今、起します、御病氣にさはりますとて、妻なる人はねおきるに、ナナ、何が病氣にさはると思ふ、ただ、己には、ノノ、のろいのが病氣にさはる、ケケ、決氣せぬが病氣にさはる。クヽ、口惜しい、くヽ、口惜しい、まだ起きぬか、ジジ、じれつたい、じれつたい、腕も、手も、シ、しびれて〳〵、ムム、むしやぶりついて、ヤヽ、やりたいは、やりたいはと、床にもがきをりしが、やがて、がばとはねおき、ありあふ煙管をおつとつて、一作に一鞭、きつと一作をにらまへて、あとは、ぶる〳〵、妻はあきれて、夫が帯のあたりを



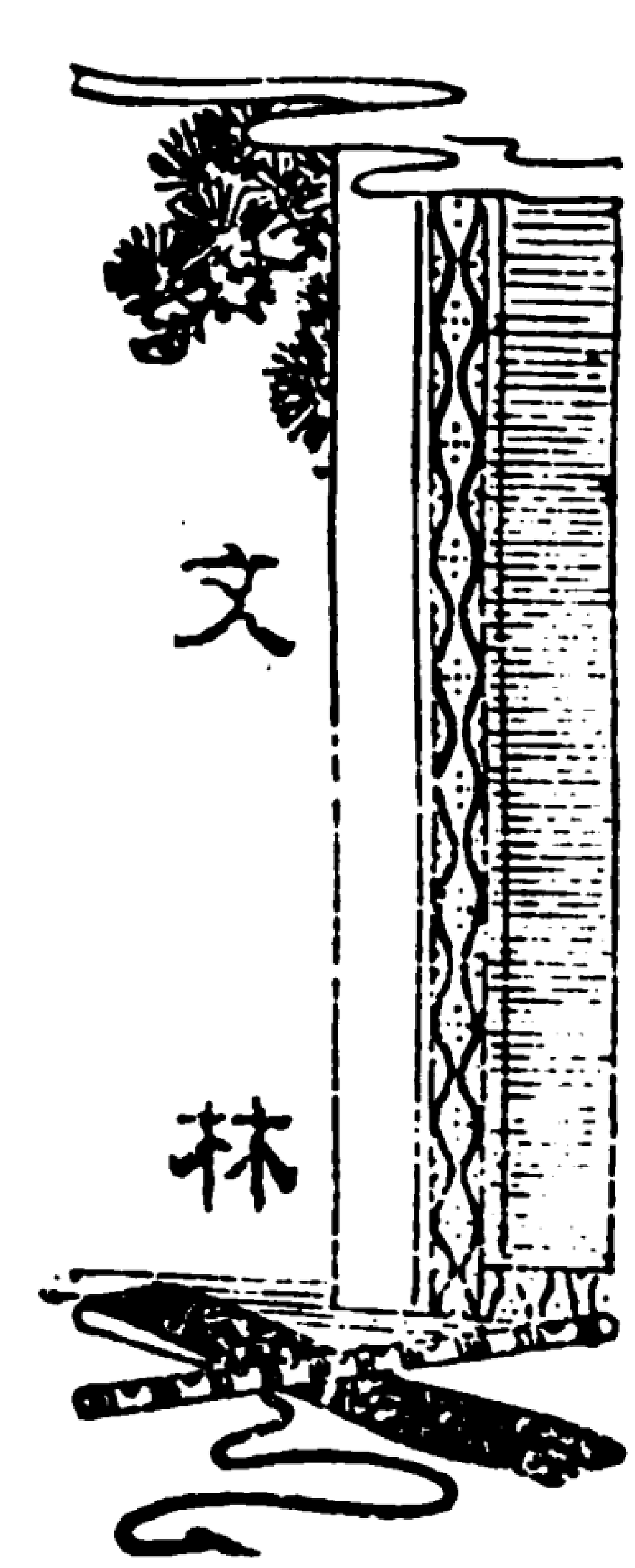
うち守れど、一作も、たゞ起き出でゝ、しぶ〳〵衣服を着かへ、帶をしめて、何の言葉もなし、義作は、まばたきもせず、口をかみふるはして、にらまへをりしが、ソヽ、くされ男、イイ、いつまで、ソソ、掃除夫で、ヲヲ、をるつもりだ、ケケ、決氣する事を、シシ、知らぬか、ソヽ、口惜しいとて、一きはせきこみ、一作が、襟がみをつかみ、しびれし手をふり上げて、又や、一うち、二うち、三うち、エエ、ジジじれつたい、コヽヽ、此處な腕め、ココ、此のやうな奴には、モモ、もつといたくなければ感じぬはとて、又や、一うち、力をこめてうちはたけど、煙管のがんくびは折れて、宙をとびて、まだあけぬ戸に當りたり。何事も云はず、一作も立ち上りて、雨戸をひきあけ、書物を片手に庭に下りれど、母は、たほく、泪をうかめて、一作、ぢきに歸れ、御飯ぞとは、行く先きを氣遣ふにやあらん。はいと、たゞ、答へて出で行くあと、父は、なほ、きつとうち守りて、ナ、何をしてくる、ヒヒ、引きもどせ、オ、己の前で、シ、しろと云へども、彼方ははや、遠く影も見えず。ほんに一作もふびんな、好んで滊車の掃除をするにもあらぬなど、聞ねど、夫がかんしやくの種子と思へばや、低き聲にもらしつゝ、勝手口をあくれど、まだ、夜はしらみしばかりなり。

父は、五十に近し、母は、四十を越えしばかり、一作は、廿歳を一つ二つ、父の癇癪に、目はさめてか、さめでか、泣きもせず、怒りもせず、何を考ふるか、茫然、ぼんやり、己がつまさきを見るともなく、見もともなく、首をうなだれて、ぼつ〳〵歩み、かや原、篠原をかき分けつ、ふみしだきつ、難波江に至り。岸なる松の根に腰うちかけ、書をひらきて、二三枚よみたりしが、天を仰ぎて、一嘆息、嗚呼、つまらぬ。つまらぬ。學問などが、何になる。書をよめど、何の得る所があるとて、そのまゝ書を捨てゝ、末だねぶきか、眼をも閉ぢたり。

「くらからぬ心の玉はありながら、みがき得ざらん人

ぞ悲しき」と遠く歌ふ音、松か根にひゞけど、一作はまぼろし、なは、うつゝならぬ耳をかすめて、「しき島の一すじにだに山川の淺き瀬を知る人もありしを」となは、細く歌ふ聲、芦の葉も、さやさやとならせど、松が枝も、ひたりと、なびく、一作、ふとおどろき、人やあるとあたりを伺へど、岡にはかるかや、濱にはむら芦、たゞさやさやと一方になびくのみ、立ちて、あたりを尋ぬれど、人は見えず。たしかに、細き、高き女の聲、歌も、半ば、おぼろならず覺ゆるは、之や、山姫か、立田姫か龍宮の乙姫かと、空を見つ、入江をながめつ、たゞ、聲のみを尋ねて、歌の心を知らんともせざりけり。

なれど、非番毎に必ず、其處に來り、もしはとて、あたりをながめぬ。なは書をよむ事は、一枚か、二枚か、三枚がせきの山、今日も書をすてゝかやの上にねぶれり。又や、細き、高き女の聲して、「賢者は、心靜なれば、よく思ふ。愚者は、心靜かなれば、よくねぶる。あな恥かしからずや」しゞの聲、風の傳へて、かるかやさはがしく、一作が、頬をうちたり。おどろきて、あたりを見れど、篠原、芦原ともにさや立つ中に、かや原尤もゆらげど、人影はありや、なしや、六尺あまりに生ひしげりて、それとも分かず。



雨中新樹　東久世通禧

若みどりえだ重げにも見ゆるかな
　あめのしつくにしなへ増りて

山影寫水　前田利嗣

さかさまに木立は見えてつき山の
　影おもしろきにはのいけみつ

夏塵　高崎正風

雨ふりていよ／＼清くなるみれは
　わか葉か上もちりはありけり

船納涼　長谷信成
さしてゆく舟ぞた近くすみだがは
　花火もちりてすゞしかりけり

海眺望　宮地嚴夫
ゆきかよふ船のけふりの絶まなく
　見えてそわたれたけ芝のうら

望遠帆　小出粲
島やまのまつより上にあらはれぬ
　しばしかくれしおきの白帆は

遠郭公　植松有經
ほとゝぎすまだ里なれぬ程ならし
　鳴とはすれどこゑのはるけき

芍薬　鎌田正夫
とみ草のふかき色かにけおされて
　花もえびすの名をや負けん

朝梅雨　大口鯛二
梅雨はまたはるべくもみえなくに
　ひかけはのめく朝もありけり

引田部赤猪子　遠山英一
老の波よるともしらで三輪かはの
　やそせを君はこえてけるかな

夏の夜函根山を踰ゆ　岡部譲
涼しさに月ぞ身にしむはこねやま
　なつの外をや滊車はゆくらむ

扇　三輪義方
たらちねのまくらあふぎしいにしへも
　閨のあふぎにしのばるゝかな

新井白石の母　佐々豊水
柞葉のかげなかりせぞかゞみなす
　新井の水はすみかへらまし

泉亭風涼　諏訪忠元
清水わくおともすゞしき我いほは

かせもかよひてなつなかりけり

蓄音器　　足立正枝

むしの音も鶯の音も此うちに
たくはへおきて常にきかなむ

朝鮮の王妃殺されし時よめる　　赤松景福

庭津鳥鶏のめとりの暁を
つくるそのねは打やめてけむ

梅雨晴　　鍋島榮子

さみだれの去つくも絶て庭たつみ
今宵はつきのやとりけるかな

曉旅行　　前田朗子

鳥の音におとろかされて草まくら
またきにやとを出でけるかな

夏月　　小池道子

蚊遣火のけふりたえたるたか宿も
のきやはなれて月やみるらん

夕郭公　　松平健子

村雨のはれてすゞしきゆふぐれの
そらに一こゑなくほとゝぎす

夏鳥　　大河内鉦子

短夜のおきいでかぬるあかつきを
いさめかほなるにはとりの聲

藤原百川公　　南郷柳子

君をおもふこゝろもふかき百かはの
なほ世にたかく聞えけるかな

張良　　大谷章子

ますらをが耻を忍びてとりわけし
履こそおのかたからなりけれ

草庵螢　　中牟田常子

世の中をはなれてすめる草のいほを
よるとふものはほたるなりけり

市中梅雨　　鶴久子

市にたつ人のとよみもさみたれの

ふりさつめたるこのころの空

以利沙伯　河村重子

あつもの丶鳥の肉こそとひたちて
勝はこりたるためしなりけれ

偶感　稲島きた子

おくれしと思ふこゝろにつれなきは
ひまゆくこまのすゝむなりけり

秋の影の中に　海上壽子

さをしかの聲さへきゝつ眞萩さく
野守が庵に一夜やとりて

月前興といふことをよめる歌幷短歌　海上壽子

いよすだれ軒にかゝげて、高々に吾待をれは、秋風の吹のまに〳〵、立こめし霧晴わたり、棚びきし雲晴行て、やう〳〵に月こそのぼれ、月毎に月はあれども、かくはかりさやけき月は、玉くしげ二夜とあらめや、此月の更るを惜み、魂あへる友らつとへて、新さはりくみかはしつゝ、おのも〳〵ゑひのまぎれに、風流士は笛吹すさび、少女等は琴かきならし、たぬしけく遊ぶ此夜は、あけすもあらなむ。

短歌

おもふどち酒くみかはす玉うきに
清くもゆらくよはの月影



雑報

● 陛下炎暑をさけ給はず、今や、朝廷の官官の人たちを始め、有司の人々、皆、いとまを給はり、所々の浴場、または、別荘など、孰れも清凉の地を求めて、日頃のあつさをさけし事なれども　陛下には、此の殘暑の、いと酷しきにもかゝはらせ玉はず、例とかはら

せ玉はず日ごと〳〵午前五時に御起床あらせられ、同八時より午後四時過ぎまで、御學問所に臨御あらせられ、よろづ御親裁遊ばされ、其の間に近わたりの事より始めて、地方のでき事などに、かしこくも　御聖慮を惱せ玉はり。夫々侍從を遣はされ、其の實況を視察せしめ給ふなど、時の間も、大御心を安め玉ふ御暇とては、御はしまさず。本誌に、既に報せし如く、西京に御行幸ましまさんと承はりはべりしかど、今日まで、何の仰も出したまはさるは、れはかた、其のごさたもやめたまはるならむ、又、御玉詠は、七月の初旬より、この頃まで折り〳〵よみ出でさせたまへる御製は、百首あまりもおはすとぞ。

●坤德　既に記し奉りしごとく　至上には、酷烈堪へがたき秋暑をも、更にものともせたまはで萬機を見そなはし玉へど　皇后陛下も、御勞苦を分ち玉はんとの御心にて、日々、常の御殿に出御ましまして、赤十字社の事業に付ては、其の社長より申上げ奉る外國內國所々のさまを聞こしめされ、又、この頃は細川華族女學校長、下田同學監を日々、召寄せ玉ひて、行末の女敎育の事に就きて、色々御とひ玉はるなど、また、近頃、四方に火災など多かれど、こも聞召し玉ひて、いとも、大みこゝろ傷しめ玉ふと承はる。かの、かなた、こなたに靜閑の地を求めて、あるは、溫泉あるは、海水浴などと、暑をさけし女たちは、此の御事を傳へ聞かば、いかさまにか思ふらむ。

●御下賜　青木外相、曾禰農相、高平外務次官、及赤羽四郎氏は、改正條約實施に關し、事務鞅掌の勞を嘉みし玉ひ　天皇陛下より、蒔繪の手函、一箇宛を賜りたりと右に就き曾禰農相は、去月十五日片瀨より歸京し參內の上御禮申上たりとなむ。

●御救恤及侍從差遣　富山横濱兩市、火災に付罹災者御救恤として　天皇皇后兩陛下より、左の如く御下賜金ありたり

六千五百圓　富山縣

三千五百圓　神奈川縣

廣幡侍從、をば横濱へ差遣せられ、富山へは片岡侍從を遣はさる

●御救恤金下賜　去月十四日鹿兒島縣下、非常の暴風雨に就き、被害尠からざる趣、憫然に思召され　天皇皇后陛下より、御救恤として、金九千圓下賜の旨御沙汰あらせられ、同時に又、侍從子爵東園基愛氏を鹿兒島縣下へ遣はさるゝとの仰いだされたり。

●皇太子殿下の中禪寺行啓　皇太子殿下には、中禪寺に行啓遊ばされ、湖上に御舟を浮べさせ玉ひて、投網釣魚などの御慰みせさせ玉ふべしとて、はや、夫々の準備もとゝのひ、御道すぢの修繕もをはりて、何時仰出されても、支なしとぞ、また、其のをり、御一泊遊ばされなど、中宮祠社務所をもて、御殿にかへ、奉る由なり。同地の有志者は、流燈を御覽に入れ奉る考なりとぞ。

●伏宮禎子女王殿下　禎子女王殿下は陸軍中將貞愛親王殿下の王女に坐まし、御年十五歳に成らせ給ひ、御容貌いとうるはしくましくて、夙に、賢良の御名高く、目下華族女學校にて、御勉學中なるが、學德、共に勝れさせ給ふには、教官の人々、孰れも、感嘆し奉るとなん。

●帝室制度調査局設置　先月廿四日宮中に帝室制度調査局を設け、左の通、先づ總裁を置かれたり

正二位大勳位侯爵　伊藤博文

帝室制度設査局總裁被仰付

同局設置の目的は總て帝室の冠婚葬祭其他の大典式例に關する制度の調査を爲すものにして去る明治廿四年中設置しありし帝國制度取調局とは稍や其趣旨を異にする所なり去れば決して宮内行政上の事務に關し調査を爲す者にあらずして皇室典範に定められたる範圍内の典例に付之を調査し置くの必要あり現に先年英照皇太后陛下崩御の砌急に大喪使に於て之を古典に問ひ調査するの必要生じたるが如き其他王政維新後に於て始めて起り來るべき御儀式に關しては平生之を調査し治定し置かざるべからざるに依る去る明治二十四年中設置せられたりし取調局には伯爵柳原前光氏委員長に仰付られ委員若干名の任命ありたるが今回は伊藤侯總裁を仰付られ副總裁は同侯に於て人選の上奏請せらるゝ筈なるが多分

前宮相土方伯若くは現宮相田中子の內なるべしと云へり又右の外には御用掛若干名主事一名書記一名を置かるゝ筈なるが御用掛は勅任以上の人にして宮中の故事古典及び列國帝室の式例等に通曉するものを選任せられ主事は奏任書記は判任なるべし而して以上の諸官は一兩日中に任命せらるべきも右は臨時設置の者なれば別に官制等の發布はこれなき由猶同局にては皇太子妃冊立御祝典の式例等に付ても調査する由にて今回の御祝典は即ち爾後帝室の御典列と成る次第なりと承はる

●仁德天皇千五百年祭

大坂市なる高津神社にては來る七日より、三日間を期して仁德天皇千五百年祭を執行する由なるが、右に付き、大坂市教育會の主催、大坂府教育會の補助にて、南區空堀の育英小學校に、教育品展覽會を開く事となり、（主として、府下、各小學校生徒の製作品を陳列し、全國、各、小學校生徒の製作品を參考品として陳列す）委員は、昨今、東奔西走、此事に盡力中にて、教育品の幾分は、既に、送附し來れりと、又設備の一として、當今有名の畫伯たる橋本雅邦、川端玉章の兩氏、いづれの方にか仁德天皇炊烟御眺望の圖を畫かしめん筈なるが、其の上位に御詠を請ひ奉らんは最も望む所なれども、コは餘りに畏ければ、小松宮殿下の玉詠を仰がんとの議ありて、此の程西澤書記官が、東京より歸坂の途次、三島の御別邸に御滯在中なる小松宮殿下に伺候せしは、實は、此の用件ありたるが爲めなりと、尚、同教育會は全國に通知して、廣く和歌を募集するの企てもあり。此等の方法等も其の筋にて取きめたりとぞ。

●父の爲に肉を殺ぐ

昔時嘗て斯る例を聞きぬ。而かも、今の世には、絶えて、有ざりしを、僅かに、此の美談を耳にするとは、豈に、大に、吾人の意を强うする處のものあるにはあらずや、こゝに、尾張國知多郡岡田村の鍛冶職久之丞が子に、竹內久太郎と云ふものあり。生れは、慶應二年なり。幼くして、母を喪ひ、姉、三八とゝもに、父の手一つに養はれしが、久太郎は、其性質粗暴にして、屢々、その同輩などを苦しめ、また危險なる遊戲を喜べりきとぞ、されど、父、久之丞は、甚だ、之れを憂ひ、强て、夜學校に入れ、時の

訓導なる池野英介氏の監督うくる事となりしが、池野氏は、淳々道を訓へて倦まず、一に、其の心の善に移るを圖れりし結果にや、年月を經るまゝに、久太郎は、君恩、父恩、師恩を尊びて、頗る温良恭謙なる人となりて、克く、父母に事へ、一家は露ばかりもさはがしからざりき。恰も久太郎の年十五歳の頃のことなりしが、村内の青年十數人と倶に、吉野大峯山、並びに高野山に詣でけるが、師の教を思ひ起して、切りに山陵を拜せんと思ひ立ちければ、下山の後、人々に　神武天皇の　御陵を拜せんことを勸む。然るに先達の人は、之を拒み、その餘の人々も、切りに嗤笑しぬ、こゝに於てか、久太郎憤慨に堪へず、勵聲、一番して曰く、咄、汝等行者、大師の難有きを知りて未だ　皇恩の厚きを知らざるかと云ひ捨て、人々に別れて獨御陵を拜して、歸村せりと云ふ。されど、其の初め、切りに嗤み笑ひし人々も、今は、反て、其の志に感じあひぬる事もありとぞ。その後、姉も、各々、近村へ嫁ぎ、久太郎も、亦た、妻を迎へて、共に家業を勵み節儉を勉め、益々孝養を盡して怠なく、一男を擧げ、一家團欒して和樂の裡に明治二十九年十一月とはなれり。

月に叢雲の譬に漏れず、こゝに孝子の心を傷ましむべきことこそ生で來にけれ、そはいかにとなれば、唯ある夜のことなりけるが、父、久之亟は、俄に大熱發り、汗出ること甚だしく、苦しむ聲は、一家の者の夢を破りぬ、それ水よ、藥よと混雜する間もなく、醫師も來りて、容態を診察して、これは、惡血逆上して、頸の邊に癰の生ずるなりと云ふ、やゝ心を勵まして、樣樣と介抱する間に、姉たちも追々走せ來りて介抱る。久之亟は病苦の裡にも、子等が、まめ〳〵しき有樣を見て、喜ぶこと限なしされど、時日を經るに從ひ、病勢、愈々加はりて、空言のみ口走り。いと苦しき樣に陷りければ、今はとて愛知病院へ入れ診察を受くるに、院長の云へるは、這はカルブンケルとて、頗る難病なれど、よしや、今この局部を截り去りて、癒合せしめん

も、皮肉緊縮して、竟に猪首と成り了らん。若し健かなる者の皮肉を割きて、接ぎ合はせば、或は全きことを得ん。久太郎は、忽ち、愁の眉を開きて、さらば吾が肉殺ぎて、之れに充て給へといふ。然るに、久之丞の三女あいと云ひて、久太郎の姉に當れるが側らより押し止め、否とよ、卿は大切の身なれど、妾こそ好けれど爭ふ。久太郎、更に肯はずして曰へるやう、御身は、己に人に嫁せり。夫の家にこそ盡すべけれとて、双肩脱ぎ、姉を初め、人々の推し止むるをも顧みず、醫師の側に進み寄りて、この手術に要する皮肉の天保錢ほどの大さはかりなるを、兩臂より、三枚も切り取らせけれど、漸々、熱を發して、たゞならぬ容体にぞ陷りたる。

かゝりし程に一方にては久之丞熱氣のぼりて物もわきまへず、たゞ、久太郎よ、久太郎よと連りに呼びて、看護の人々を嫌ふさまなれば、遂に電報もて、久之丞の孫なる井上實を呼び寄せ、久太郎に代りて、看護せしむることゝはなしぬ。實、電信を得て、夜を冒して、病院に來り。久之丞の側にありて介抱す、久太郎は商用にて、俄に歸村して在らずといひ繕ひてなだめ置けり。さて久太郎は、三四日を經て、はじめて、人心地つき、父が快方に向へりと聞き、嬉れしさの餘り、われを忘れ、はね起きて、父の枕邊に寄りすがりなにくれとなく介抱し、いろ〳〵物語す。父も始めて治療の施術の始終を聞きて、わが子の手を執り感涙にむせびしが、日を經て、退院の許を得しかど、諸共に家に歸りて、ひたすら療養を加へしによりて、父子ともに程なく全癒しけれど、一門の喜び云はん方なく、神官を聘して、神を祀り。親戚朋友を招きて、盛に酒宴を張り。以て、父が、千秋萬歲を祈りたりとは、げに今の世に絶えて無くして僅かに存する美談ならずや。

◉孝子　薄命なる孝子、源吉と云ふは、靜岡縣靜岡市鷹匠町二丁目なる、望月源右衞門といふが、長子にて、母を吉子と云へり。源吉は、父と共に、曾て、安

東村抄紙社の職工と成り、僅かに、其の得たる處の賃錢にて、親子三人糊口し居たる內、今を去ること七年前、即ち、明治廿六年ごろ、母吉子は劇しきレウマチズムに罹りしが、その當時源吉の憂苦は、甚だしく貧しき內にも、能く、父を助けて、母を看護し、藥餌、その他の世話までも、一々源吉の細腕を以て、爲し居たりしが、母の病は、益々重く、遂には、身體不隨と成り果てたり。然るに、不幸は、更らに不幸を呼びて、一昨年中父、源右衛門も風邪の氣味にて打ち臥し、それより漸く重症に陷りし爲め、兩親は、たゞ源吉が、日每に得たる賃錢のみにて、心細くも、覺束なくも、その日〳〵を送りて居たり。

その時の源吉が憂苦は、一層ふかゝりしも、稼ぐべき父は、病に伏し、賴むべき母も起居さへ自由ならず。しかも自分は幼年の身のことゝて、殆んど當惑を極めたり。然れども殊勝にも源吉は、日夜寢食を忘れ。兩親の病患を看護して、少しも怠ることなかりしが、切りに勉めたる孝養も水の泡と、父は、遂に貧苦慘憺の裡に病死したり。

されど、其の葬儀をさへ營みかねたるを、そのこと端なく、彼の地の新聞に掲げられしかば、世の慈善家より、金錢などを惠むもの多く、之れを以て、からくも死者の野邊送りを濟せけり。その後源吉は母を慰め職業に勵みたるを、不孝にも、重き病にかゝりけるは、重ね〳〵も、薄命なることにして、家主、醫師はじめ、諸方の慈善家の厚意によりて、僅かに露の命を繫ぎ居るといふ。

●神林ふさ子　長野縣小縣郡殿城村の神林ふさ子といふは、父を長十郎と云ひ、資性溫良にして、幼き時より、父、冷痲質斯にかゝりて、行歩も困難なる身となりて、生活にも難儀なるを、能く看護の誠を竭しつゝ、その暇には、兄と力を協せて、家政を司ること十有餘年、父沒して後は、更に老いたる母に事へ、弟を撫育して、志操、毫も前に渝らず。其の孝悌篤行、ま

ことに人の鑑とするに足るとて、此の程、その地の園山知事より、褒狀を給はりぬとぞ。

●節婦　山口縣鍛冶職吉本某の妻發狂せる夫を看護すること數年夫の死後、舅姑につかひて遺子を撫育し、貧しきながらも、一家輯睦、曾て、世間に對する義理、人情を缺かず、近隣、其の苦境を察し、嘆賞せざるなしとぞ。

●運送者の慈善　横濱大火の後、東京新橋の明石屋運送店と、横濱本町の陸送組と、共同し、罹災者の荷物に限り、無代價にて、自宅まで運送する由なり。但し、是は、さる十七日より向ふ五日間にて、荷物の重量は、一人に付、十六貫までを限るとの事なりと。

●華族女學校　此度華族女學校にては、大學部を設けらるゝ模樣ありと傳へきく。はたして、しからむに貴孃たる上にはいともさいはひなることゝならん。

●東京女學館の改革　虎の門の内なる、東京女學館は、此度、前館長水野寅次郎氏を始め、舊來の事務員、皆、解職し、更に、女子奬勵會長土方伯を館長とし、同會評議員、外山、増島、澁澤、富田の諸氏、校務の取締にあたり。女子奬勵會にて、直接に監理することに改め、一二年級を廢して、三年の科程となし、高等小學校全科卒業以上のものを收容する事とし、束修月謝、其の他學費を増加したりとぞ。

●女學校と水産試驗所　三重縣には、私立女學校はあるも、未だ公立のものなく、女子の敎育、他府縣に比して、遜色あるより、這般　勅令の發布ありしを機とし、師範學校内に、女子敎育の一部を設置せん計畫にて、其の豫算を七千八百圓となし、明年度の通常縣會に、之が支出を要求することゝなれり。尤も、初年は、一、二學級に止め、漸次増設せん都合なりと、又同縣には、今回、水産試驗場を設置するに付き、枕川農商務技師、一昨日、同縣に出張し、昨日より沿海地方を巡廻して、適當の地所を定めん筈なりと云ふ。

●浦鹽港の東洋學校　露國は浦鹽斯德港に、本年七

月より、東洋學校を設立する勅令を發し、其の校則課目を公布したり。

●孤兒と負傷者の引受　横濱婦人共立育兒會の幹事有泉孝子は、大火罹災者の孤兒を引取り、又、常磐町五丁目八十一番地豫備陸軍軍醫鈴木謙之助氏は、火災負傷者を自宅にて、引受け、無料施療したき旨、警察部に申出でたりと。

●大寺少將名殘の愛馬　日清の戰役威海衛占領の際名譽の戰死を遂げたる故陸軍少將大寺安純氏が、戰役中乘用し居りたる有名なる、名殘の愛馬、精華は、爾來、第六師團司令部に於て飼養せしが、今回、宮內省へ献納し、同省は紀念の爲め、博物館動物園へ交付せらるゝ筈にて、さる廿六日、橫濱へ入港の西京丸は長崎より搭載し來り、翌廿七日橫濱稅關の手續を濟まし、府下へ送れり。

●赤痢と國富との關係　本年の赤痢流行は、昨年に比して、其の範圍、頗る廣く、患死者數も、本年末までには、昨年に倍加すべき勢なるが、今當局者の昨年度に於ける、赤痢と國家經濟との關係につき、調査せる統計を擧ぐれば、左の如し。

昨年中總患者	九萬九百七十六人
同　死者	二萬二千三百九十三人
赤痢豫防のため國庫の補助總額	十四萬八千九百廿二圓十一錢九厘
同府縣費總額	九十一萬五百廿二圓七錢一厘
同郡費總額	四千八百八十五圓六錢五厘
同市町村費	二百四萬九千六百十圓七十三錢六厘
同寄附金	四萬七千十四圓四八十四錢四厘
小計	金三百十一萬三千九百三十九圓九十九錢二厘
各府縣生產損害總高	金三百五萬四千九百六十九圓八十錢九厘
總計	金六百十六萬八千九百九圓八十錢一厘

右は、即ち昨年流行のため國家の蒙りたる損害總高なり。尙、之れを患者、一名に割り當つれば、六十七圓八十錢死亡者、一名につき、二百七十五圓なりと云ふ。

●世界各國時間の差異　此の度帝國大學教授、某理學博士が調査せるもの左の如し。

日本東京　正午

清國北京	午前十時廿六分五十六秒
波斯テヘラン	午前六時六分四十秒
露國ピータースブルグ	同四時四十二分四十秒
英國倫敦	同三時廿分四十秒
獨國伯林	同三時五十八分卅二秒
佛國巴里	同二時五十分廿秒
伊國羅馬	同三時三十二分五十六秒
蘭國アムスタルダム	同三時〇二分三十二秒
澳國維也納	同三時四十六分八秒
西國マドリツト	同二時廿六分八秒
希臘雅典	同四時十六分
埃及カイロー	同四時四十六分廿四秒
米國華盛頓	午後九時卅二分四十八秒
智利サンチアゴ	同九時五十九分廿八秒

●傳書鳩試驗　陸軍工兵會議の傳書鳩試驗せるを聞くに、過日神戸行日本郵船會社の滊船和歌浦丸に託し、遠州御前岬沖に於て放つ目的なりしも、折わしく、天候不良の爲め、往航には、試放を見合せ、復航の途次、去廿四日午前三時半豫定通、御前岬沖にて、四羽とも放ちたるに、四羽とも、高く飛ひ揚り、方向を定めて間もなく、陸地を指して飛行きたる由なるが、普通傳書鳩の速力は、一時間五十哩なりと云へど、其の飛行きし勢は、非常の速力なりしとは船員の語りし所なり。而して、其の結果は四羽の内、一羽は、さる廿五日午後四時四十分足に手紙を附けし儘、陸軍工兵會議へ歸り來りたれど、餘の三羽は未着なり。今何故、斯く延着せる乎を聞くに、最初、和歌浦丸の往航に試放せずして、一旦神戸へ行き、其の復航の途次放ちし爲め、方角に迷ひて・神戸へ行き、更に引返し來りしものならんと云ふ、隨て、他の三羽も、遲れながら歸り來るならんかといふ。

●老人の昔がたり　上野公園なる彰義隊墓碑の傍に揚げたる當時の戰爭の圖を見ながら、昔を語る六十路ばかりの、翁わなゝき聲にて語り出づらく、「翌朝、おれが來て見た所が、こゝの清水樣の前に、十八九ばかりの人が、二人、腹きつてゐた。一人は、未、死きらず、ぴく／＼してゐた、おたま屋の前には、三四人

斃れてあつた。そこの下に(石段を指して)ゆけど、これは首はなくて朱ぬりの笠があつた。立派な衣服をきた男であつたが、何でも、八百石取りばかりの旗下だらうが、こゝを(と頸を抑へて)鐵砲でやられたのさ。」わきの細道を、そこ〳〵のぼてみたら、百何十何の屍があつた。どうも西郷さんがえらい、官軍でせめて來たが、「其の賊の屍を、皆、ならべて、經文をしつかりかけて、それから、莚をかけた。其の内に雨がふつてくるからとて、皆、かたづけた。これが、廿六の年であつた」といふ。きれ〳〵に連絡なけれども、談、有りのまゝにて、そゞろに、當時もしのばれき。

●九十三歳の老嫗富士に登る　仙客來り遊ぶ雲外の巓神柳栖老す洞中の淵など、天つ國の如く思ひし富峯なれど、むかしは、のぼる人もいと稀なりけん。されど近來は、追々登山せしもの　多く有とぞ。近ごろ聞く所によれば、埼玉縣大里郡小原村まる山といふ所のもの六人、皆、五十路あまる女のみ、なかに吉野藤右衞門といふのゝ妻まつ子といへるは、ことし、九十三歳の老嫗ありしが、少しも連のものに遅れず。よくその苦しさに堪えて、首尾よく頂上にのぼり、翌日も、共にめでたく下山せしとぞ。聞くもの皆、古今の珍事なりとて、驚かぬものなしと、げに、仙客など、身そひしかと思ふはかりなり。





教の庭

九月五日兼題　閑居月

天

静けさをこゝろとすめる我やどは
月ぞまたなき友にはありける　石川縣金澤市下主馬町四十五番地　佐加井ため子

地

われのみと思ひしものを月かげも
すみてこそわたれよもぎふの宿　東京四谷區南伊賀町四十九番地　牧瀬から子

人

世の外の宿とはいへどよにもれぬ
あきのあはれは月にしるかな　肥後國菊池郡城北村　徳永識子

秀逸（十五首）

世はなれて疎くなり行く友の中に
月はちぎりもたがへざりけり　甲府　名取正代子

よの塵をへだつる宿はしかすがに
月もしづけくすみわたるかな　三河　加藤敷子

柴の戸もこよひはさゝじ世の外の
つきはいかにとひともこそとへ　石狩　畠山清子

もろ共に詠めあかさんひともがな
くさの戸てらすつきのきよきに　代年子

よを厭ふ柴のとなれどさやかなる
つきにはとざすよしなかりけり　奈良　小林やす子

まつとてもとふ人のなき草の庵は
こゝろすましてつきをこそ見れ　長崎　長澤ひで子

とふ人のなきやどなればてる月を
この世ひとつのともとこそみれ　和泉　福原董子

とふ人はたえてなけれど柴の戸を
とづるはをしきつきのかげかな　伊豫　越智龜代子

月夜よし夜よしとかたる人もなし
かげしづかなるわかいほりかな　松山　佐伯きぬ子

まれにとふ人もまたるゝこよひ哉
つきすみわたるくさのいほりに　赤阪　河田いし子

隈もなく月はすみけりありとだに
しられぬほどのよもぎふのやど　本郷　横山柳子

すま明石なに求めけんしづけさに
こゝろもすめるあきの夜のつき　日本橋　諸井久良子

よのちりにけかれぬ庭の苔の上の
つゆきよらなるつきのかげかな　三河　永井さい子

かけ清きつきよりほかに友もなし　出雲　山根久子

うきよをよそのくさのいほりは

しつけさを心とすめるやどなれど
　こよひのつきにともぞまたるゝ　岡山　降田槇子

（以下原稿到着順）

かくれすむ庭のむくらをよこさく
　たつれかほにもてらすつきかな　田代綾子

さひしきにとふひともなき住家こそ
　月より外にともなかりけれ　中村露枝子

たつねくる人もなきやにすむつきは
　ひかりまされるこゝちこそすれ　高　やす子

のき近きかけひのみつはおとすみて
　こけちしつけくてらすつきかな　淺井靜子

まつかぜの音つれたえてしはのとも
　つきすむ夜半そたのしかりける　淵本家露子

まつ人もさらになけれはやまのはの
　ひくゝなるまでつきをみるかな　友永章子

くさの庵ゆふかぜきよきたかれより
　しばの戸さしていづるつきかげ　那須昌子

風ならでとふひともなきかくれ家に
　うきよのこともとすめるつきかげ　村崎包子

靜かなるおのがいほりはひとりたゞ
　くもりなきよのつきぞともなる　黑田明子

人しれず世をのがれだるかひありて
　ひとりみやまのつきのさやけさ　虎口資子

八重もくらしげれるやどはさしのぼる
　つきのみひとりかはらざりけり　佐々小琴子

月かけはおなじひかりとおもへども
　とふひともなきやどのさびしさ　佐々有鄰子

かくれすむいほにも月はかくれなく
　すめるかげこそうれしかりけれ　溝口貞子

さちはてし柴のとほそにかけすみて
　つきより外のこともとしもなし　本庄志稚子

八重もくらしげれるにはのま清水に
　すめるもさびしあきの夜の月　山田稻子

ありとだに世には知られぬわが宿も
　くまなきつきのかげぞもりくる　河口愛子

あれはてゝとふ人もなき草のいほり
　つきのかげのみてらすあはれさ　内海順子

訪ふ人もなきわかやどのよもぎふに
　かげすみわたるあきの夜のつき　立田原國子

ちりの世をのがれてひとりおく山に
　木のまをもるゝつきをみるかな　木村國子

世をすてゝみ山のおくにすむ身には
　たゞつきのみぞ友にはありける　小笠原ひろ子

淺ちふのやどのほそみちうもれても
　つきはまよはておとつれにけり　立田原宮子

たゞひとり世をあき風のわかやどの
　にはのあさちにつきすみわたる　小笠原元子

人もこぬあさちかはらのわが宿を
　なさてつきのみひとりとふらん　立田原直子

あちきなきよをばへたつる柴の月に
　こゝろたかくもやどるつきかな　田中すゞ子

世にしれぬかくれがながら久かたの
　つきのひかりはへだつこともなし　名取よし子

のかれすむこゝろかゝれと限ふかな
　くまなきつきのかげを見るく　坂田きみ子

世ばなれでせはきかこひの内ながら
つきみてひろくゆくこゝろかな　賀茂笹子

しら露をたまと見るまでみがくなり
よもぎがやどのあきのよのつき　河合ぬひ子

月のほかさしいるものはなかりけり
ひとりふみよむまどのあたりは　服部鳳子

月ならでひともとへかしまつがきに
かぜもおとせぬこよひばかりは　伊東千代子

人ふまぬくさのゝきはにつゆのたま
しげはやされるつきのさやけさ　伊東いさ子

とふ人もなきやまざとのわがいほに
さやかにてらすつきのしづけさ　岡伊勢野子

つゆしげきくさやに一人すみわたる
つきこそいほのあるじなりけれ　山田靜子

人とはぬよもぎるやどのさひしさも
なれてはすめるつきのかげかな　山田婦美子

草の戸にうき世を餘所と見るつきは
こゝろもそらも澄みわたりけり　兒玉千賀子

さびしさに柴の戸あけて出てみれど
つきより外にとふひともなし　畠山百合子

まれにたにとふ人もなき柴の戸を
おとなふものはあきの夜のつき　畠山千代子

浮世をばそむくさなしにおのづから
すめばぞつきのかげもすみける　畠山雪子

かきくもる圓生のたけのそよさたに
つきもことゝへ夜はのねざめを　畠山榮子

世はなれし深山のいほにさすつきは
いひ知らぬまでさやけかりけり　喜瀬子

のがれすむ身のかくれ家をあらはにぞ　下元もと子

世のちりを拂ひてすめるわがいほの
くまなくてらすあきの夜のつき　志賀多久子

今はとて問ふべきひともあらがきの
木の間にはるゝつきのさやけさ　佐加井そと子

とふひともなきしづかなる庵なれば
ひまもるつきのさしてけるかな　山田きよ子

よのちりを草のいほりにさけしより
てりまさるらんあきのよのつき　高厚まつゑ子

人とはぬしばのいほりにひはくれて
こゝろのまゝのつきをみるかな　田坂芳子

露しげきあさぢがやどのゆふつきは
さしいるものはつきのかげかな　高原まつゑ子

世のちりをさけしむぐらの柴のとは
うきよのほかのながめなりけり　椎野ぬき子

やま里のさびしきいほとあきのよは
つきかげはかりすみわたるなり　駒澤まつ子

浮世をばのがれてもなほ見ゆるかな
てらせるつきのかげぞなかしき　河村君子

人とはぬこけむすいほによもすがら
こゝろのきよきつきのひかりは　池澤天與子

人とはでかたらふものもなきいほに
ひとりさやけきつきをみるかな　川田八重子

しづかなるうき世をよそのわが宿は
われはかほなるつきをみるかな　吉田ひさ子

ちりのよをのがれすむこそ樂しけれ
つきより外にとふものもなし　道旋彌榮子

うき世をばよそに住みなす我いほは
さやけきつきをわがともとして　中津千野子

づきのひかりもてりまさり見ゆ

ゆふされば とふ人もなきわがいほは
　つきよりほかにとふもなきかな　佐藤きみ子

とうひとの影こそなけれてるつきは
　すくれてきよしよもぎふのやど　大亦たか子

尋れくるひともまれなるわがやどに
　のきばをもれてつきぞ入りくる　井上てる子

むぐらやにともまつ夜中の月かげは
　しもやおけるとみゆるしつけさ　禿貞澄子

みやこにていとたしなめる花よりも
　ひさしほゆかしやまさとのつき　齋藤みさを子

浮よをはよそになしたるわがいほは
　てるつきさへもくもらざりけり　三野てい子

人とはぬやどをもくらのとち果てゝ
　いとゞさびしくすめるつきかな　田中睦子

のきはもる月のひかりのさやけさに
　ひとりこゝろをすましつるかな　長澤いゑ子

世をすてゝ友なきやどのすみかには
　つきをみてこそたのしかりけれ　服部倫子

人とはぬむぐらのやどにをかしきは
　のきばにさゆるあきのよのつき　德永萬壽子

よもすがらひとりのみ見るあきの月
　かたらふ人のあらばこそあらめ　德永廣子

うき世をばはなれてこゝに詠むれば
　つきもこゝろもさやけかりけり　小森田輝子

人とはぬむぐらのやどのさびしさも
　ひさしほまさるあきのよのつき　小森田初子

世をすてゝ一人すむ身もこゝろのみ
　こよひはつきにうかれけるかな　佐藤玄子

かれてより一しほまさるながめかな　澤田春子

　ひとりはおしきあきのよのつき

やまさとのはにふのこやにさす月は
　むかしながらにふつくゑのとも　吉田政榮子

とふ人もなきくさの庵にかけさして
　つきはしたしきともなりけり　河原芳子

世の中のうきをばよそにしらぬ身を
　すゞしくてらすあきのよのつき　橫手たつ子

とふ人もたえてあらやにうれしきは
　ねやもるつきの秋にぞありける　田代艷子

世はなれし月のひかりはかくばかり
　さやけきものとおもはざりしを　吉岡欣子

世のちりを厭ひはなれてみるときは
　いよいよきよしあきの夜のつき　吉岡すみ子

花さけご訪ふひともなきよもぎふの
　いほにもやどるあきのよのつき　失名

よの中をそむきし身にはさやかなる
　つきのひかりぞしたしまれける　武田榮子

しづかにとのがれて住みしわが庵を
　かすかにてらすあきのつきかな　上村ちさ子

かくれ家としりてやてらす影さへも
　いとさかすけきあきのよのつき　上村英子

あはれとも見よやみやこのとも人よ
　わがやまの端につきいでにけり　高橋矢須子

かたるべき友もなければすみわたる
　つきのひかりにふみをこそみめ　高橋天賴子

かたるべき友もなければたゞひとり
　たかれにすめるつきを見るかな　杉村壽賀子

すゑながきうきよを他所のわが庵は
　ともしひならぬいさよひのつき　内野千代子

つれ〴〵と涼しきかぜのふきまはし
ながむるそらのつきのさやけさ
上林玉子

世はなれてしつかに住める草の庵に
ひかりもきよくやどるつきかな
坪田きみ子

まれにだにとふ人もなきわがいほに
夜ごとさしいる月のかげかな
來栖登美子

いほりには訪ひくる人もなきわれの
こゝろのちりをあらふつきかな
大谷よし子

あしひきの山ふところのひとつやに
こゝろくまなきつきをみるかな
遠山たゞ子

よはなれししはの打戸をとふつきに
わがこゝろまですめるよはかな
溝口留子

世をいとふかくれやなれど秋の夜は
つきにこゝろのひかれぬるかな
東野さく子

あさちふの庭のやりみつおとふけて
いよゝすみゆくあきの夜のつき
津村さみ子

夢されはくさのいほりにてるつきの
いよいよすみてかけのさむけさ
久米貞子

のかれすむ我いほなれとこのころの
つきにはとものまたれけるかな
林ひさ子

人はなほうき世なからになかむらん
むくらかやどのあきの夜のつき
二宮菊枝子

靜けさをこゝろとすめるわかいほに
こゝろのちらぬつきをみるかな
濱さみ子

月のみはうれしかりけりとはるゝを
うしとのかれしやまのいほりも
森琴子

山さとにたゞひとりすむわかいほも
つきはわすれすおとつれにけり
田中ふさ子

露をそふまかきのうちのかげ見れは
山崎ちよ子
ちりをはなれしつきやとりけり

露ふかきむくらのやどのしつけさは
つきよりほかにとふひともなし
野中朝子

月夜よしひかりきよしとなかむれは
しつけさまさるわかいほりかな
二神ちよ子

かけきよくさしいる月をともとして
ひとりふみよむくさのいほりに
千代田たき子

さひしさは常になれたるかくれかも
こよひのつきにともそこひしき
横山寸賀子

浮世をばとほくはなれしいほなれど
なほ捨てがたきつきのいろかな
加島みつ子

虫のねもさひこそまされ世のなかを
のかれてすめるわがやどの月
安齋しげ子

世のなかの人もとひこぬしはの戸に
さし入る月のかけそうれしき
舘脇ます子

みるほとは世のうき事もわすられて
つきすむやどぞうれしかりける
吾妻ちか子

世のちりをさけしやとにも秋の夜の
つきはさやかに澄みわたるなり
荻原章子

しつけさをこゝろとすめる我いほそ
こよひはつきもすみわたりける
戸塚てつ子

淋しさをこゝろとすみしおくやまに
うき世はなれしつきを見るかな
伊賀なを子

いつまでもかゝれとそ思ふ風おちて
つきしつかなるよもきふのには
香川穎子

世のなかをへたつるかとの松か枝に
きよくもすめるつきを見るかな
香川千枝子

事しげきみやこのひとに見せまほし
ひとりすむやのあきの夜のつき
綿野りき子

世をいとひひとりすむ身はてる月も
いとゞあはれにおもほゆるかな　寺岡むつの子

ひとゝはぬよもぎの庭にてるつきは
世すてし人のこゝろにやあるらん　林環子

ひとりすむのきはの松のこずゑより
しづかにすめるつきのかげかな　隈本文子

ふみ分けてとふべき友もなき身をは
なぐさめがほにてらすつきかな　度本翠子

まつかぜは浮世のくもをふきはらひ
しづけくすめるあきの夜のつき　吉崎世根子

うきよをはよそに見なして山さとに
ともとちぎらむあきのよのつき　香川いく子

しづかなる遠やまさとのしづのみを
とひくるものはよはのつきかげ　香川あき子

風ならでとふひともなきわがいほに
のきはへだてぬつきもありけり　千石素子

かくれすむ草のいほりをひたすらに
さやけくてらすあきの夜のつき　青木たま子

きらぬだにあさぢが宿のさびしさに
ひときはすめるけふのつきかな　日野たき子

おひしげるよもぎがなかの庵なれば
さやけきつきもつゆにやどれり　大谷津峰子

とふひとのかげたにみねぬ秋のよは
つきのみわれはともとなしてん　宇多田楊子

なく虫のこゑより外におともなし
つきしづかなるあさぢふのには　金森俊子

世はなれてとふ人もなきいほなれば
のきはのつきをともとこそすれ　北原對子

なり〳〵は虫もおとなふこゑのして
すみゆくつきをひとり見るかか　北原孚子

まつかぜの音なふひともなきやとに
つきもこゝろのうちにこそすめ　高砂喜代子

ひとり居て秋のあはれをなげくとや
くさのいほりにつきやどるらん　高砂菊代子

たまあへる友なつかしくなりにけり
あまりさやけきつきにむかひて　新泉松子

かくれ家は秋こそよけれよのちりの
ほかなるつきをひとりながめて　新泉翠子

世のさがをのがれて住める我そでに
露おきそへてやどるつきかな　泉さゐ子

おもひ出もなき身となりてこの秋は
こけぢしづかにつきを見るかな　泉久真子

よの中をおもひはなれていまぞしる
つきにこゝろはなかりけるよと　北條たか子

浮よをはいとひてよそに住める身は
つきより外にとももなきかな　古宇田菊子

まつ風をしらべのともとしつる身は
こゝろしづかにつきをみるかな　川端まさ子

よのうきをきかぬ我身にうれしきは
まどかにさゆるつきのかげかな　北村ます子

訪ふ人もなきやまさとにすみぬれば
夜ごとにつきをともとこそ見れ　川上てつ子

よのちりをさけて山家にすみぬれば
夜ゝ見るつきもいとゝさやけし　福島きた子

すみかへしかた山かげのいほりにも
むかしのまゝのつきぞかなしき　熊谷文子

露たゝむくらしげれるかくれがも
なつかしくみゆるあきのよのつき　藤村識子

世のちりをのがれてすめる我いほは
つきよりほかにとふものもなし　尾崎嘉子

とふひともなき我やどをうれしくも
さやかにてらすあきの夜のつき　尾崎秀子

とふ人もなきみやま路のわがいほは
あきの夜な〲つきぞともなる　富田郁子

人とはぬむぐらのやどはくもりなき
月こそよゝのともにぞありける　楠しづ子

かりのよをへたてゝすめるやま里も
つきにはかりはとはれけるかな　福島進子

月にだにとはれざりせはやへむくら
しげれるやどにあきをへましや　氣賀壽美子

世の外のわがかくれがもつきのみは
よひ〲ごとにおとづれてけり　都水春子

ひとりすむ野なかの菴の破れびさし
もりくるつきのかげぞさびしき　目黑佐喜子

うきくもゝかゝらぬのきの月かげも
ひとりみるよはさびしかりけり　田村多豆子

世のなかのあきにもれたるわが庵は
つきのすむ夜もとふ人のなき　村上みさを子

世の憂をさけしやどをもしらすして
清くてり添ふあきのよのつき日　高岡靜子

しかすがにもの哀ゝれはまさるなり
つきすみわたるわびすみのいほ　北島松子

月さゆるかりのいほりは柴の戸を
さゝでぬる夜のおほくもある哉　北島功子

荒れはてゝとふ人もなきやどなれは
すむ月きかげをともとおもはん　田中つれ子

虫の音はいよ〲たかしさよふけて
つきしづかなるよもぎ生のやど　澤田壽子

世を捨てし草のいほりのおきふしは
わきてさやけきつきを見るなり　竹村竹里子

うき世にはかゝるくもなし草のいほ
ともとたのみのつきをながめて　竹村伊智子

九月五日兼題　水害を見舞ふ文

天　甲府市山田町　名取正代子

一降ごとに、涼しうなり行くらんとて、いとゞ樂しみ居り侍りつる此頃の雨の、三日五日をふれども、をやみなくて、いとゞいぶせさやる方もなく侍りしを、いよよ降續き侍るまに〲、こゝかしこの川々水がさいたく増りたりと聞侍るにも、御わたりはいかゞあらんと、案じ煩ひ居り侍りしに、又もや昨日篠つくばかり、降りしきりたるまゝに、今朝は某の川みなぎりて、館も床の上迄浸り侍りぬとか、いかに驚かせ給ひつらん、されどとくよりさる事もやとおぼし給ひてか、何くれの御用意も行届き給ひつれば、いさゝか御怪我もおはしまさずさる方に立ちのがれ給ひしよし、其地の知人より承り侍り、まづ〲心もおちゐ侍りぬ、さりながらいまだみそらのけしきもたゞならず侍れど、あやふからざらんほど、とく〲こなたへものし給はずや、けふはとりあへず御食の料にとわりごなどもたせまゐら

せ侍れど、きこしめし給ひてよ、なほ何くれと、一時御不自由にもおはし給ふべけれど、御用の向、使のものに一々仰せきけられたく、なほ御有樣をもつばらにもらし給はんことをねぎ奉るになん、まづは此事のみ、あなかしこ、

地

長野縣北佐久郡布施村　中澤千野子

小やみなくふり續きし雨の、夜べよりはひと際すさまじうかてゝ吹きすさぶ嵐に、時のまもなく此處彼處の堤は切れ、橋は落ちぬとの噂、わきて御地は名にしるき千曲の川へりなれど、田畑は申すまでもなく、町も半は水に浸され、流れし家さへ澤なりとか、されど、御住居はひと際高き處におはせど、さだめてつゝがなくおはしまさんと推し侍れど、御所持の御地處などいかならんと、いと心もとなく、取りあへず下男を使はし侍り、ふさはしき御用もおはさば、御心おきなく、幾日なりともとゞめおき給へ、いく分かの御手助ともなり侍らむ、いと〳〵うれしうこそ、

人

遠江國磐田郡中泉町　山下やよ子

海山遠くはなれゐ候ふ身は、さらぬ事たに御わたりとし云へは、まづむねのつぶるゝに、こたひの出水は、近年ためしなきほとにして、なかれしいへも、おほれし人も、すくなからずときくからに、ひと心もとなければ、何もなにもとりあへず、御やうす伺ひまつるになん、

人

山口縣都濃郡末武下村　村上みさを

過ぎし日の水の災は、御許は殊に甚しと承りぬ、いかむかり御心をくだき賜ひつらむ、家もながれ、人もおほれぬとかや、おもひやるも身の毛よたつむかりになむ、この里も川々水いさゝかは出てぬれど、御許の事しるしたる新聞紙のうへに、くらべては、ものゝ數にも侍らざりき、此頃はいかゝましますにか、もとの御家居にはましまさじと思ふにも、胸つぶるれど、とぶ鳥のはがきもて、御ありさまうかゞひ申すになむ、ひとことのかへりごとなをしみ賜ひそ、あなかしこ、

田中すゞ子

土さへくさるさかやいひつたへけむ暑さはけしくて、學びの道にも行きなやむ折から、まちにまちにし村雨の、なしげもなうふりそゝぎてこそうれしさもよろこばしさも思ひつれ、こう日毎に降りつゞきては、葎の宿の一入いぶせくて、心もうちしめるつれ〳〵に、かたへなる新聞紙さりて讀みもて行けは、御地には先つ頃よりたゆまなき時雨のため、大水出でゝ、家屋の流れたるものいさ多く、人畜のきず負ひたるさへありつるよし、はからすも承知いたし、いみじう驚き入り侍りぬ、さるにても御宅はいかにさ、心も空に、父母の前に行きてこの由語り侍りしに、御すまひは、町より道のほどもへだたりて、土地高き所なれば、さる事の憂は侍らじ、必ず心をないためそさ、こま〳〵さ申聞かせられたれば、御別條なくおはしますさは信しながら、おろかなる心

の、なほ安からでなん、例のせまきむれに、さま〴〵思ひわずらひ居り侍るな、この手紙つき次第、とく御返事賜まりたくねぎまゐらす、心もとなさのみ先たちて、拙き筆をかへり見る暇なければ、直ならぬ筆のいとゞ亂れて、前後わかりかたき處も多く侍らん程に、よきにはんじさせ給へや、末ながらかぞいろの君にも、よしなにつたへたまひてよ、先つは取あへず御見舞まで早々かしこ、

河村君子

世直しとは誰か言ひそめけん詞ぞや、ことしは水入のさわぎ、新聞紙にひきもきらざるに御地は殊更なりと見侍りぬ、唐國の禹とか云ひけん人にても、この代にありせば、かゝることもすくなからましと思ふもおろかなるわざにて、定めて御許様には驚きあそばされしことゝ察し申し候、御家内様にも、別にこれがため御さはりも無之候や、げに風ふきの見舞と俗に申すごとく侍れと、遠く隔り居るものゝ致し方なく、先は御伺ひまで、かしこ、

佐藤きみ子

さきつ日よりふりつゞき候に、けふはあさより雲晴れて、恰もほいろの中にて蒸さるゝ心地なり、夕方よりはいと堪へかね、涼みがてら秋月清子ぬしの許を訪ひまゐらせ候處、四方山の物語の末、承れば、思ひきやこたびの雨に、御地にては諸の川の水まして、橋落ち、家藏など押し流され候よし、夢かとばかり驚き入りまゐらせ候、御一門様には御怪我もあらせ給はざりしか、ことに年老い給ひし母君まします御事とて朝夕御案じ申上候、漸々承る處によれば、御一家はいづ方よりも小高き處に御住家を設けさせ給ふよしなれば、不幸中の幸と、皆々にて御噂申上候、私も一度まかり出で、何かと御不自由の御事を、御世話申度山々存じ候へとも、悲しや今は千里の遠にはなるゝとて、行も叶ずいと口惜しき限になん、都に御用もあらせ給はゞ、御心置なくのたまはせられ度念じまゐらせ候、過ぎし昔は、同じ學びの舍にて螢雪の苦を積み、ことに御許樣と妾とは、日頃より姉と妹とまで、友垣などにはやされしほどなれば、一しほ御案じ申上候まゝ、少しく御片付に相成候はゞ、詳しき御樣子御洩しのほど、偏にねぎまゐらせ候、時節柄諸の君には御身御大切御攝養専一に念じ上候、あら〳〵かしこ、

三野てい子

さらぬだにあはれまさる秋の日に、打つゞく此頃の長雨、なべての人の心やすらぬに、わけて川そひの御住居、いかゞと心に懸り居り候處、はたしてまがつひの神のあらびにて、御地千草川の水あふれ、その害夥しくいとも〳〵あさましき有さまのよし驚き入候、然し御家内樣には御無事に御立退き遊ばされ、誠に御不幸中の御幸と存上候、定めてかりの御住居にて、さぞかし御不自由の御事と推し參らせ候、すみやかに參上致したきは山々なれど、なにを申すも女の身のかひなさ、御多忙中かへりて御手まといとも相成り候はんと、わざとさしひかへ候、かねての出入の若者を差上げ候間、御心置なく御使ひ遊ばされたく候、先はとりあへず御見舞として、日用品少々進呈仕候、御納め相成度候、次に私宅は少しの害も御座なく候間、御安心遊ばされ度候、何れ近々に參上御伺ひ申上ぐべく候、時候不順の折柄、御一同樣御保養の程祈上げ參らせ候、あら〳〵かしこ、

田中睦

承り候へば、一昨夜何川の堤相切れ、川水御地へ溢れ來り候よし、昨日承り夢かとばかり打驚き、早速御見舞狀差出し申候處、御宅既に相浸り候て寄付申さず、皆樣は御二階住居と申事にて、舟の用意も御坐なく候まゝ、引取り申候、今朝に至り、水少し引退き候模樣承り、下男を以て舟にて御見舞申させ候、何分俄の事に候へば、御狼狽なされ候ひしならん、皆々樣御別條御ざなく候哉伺上げ候、此のまゝ水引候はゞ宜敷候へども、再び水益増し候樣の事御坐候ては、危く存候まゝ、御老人并に御子達樣此の舟にて逃出でさせられ、むさくろしくは候へども、妾方まで御越しなされては如何、取敢へず御見舞さして、御結び一重進し上候、先ば御見舞までかくなん、あなかしこ、

徳永廣子

先ごろの霖雨、此方わたりはさほどにもあられども、東國はあまたの

家いろいろのもの洪水にながれて、あはれなるさまなりきとうけたまはるぞがなかに東海道のあたりは、汽車道くづれ、電信柱たふれ、ことにさわがしかりきと聞き侍りぬ、御身のことをおもひ出で、一しほ氣づかはしくおもひ侍り、御もとには此のなんをのがれたまひしか、御たより伺ひて妾が心をやすめんとおもひ、伺ひ侍りぬ、御かへりごとまち奉るになん、

佐々有鄰子

此ころをやみなく降りつゞきたる雨に、いかがわたらせたまふらんとおもひ侍りて、門に立出て見わたせば、千町の田面は、鳰の海諏訪の湖もかくやあらんとおもふばかりみなぎりて、島山のごとくみえつるは其村彼里にかあらんとうちながめられ、侍りしか、貴嬢のすまはせたまふ御郷も、此の島山のごとくみゆるかたにおはしませば、いかがわたらせたもふらん、心もとなく侍れば、直にはせまゐりて御けしきうかがひ奉るべく侍れど、かひなき女の身にて、おもひやり奉るのみなれば、召仕の男を小舟に掉させうかがひまゐらせつれば、何事をもさしおかせたまひて、輕舟に召させたまひ、妾が山家に立のかせたまへ、いそがせたまへ、そこそこの消息御ゆるしたまへ、あなかしこ、

河原よし子

承はりはべれば、昨日たそがれ時より、夜に入りての大水には御地もいたくあれそこなひ候よし、まして御家は土地も低く流れにちかくおはせばさぞや一方ならず御驚きあそばされしことと推量りまゐらせておそろしうなん、いかで、御家にはその禍をのがれさせたまひしか、さそくにまかりいでゝ伺ひたうはべれど妾かたもすこしく打さわぎ候ままなにかと取りまぎれつるにほいなくもゐまゐらず、文して御見舞申すになん、かしこ、

吉田政榮

あまつ神、ことしは如何に我日本に禍したまふにか、あちこちに水害の沙汰あり知らぬ他國はさのみともおもはざりしも、今朝新聞紙を見れば、御地方も過日來降りつゞきし雨に何々川の水あふれて、御宅近くまで浸水いたし申候由、幸にも御宅も少し高き岡なれば、さまでの御不自由も御座なく候はんか、御田畑の害やいかならん、殊に御平素の御氣質として、りさいの人々の御世話にさぞやさぞ御氣をつかひ給ふ事ならん、立つ秋の時候もなんとなく不順にて水害後は惡しき病も流行いたし申候由なれは、ずゐぶん御身大切に遊ばされたく、陰なから祈上候、早速御見舞に參上いたすべき筈なれど、御承知の無人ゆゑ失禮をもかへりみず、手紙を以て御見舞申上候、かしこ、

吉岡歌子

降りつゞく日頃の雨のわびしきにつけても、川ちかき御宅のあたりいかならんとのみ氣遣れ侍りしを、承れば夜べより非常の大水にて、さしも宏壮の御家居さへ、處々破損いたし候ひぬとか、いとゞ驚かれてなん、いづれも樣には如何、御調度どもゝぬらさせたまはずや、さりあへず男の子三人まゐらするを、萬の雜役に召使はせたまへ、尚出水後は濕氣勝にて、かよわき御身には誠によろしからず侍れば、私方へ御渡りあらせられてはいかに、御混雜の折から、御不自由の物は、何なりとも彼の男子等申遣はさなば直にさし上げ申すべく、委しくは彼等よりと申殘し御見舞迄かくなん、

内野千代子

啓し上げ參らせ候、此度は近年になき大水の由、日々の新聞にて承知仕候今日は昨日よりもとたましひも消ゆる計りの慘狀、はるかに思ひやり候だに身も冷ゆるやうに覺え申候、御全家樣、殊に御老人樣には如何在しまし候か、深く〳〵御按じ申上候、及ばずながら御近村にて候はゝ少しは御助勢も申上ぐべきをと、實に本意なく存じ候、未だ減水にも至らず候や、何卒一日も御早く御舊宅へ御かへりかなはせられ候やうにと、神かけて祈り入候、何なりとも御入用品あらせられ候はば、御遠慮なく御仰せ越し下されたく先は御見舞まで、早々、かしこ

山村睦子

この頃の長雨、いつ止むべしともなく、ところ〳〵大水のわざはひ多

しき聞きて、當地先年の水災の事ども思ひ出でられ、日々案じ暮し候頃しも、今朝の新聞に、御地も夥しき水害あり、人畜にはさしたる障なきも湖の水ます〳〵増して一夜の中に浸水せし家數十軒、又諸川の堤切れて、打ち流されし家もありとか、善き事にも悪しき事にもあれ、御地の事とし申せば心にのみかゝり候を、ましてかゝる大害あらむとは、夢にも思はざりし處、暫しの程は魂も消ゆる計にて物もせられず、憂の氣色人々に怪まるゝ程に候ひしが、かくても甲斐のなき事よと心を取り、直し早く御見舞状を捧げむと思ふにつけても、御子様達は如何ばかりあわて遊ばされしならむなど思へば、にぶき筆はいよ〳〵うちしぶり候、その後空の晴れやらぬのみか、雨勢ます〳〵はげしく候へば、終には如何にならむなど思ひやり候だに、いとも〳〵うたてき心地して、身の毛もよだつ計に覺ね候、御全家様には、山手の御屋敷に御立ち退き遊ばされ候とのみは承り居り候、その後如何にさう〴〵しく御過しなされ候はむなど思へは、一日も早く御見舞に伺ひたく存じ候へども、如何にせむ二三日以前より試驗にて得參らず、いとも〳〵本意なく、失禮に存じ居り候、いづれ試驗の濟み次第に參上仕るべく候まゝ、御母公様へも、宜しく御聞え上げ下されたく候、先は取り急ぎ亂書のまゝ、御見舞申し上げ候、かしこ、

沼原菫子

過ぎにし日より、降りつゞきし大雨に、人々もいかゞなりゆくらんと、あやぶがりつゝありける程に、いとにはかなる山水の溢れに、先胸さわぎ川によりたる御館を案じ侍る折柄、堅固なる御後の橋も流れ、水の猶をちこちの堤も崩れぬと、人の語り合ふを聞き、いと心元なく驚き侍り。されど、幸ひにも、御館には御別條おはさぬよしなれど、さだめて井もひたり、御かしぎのわざも、水なくて御不自由ならんと察し、取りあへず、一舟はしたを共に持せ送りまゐらすれば、何かと御用のたまひ付けさせ玉ひて、御調はせ玉はざる者は、仰せこさせ玉ひてよ。和泉地方は、幸ひ大害も侍らざりしが、所々の國々には、一家、あるは、一村流れ溺れしあはれさ、新聞紙上にて見、無慘にも又中々に憐れにかなしき極みに侍り。天災なれば、いたし方も侍られども、いと〳〵うとましき限りになん。先は御見舞までかくなん。かしこ。

上林暉子

御忙しくおはしますらん御中より、風のたよりに聞き侍る言葉に、昨日は御地は大あれのよし、さこそ御驚き遊ばし候ふらんと、おしはかりまゐらせけさの新聞紙を見うけ侍れば、御むらかたは、流れ家つぶれやなどありし由にて、ひたふるに御案じ上げまゐらせ候、御障りもあらせられず候や、早速さんじ御伺ひ申すべき處、かへつて御じやまと存じ、なめげなる事ながら、出入の大工伺はせ候まゝ、相當の御用向き御申付給はらば此上なくうれしく候、さて此ひまな一かご御見舞の印までにこそ、

坪田きみ子

文して申上まゐらせ此頃の長雨に、川水やう〳〵まさり候處、昨夜の暴雨水嵩いみじう、まさりもてゆき、承り候へば、御地堤坊破壞致候ため、あるは家を水中に沒せられ、あるはあたら水死を遂げられ候向も有之由、あさましききはみに存じ候、御屋居は高地におはしまし候へは、さる御事はもとより有之ましく、存じ候へと、又多少の浸水はまぬかれざる事に候はん、どなた樣にも、御別條あらせられず候哉、皆々しん配罷在候、甚粗末の品に候へ共。御見舞申上度候まゝ、本の御しるしまで、一品まゐらせ候、御受納被下度候あら〳〵かしこ

安齋しげ子

雨風いとうあれて、御地の川々一時にあふれ、御邸もひたされ候よしにて、御一同樣高燥の土地へ御立退き遊ばされぬとか。はるかに承り候だに、身もひゆるやうに覺ね候、さても其後はいかに、御老母樣にもさしたる御障りもおはしまし候はずや、追々冷々しう相成り候折からいかばかりか御心細う思召候はんと、推しはかり參らせ候、御近傍にも候はゞ、少しは御助勢も申上ぐべく候を、かくへだゝりては、何事も心にまかせず、たゞ〳〵打よりて御うはさのみ申しくらし居り候、未た減水の模樣も見ね候はずや、何卒一日も早う御舊宅へ御かへり遊ば

され候事かなひ候様にと、朝夕いのり入りまゐらせ候、かしこ、

寺岡　むつの子

此程の大雨、いつやむべしとも見ね侍らぬは、御地は川べの御すまひいかゞと御案じ申上候ところ、新聞紙上にはたして御里の川堤やぶれ、人家も殘りなく流れ、失せ候よし相見ねさぞかし御こまりの事と拜し上まゐらせ候、何分激水の事に候へば、御ふせぎの道もあらせられず、くさくさの御寶物もむなしうならせ候事と、傷はしく存じまゐらせ候、しかし御家内皆々様は御怪我もなく御立ちのきなされ候哉御伺ひ申上候、さしあたりむしろ睹腕手桶のたぐひ、取りつくろひ進じ參らせ候、此外何なりとも御入用の物之あり候はゞ、御遠慮なく仰下され度待ち上まゐらせ候、かしこ、

大谷津蜂子

こゝろいそぐまゝに、亂筆はゆるし給へや。さて昨日の朝まだきより、小やみなくしのつく計りに降りしきりたる雨に、遠近の道筋、いづれもいみじう水出で、堤うち崩れ、人家の押し流されたるあるは郵便電信の通はざる所などもありとかうけたまはり侍りぬ、所謂水分の神のわざとは言ふめれど實に人傳にきゝてさへいまくしき事にこそ、刀自は大川のほとりに住ひなし給へれば、如何おはすらむいと心もとなきまにく、とく御有樣うけたまはらましうて、かく一ひらのはしり書を捧げ奉るになん、あなかしこ、

宇多やう子

今年はいかなる年なるらん、秋は秋の氣候にもともなはて、さながら五月の空と思ふ斗りにかき曇りて、あらくしく降りしきる雨はいと心ぐるしくも覺ね終には山水の溢れとも成ぬるかな、河によりたる御住居は如何おはしますらんと思ふ折ふから、御邊近き橋も堤もおしくつされんなど人々のいふをきゝては、いと驚かれて御身にあやまちあらすやと心のとめがたく思ひ侍りぬ、尙ほ降りつゝく雨は一しほの水ましぬらんよろつに心つけ給ひてよ妾はたゞ空のみうち仰ぎとく空晴れ渡りて君が御心やすめよと、ひたすら祈り奉りてなん、かしこ、

北原季子

御地は近來にまれなる大風雨にて、其上死傷人さへいでき候よし、只打驚かるゝのみにて、御見舞の申しやうだにこれなく候、殊に本町わたりに高き土地にて、舟になさしてゆきゝするなど、實に聞きも及ばぬ事のみにて、其慘狀思ひやられ候けさ程の當地の新聞により候へば、此事はやくもかしこき、天聽に達せられ、御救恤あらせられたるが、上侍從をまで差遣はせられ候よし、今更の事には候はれど、只々厚きみ惠のほどおしはかり奉るだにかしこきを、まして家居を吹上げられ吹流されはては居る所もなく、食いものもなき人々には、如何に嬉しくもあたゝかき涙にむせぶらん、實にありがたき御代にこそ、さるを御許様わたりは、こゝらとははなれさせ給ひたるが上、山へにもおはしませば、御風の災難はさけさせ給ひしならんと御察し上げ候ものゝいと氣づかはしう一同打つどひて御うはさのみ致居候、御老人様もおはしませば、さこそ御心細くて入られしならん、まして戀しきふるさとのひさし振案じ暮し侍り、御手すきにも御成り遊ばされ候はゞ、委しき御様子御知らせ下され度候、先は取りあへず御見舞まで、かしこ、

高砂きよ子

秋立つ日より雨勝にのみ降り暮らし、困じはつるよな、わきても昨日は杵をも流すといふらんばかりに、しばしも小止なかりしより、いづこの河もいちしろく大水となり、こゝに御地何河は名におふ程にいみじかるよしついに一の口提防も潰ねたりとの事、聞くさへおどろく胸つぶれ、御尊家あたりも川近うおはせばおぼつかなうみけしき御窺ひたしとあはたゞしう思ひ侍るも、途なる某川、俄かの洪水に水かさまさりて、すでに橋さへ落ちはて、渡りたねたるより、をみなの身にはいかにもせん方なく、其意を得ず、唯々かげにて、いかゞおはすらんさぞかし御なんぎの御事と心痛めつゝ居るのみ、今朝とく宿專より聞ね侍れば、御一同様御身の上には御變りなきよし、少しは心安う胸をさまり侍り、さりとはいへ古老の言に、「水は引きぎはに至りて瀨を

變ず」と今さてみ心ゆるし給はずずゐぶん御心置きの程、かげにてれんじ侍るになん、さて昨日よりの大水にて、皆々樣水中にのみおはし、さぞかし、食物飲水にもこまりしならんと推し侍るがまゝ、こゝに握飯一重、清水一樽、はした男に持たせ差上候間御受け下さるべくよろづは後より自らまゐりて、みけしきうかゝひ奉るべく先は文もてかくなん、かしこ、

森　琴子

御地方大水の狀況、新聞紙上にて承知いたし、おどろき入候實に未曾有之御事にて、其事狀遙におもひやり候だに、魂も消ゆる許に候、御邸も御ひたされ候由にて、船にて御立ちのき遊はし、當時はかりの御住居と傳聞いたし、家內壹同御噂のみ申し、深くふかく御あんじ申上候、御老人樣和子樣方には、格別御恙も在しまさず候や、御近傍に候はゞ、及ばずながらも御手つだひ申し上ぐべきに、海路遙かに隔たることとて、たゞ〳〵御あんじ申すのみ、如何とも致し方無之本意無くぞんじ居候、折柄秋も深うなり行き、朝夕の風は身にしみ初め、何となう物淋しくおほゆ候を、ましてかりの御住居いかに過させ候ふらんと、こゝろもとなく候、少しは減水に至り候や何卒一日も早く御宅へ御歸り相成候樣、ひたすら祈入候とりあへず本日御見舞のしるしまでに、夜具壹組、鑵詰數種、通運にて御廻し申上候まゝ御落手被下度、猶何なりとも御用向も候はゞ御遠慮なくおほせ付られたく候先は御見舞まで、

菊池文代子

日々降りつゞく雨には、いとも困じはてゐ、けふはきのふよりと、しはしだにをやみなかりしもしろく、いつこの川も水あふれしにここに北上川は、近頃稀なる大水にて、たましひも消ゆるばかりの音、未だに減水せず、人々は安き心もなしと聞くだに身のけもよだつばかりになん、御わたりは、其川近くおはしませば、何地へか御立退き遊されしや、殊に、水は火よりも恐しと聞き侍れば、いかばかりかみ心細くおはしまさんと、推しはかりまつりてなむ、さりながら、長々と降りつゞきて、あまたの人の心ないためたれば、今よりは晴れなむと思へば、いたくなみ心いためたまひそ、つきては、此重物いさゝかなから、御見舞の印にとて差上侍りぬ、尙妾に叶へる御用もおはしまさば、何くれとなく、仰せつけられてよ、何も〳〵取急ぎ御伺迄、あなかしこ、

都水春子

此程より降り續きし霖雨に、遠地近地の流れ溢れて、川添の里、大方は家居を浸しぬと聞けは、流れ多かる御地は如何あらむと、危ぶみ居候ひしが、今朝よみし新聞紙の電報欄に御地は未曾有の出水にて、橋落ち堤くづれ家の流れしものすくなからぬ由相みゆ、驚き入候さりながら殊にすさまじかりしといふ某村は、僅か御住所とは間隔たり居り候と考へ聊安堵致し候へと猶御舘を始め御所持の田畠抔に　御障りもおはさず候哉亦皆々樣の御安否も氣づかはしく候まゝ、何卒こまやかなる御樣子、速に御示し被下度、只管御返事待上候先は取敢へず、御見舞まで、かしこ、

初學子

今朝の新聞を見候處、御地は暴風雨の爲め、諸川出水し殊に絹川の堤防破壞して家屋流失致し候由、實に驚き入り候、幸ひ御家は高處に候故大丈夫とは存し居り候へ共、絹川のほとりにはあれは、如何にかと御伺ひ申上候、新聞紙に續々と記載有る慘狀は見るに堪へかれ候、就てては、聊か御見舞の驗までに、味噌一樽、鱈鯛二尾、本日滊車便には差出し候間、御咲味可被下候、先は御見舞まで、かしこ

北島功子

此程より、小止なき長雨に、御地は殊に、先年のあとも御座候へは心ひそかに案し煩らひをりはべりし折柄、今朝の官報にも承れは御近傍一圓浸水の由いといたう驚入まゐらせ候、日比よりそれ〳〵御防禦の御準備とゝのはせらるゝ御家庭とて、御老人樣はしめ皆々樣には、み恙なく御避難あそばされ候事と存じ奉り候、さりながら當年のは水勢殊にはげしき由に候へば、御邸宅田畠等に御被害の個所も、さこそと、推しあげまゐらせ候、遠隔の地とは申しがなら自然相應しき御用

も御座候はゞ御遠慮なく御申越したまはり度、まづは不取敢文して御見舞まであら〳〵かしこ

五月雨　村上周子

ふみ見るも筆とるもよしさみだれの
日をふるいほのつれづれのころ

秋風　同人

あまのこが夢をさましてよもすがら
おきかぜそよぐいそのなぎはら

さけさかな打句

さよふけてけしきも妙にさしのぼる
かげさへ明きなつのつきかな　同人

さをさしてけしきめでばや佐保川の
かぜのすがたになびく青やぎ　同人

峰松　谷口房子

春あきのはなに紅葉にあらそはて
みさり常なるみねのまつかな

海邊眺望　同人

青海原なみもさわかぬゆふなぎに
おきのとほやまあらはれにけり

遠村蚊遣火　同人

かやり火のけふりたゝすは木かくれの
さとはありともしられさらまし

隣卯花　同人

こかくれしまどもあかるくなりにけり
となりのうつき咲きそめしより

春人事　人

今日は田に明日ははたにとながき日も

暇かわさこそひまなかりけれ

夜花　同人

月かげのありとも見えすかすむよも
さすがに花はかくれざりけり

筆　谷口房子

筆ばかり世にめでたきものはあらじかし、花の朝月の夕は更なり、嬉しき事、はたうき事のあらんなり〳〵に、先づとらるゝは是なりけり、そも此の筆よ、その持つ人によりて、尊き字ともなり、めでたき畫ともなり、又妙なる文章ともなるなり、筆あればこそ萬代をへしむかしの事も、千里をへたつる外國のさま[illegible]、目のあたりみきく心地せらるゝまで明らめらるれ、さればかけまくもかしこき御あたりより、あやしき山賤にいたるまで、皆これの力にて萬の用を便じ心をなぐさむるなり、あはれめでたしともめでたきは筆なりけり、されど、妾のみは年頃したしみて、朝に夕に、嬉しきなりもうきなりも、手をはなたれど、心行くばかりの一ふしも書き　いでられざるこそ、いとあぢきなけれ、



三輪田眞佐子著

第八版

女子の本分 全

定價金二十五錢
郵稅金六錢

本邦固有の道德に基きて、我か國の婦女か盡すべき本分を明にせるもの、之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす。本書か女子社會に如何に珍重せらるゝかは、世間既に定評あり。敢て贅せず。再版三版忽ちにして賣り盡し、四版五版猶需要を充すに足らず、從て出れば從て盡き、諸孃が一日千秋を以て待ち給ひし第七版は今や漸く其成を告ぐ。購求せんとする諸子は、此の際至急申込まるべし。所載極めて廣大、試に其の目次を示さむ、

目次

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第五版

女子處世論 全

菊判美本

定價二十錢 郵税四錢

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徴し女子たるものゝ世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虚構の文字なし世の令孃達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 國光社

生田目經德編

標註 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもろの躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇専心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側にれきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

新刊

家庭の鑑

菊版美本　全一冊

定價金拾八錢　郵稅金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれは皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれは其情味の津々たる實に小說を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書冊無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）　國光社

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		
一冊	拾錢	
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十二年九月五日印刷
明治三十二年九月六日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地 並木良雄

發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）國光社

〔明治二十四年八月四日内務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可〕

（印刷所　東京國光社印刷部）